

家庭動物等飼養保管技術マニュアル

平成 17 年 3 月



はじめに

今日、国民生活の中で、ペットは単なる愛玩の対象だけでなく、生活に変化と潤いを与える貴重な存在として考えられるようになり、その飼育数とともに飼われる動物の種類も多くなっています。

しかしまた一方で、この対応に苦慮する問題も色々と増えてきており、このなかに犬猫以外の動物の引取りと負傷動物の収容の問題があります。

平成 16 年に都道府県等を対象に国が行った調査によりますと、法の規定に拘わらず諸種の事情から止むを得ず都道府県等が引き取った動物の種類は、犬、ねこ以外の哺乳類、鳥類、爬虫類合わせて、30 種に及んでいます。

また、負傷動物の収容にあっても近年の都市の開発化と車社会の進展に伴い、今後ますますその数、収容される動物種も増えていくことが予想されます。

そしてこれらの引取り、収容された動物のなかには家畜化されていない野生由来の動物や外国からの移入動物も含まれており、これらのものは飼育法が確立されていないことや、情報不足から、またその他の動物にあっても哺乳類、鳥類、爬虫類等全般的に網羅した飼育書が手近にないことから、この収容・飼育に当たって苦慮しているとの声を聞きます。

このマニュアルは、このような背景とニーズに応えることを目的として作成したものです。

このマニュアルが活用されて、動物愛護の推進に少しでも役立つことを願っています。

目 次

はじめに	1
哺乳類	3
Ⅰ. 哺乳類とは	3
Ⅱ. 種類ごとの個別事項	4
1. ウサギ	4
2. ハムスター	7
3. マウス	8
4. スナネズミ	9
5. モルモット	11
6. チンチラ	12
7. リ ス	13
8. プレーリードッグ	15
9. モモンガ	16
10. ニートリア	17
11. ハリネズミ	18
12. イタチ	20
13. フェレット	21
14. スカンク	23
15. ミンク	24
16. アライグマ	25
17. キツネ	26
18. フェネックギツネ	27
19. タヌキ	28
20. マンゲース	29
21. ハクビシン	30
22. ワラビー	31
23. ポッサム (フクロギツネ)	32
24. コウモリ	33
25. シ カ	34
26. ヤ ギ	36
27. サルー 1 (リスザル、マーモセット)	38
28. サルー 2 (タイワンザル、カニクイザル)	39

鳥 類	42
I. 鳥類の飼育管理の共通事項	42
II. 種類ごとの個別事項	45
1. フィンチ	45
2. カラス	51
3. カナリア	52
4. キュウカンチョウ	53
5. すり餌鳥	53
6. セキセイインコ	55
7. 中型インコ類	56
8. 大型オウム・インコ類	57
9. ハト類	59
10. ニワトリ	60
11. キジ類	61
12. 水禽類	62
13. 猛禽類	63
14. サギ類・カモメ類	64
爬虫類	66
I. 爬虫類の飼育管理の共通事項	66
II. 種類ごとの個別事項	74
1. ワニ	74
2. カメ	76
①ヌマガメ類	76
②ワガメとカミツキガメ	79
③スッポン類	81
④スッポンモドキ	83
⑤ホルスフィールドリクガメ	83
⑥ケヅメリクガメ	85
⑦インドホシガメ	86
⑧アカアシガメ	87

3. ヘビ	89
①ナミヘビ	89
②ボア・ニシキヘビ	93
4. トカゲ	95
①ヒョウモントカゲモドキ	95
②グリーンイグアナ	97
③フトアゴヒゲトカゲ	99
④カメレオン	100
⑤アオジタトカ	102
⑥オオトカゲ	103
資料	105

○ 哺乳類

I. 哺乳類とは

哺乳類とは、脊椎動物の一綱です。子は母親から分泌される乳で育ち、体温は恒温性です。単孔類を除き胎生で、肺で呼吸します。

それぞれの特徴によって、霊長目、食肉目、げっ歯目等 20 の目に分類されています。

単孔目 (2科3属3種) ハリモグラ科 カモノハシ科 有袋目 (16科74属271種) オポッサム科 ミクロビオテリウム科 ケノレステス科 フクロネコ科 フクロアライクイ科 フクロオオカミ科 フクロモグラ科 バンディクト科 ミミナガバンディクト科 クスクス科 プーラミス科 フクロモモンガ科 カンガルー科 コアラ科 ウォンバット科 フクロミツスイ科 貧歯目 (4科13属29種) アライクイ科 ミユビナマケモノ科 フタユビナマケモノ科 アルマジロ科 食虫目 (6科62属360種) ソレノドン科 テンレック科 キンモグラ科 ハリネズミ科 トガリネズミ科 モグラ科 ツパイ目 (1科5属16種) ツパイ科 皮翼目 (1科1属2種) ヒヨケザル科	翼手目 (18科189属993種) オオコウモリ科 オナガコウモリ科 サシコウモリ科 ブタバナコウモリ科 ミゾコウモリ科 アラコウモリ科 キクガシラコウモリ科 カグラコウモリ科 ウオクイコウモリ科 クチビルコウモリ科 ヘラコウモリ科 アシナガコウモリ科 ツメナシコウモリ科 スイツキコウモリ科 サラモチコウモリ科 ヒナコウモリ科 ツギホコウモリ科 オヒキコウモリ科 霊長目 (12科58属181種) コビトキツネザル科 キツネザル科 インドリ科 アイアイ科 ロリス科 メガネザル科 マーモセット科 オマキザル科 オナガザル科 テナガザル科 ショウジョウ科 ヒト科 食肉目 (12科109属271種) イヌ科 クマ科 アライグマ科 パンダ科 イタチ科 ジャコウネコ科 マングース科 ハイエナ科 ネコ科 アンカ科 セイウチ科 アザラシ科	クジラ目 (9科39属79種) カワイルカ科 マイルカ科 ネズミイルカ科 イッカク科 マッコウクジラ科 アカボウクジラ科 コククジラ科 ナガスクジラ科 セミクジラ科 カイギュウ目 (2科3属5種) ジュゴン科 マナティー科 長鼻目 (1科2属2種) ゾウ科 奇蹄目 (3科6属20種) ウマ科 バク科 サイ科 ハイラックス目 (1科3属8種) ハイラックス科 管歯目 (1科1属1種) ツチブタ科 偶蹄目 (10科76属211種) イノシシ科 ペッカリー科 カバ科 ラクダ科 マメジカ科 ジャコウジカ科 シカ科 キリン科 プロングホーン科 ウシ科 有鱗目 (1科2属7種) センザンコウ科	げっ (齧) 歯類 (29科396属1749種) ヤマビーバー科 リス科 ホリネズミ科 ポケットマウス科 ビーバー科 ウロコオリス科 トビウサギ科 ネズミ科 ヤマネ科 サバクヤマネ科 トビハツカネズミ科 トビネズミ科 ヤマアラシ科 アメリカヤマアラシ科 テンジタネズミ科 カピバラ科 パカラナ科 アグーチ科 チンチラ科 フチア科 スートリア科 デグー科 ツコツコ科 チンチラネズミ科 アメリカトゲネズミ科 ヨシネズミ科 アフリカイワネズミ科 デバネズミ科 グンディ科 ウサギ目 (2科12属59種) ナキウサギ科 ウサギ科 ハネジネズミ目 (1科4属15種) ハネジネズミ科
--	---	---	---

出典：今泉吉典監修／『世界哺乳類和名辞典』／平凡社

II. 種類ごとの個別事項

1. ウサギ <ウサギ目ウサギ科>

(1) 分類、品種

ウサギ目はウサギ科とナキウサギ科の2科があるのみで、ウサギ科はアナウサギと、それとはまったく別種のノウサギからなります。愛玩動物として飼われているものはアナウサギの改良品種です。

品種としては、小型のネザーランド・ドアーフをはじめ様々で、現在、50以上の品種があるといわれています。



【カイウサギ】

(2) 形態、習性、生理

大きさは体長30～60 cm位、体重1～6.5 kg位と品種により様々です。耳は血管が張りめぐらされた敏感なところであり、汗腺が発達していないため、ここで体温調節の役目を果たしています。高温多湿に弱い動物の1種といえます。反面、水はよく飲み、水分が不足すると自分の尿を飲むようになり、また子育ての時は子を食べてしまいます。

本来、夜行性であり、食性は草食性。木の皮や若木、草やその根、実、畑の作物等を食べています。軟便と固くて丸い便の2種類の便をし、軟便はもう一度肛門から直接食べてビタミンB₁₂等の未消化栄養素を吸収するという二重消化の特徴をもっています。

寿命は5～15年で、性成熟は品種により違いがあり4～10ヶ月（大型種ほど遅い）です。交尾排卵のため1年中繁殖可能ですが、だいたい1年に3～4回（1回に4～7羽）繁殖するようです。ふだんはおとなしいですが、不妊手術をしていない場合、発情すると特にオスは気が荒くなり、咬まれると思わぬケガをすることがあります。また、鋭い門歯に指を当てただけでもケガをすることがありますので、幼児や児童が扱う場合には注意が必要です。体臭はほとんどありませんが、糞尿の量が多いので、処理を怠ると臭気がひどくなります。

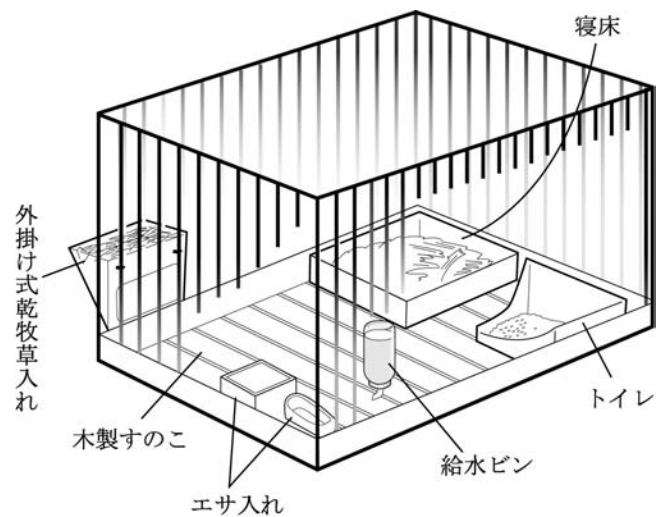
(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

室内のケージ飼いが一般的ですが、屋外施設を利用する飼い方もあります。

①室内のケージ飼いをする場合

ウサギ専用のもや小鳥用大型ケージのほか、犬用ケージ（天井がなくても良い）を利用します。床材としては、木製のすのこを敷き、すのこの下にペットシートか新聞紙を厚めに敷いておくと毎日の掃除に便利です。床の隅には、主食用とその他の用のための食器2個（プラスチック製だと齧った時に危険なので陶器製が良い。齧っても害はない木製のマスも適切

です)、ウサギ用トイレ (中に固まらないタイプの猫砂を敷いておきます)、寝床 (中にワラを敷きます) を設置します。ケージの側面には、食用の乾牧草入れ (ケージの外に掛ける専用のもの) と、サイホン式の給水ビンを取り付けます。運動不足からストレスとならないよう、可能であれば室内に出して遊ばせたりすることも必要です。事故を避けるためにはサークルの利用が有効となります。



【ウサギの飼養器材のセット例】

②屋外の施設飼いをする場合

木製の小屋が一般的です。地面を金網の柵で囲って自然に近い状態で飼うこともできます。この場合は、地中に穴を掘って柵の外に逃げられることがないように、地中にブロックか、トタン板 (雨水が溜まらないよう水抜き穴を作ること) 等でプール状に仕切りを埋め込む等の工夫が必要です。

③飼養環境

高温と、湿気に弱い動物であることを考慮する必要があります。特に梅雨期には湿気を防ぎ、夏季には直射日光が避けられ、涼しく、湿気のこもらない通風の良い環境をつくるのが大切です。

寒さにはかなりの抵抗力がありますが、本来地中生活をする動物であるため、冬季の昼夜の急激な温度変化にはさらさないように気をつけ、隙間風を防ぐことが大切です。採光は、昼間は窓からの自然光が得られ、夜は暗くできるような環境にします。日光浴は、タオル等で日陰の避難場所を作って春、秋、冬の穏やかな陽射しに時々当てる程度にし、夏季の強い日差しの日光浴は考えない方が無難です。

(4) 飼い方のポイントと注意点

①食 事

主食は専用のペレット (固形飼料) と乾牧草にし、おやつ程度に小松菜等の根菜類・菜っ葉類、りんご等の果物、オオバコ等の野草を与えます。また、ミネラル補給のための塩土と、歯の伸びすぎ防止のための「かじり木」は常置しておきます。湿気に弱いといっても水は大変よく飲みますので、常に新鮮な水を用意しましょう。なお、下痢をしやすいので水分の多い野菜や果物の多給は控えることが大切です。ペレットは1日に朝夕の2回、30分程度で食べきってしまう位の量を与えます。乾牧草はいつでも食べられるように新鮮なものを入れておきます。嗜好性にかたよりがみられることが多いので、若い時からペレットと乾牧草に十分に馴らしておくことが重要です。

②食物等の注意点

野菜や果物は、農薬やワックス等の危険があるのでよく洗い、下痢を防ぐために水気が乾いてから与えるようにします。また、野草を与える場合は、除草剤がかかっていると致命的ですので要注意です。与えてはいけないものに、肉類や、タマネギ、ニラ、ニンニク等の刺激性のある野菜類、チョコレート、クッキー、ケーキ等の甘いものや人間の食べ物、有毒な園芸植物・観葉植物・野草があります。

なお、干牧草はダニやカビの発生を防止するため、購入後、一度天日干ししてから湿気ないように密封して保管するのが適切です。これは、寝床や床材として使用する場合も同様で、ワラにも同じことがいえます。(以下、小型哺乳類はこの項については同様)

③収容物等の手入れ

尿の量が大変多いので、トイレや寝床の汚れた部分、すのこの下の新聞紙はこまめに取り替え、食事の管理ごとに食器や給水ビンもよく洗い、適宜すのこもよく洗って乾燥させ、週に1回か、高温多湿の時期はそれ以上にケージ全体を洗剤で洗うか、熱湯消毒して天日干しをします。

④その他の手入れ、しつけ

ブラッシングに馴れた個体については、特に毛が抜け替わる春から夏にかけてのブラッシングも有用です。湿気に弱いのでシャンプーは禁物です。爪が伸びすぎると歩行困難を起こしますので、伸びた場合には爪切りが必要です。

トイレのしつけは犬の場合と同じようにできます。覚えやすいように、最初にトイレの中に自分の排泄物の臭いがついたものを少し入れておくのがコツです。

(5) 健康と安全の管理 (ウサギ、ハリネズミの項に共通)

健康と安全については、体が小さいだけに抵抗力がなく、病気が発症したら致命的となるものが多いため、日頃の注意深い観察と予防(適正な飼養管理に尽きます)が特に大切となることと、意外に些細なことが大きな影響を与えるということ、たとえば、日照(点灯)時間の不規則や不適切な点灯によるストレス症状や、食物連鎖の中で下位に位置するものであるだけに非常に臆病で環境に対して敏感であり、騒音等によるストレスの健康への影響が大きいこと等の留意点が挙げられます。

また、病気発症以外の日常的な事柄で起きる事故や死亡例が多い動物たちであることにも十分注意することが大切です。たとえば、ドアを大きな音を立てて閉めたり、個体の移し替えやケアー時に逃げようとした個体をあわてて捕まえたりした際等に簡単にショック死や気絶をすることもありますし、窓からの陽差しや石油ストーブ等での不注意による熱射病や一酸化炭素中毒、暖房停止や気候による昼夜の急激な温度変化による死亡、単純な行為での踏みつけや押さえつけによるケガや圧死、滑りやすいテーブル上で遊ばせていたり抱いていた際の落下事故等です。

2. ハムスター <げっ歯目ネズミ科>

(1) 分類、品種

ハムスターはげっ歯目ネズミ科に属し、愛玩用として飼われている種は、ゴールデンハムスター属のゴールデンハムスターと、ヒメキヌゲネズミ属のジャンガリアンハムスター、キャンベルハムスター、ロボロフスキーハムスターの3種(この3種は小さいという意味のドワーフハムスターと総称され、以下、ドワーフと略します)、キヌゲネズミ属のチャイニーズハムスター等があります。



【ジャンガリアンハムスター】

(2) 形態、習性、生理

愛玩用の中で最小のロボロフスキーハムスターの体長は約7 cm前後、体重15~40g、ゴールデンハムスターは体長12~20 cm、体重80~150gと様々です。

穴掘りに適した鉤爪のある指をもつ前肢は非常に器用に動かせ、物を掴んだり毛づくろいができます。

頬袋をもち、大量のエサを巣まで運べます。嗅覚と聴覚は発達しており、背中の左右に臭腺をもっていて(ドワーフには口の両端にもあります)臭いで仲間を識別しています。上下2本ずつの門歯は一生伸びつづけますが、これは以下のげっ歯類に共通します。

野生では寒暖差の激しい砂漠や乾燥草原地帯に地中深く巣穴を掘って生活しています。夏の日中は暑さを避けて地中で眠り、夕方から食べ物を探し、冬は冬眠しながらも時々貯蔵した食物を食べるといふ夜行性、疑似冬眠性の動物です。ドワーフ、チャイニーズ以外は単独生活者で、オスとメスの出会いは交尾の時だけです。

食性は雑食性で、草の葉や茎や根、種子、果実のほか虫、小型の爬虫類等動物質のものも食べています。寿命はふつう2~3年です。離乳期は約3週間で、約5週間で大人の大きさになって性成熟します。トイレのしつけは可能です。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

水槽飼いか専用の金属製のケージ飼いが一般的です。

水槽飼いは温度や騒音(非常に臆病)の管理には向いています。半分くらい土を入れるとトンネルを掘って自然の状態に近い生活を観察できます。蒸れやすいので天井は密閉しないで金網でフタをします。

ケージ飼いは世話や掃除に便利ですが、温度や騒音の管理に気を使う必要があります。高さのあるものはよじ登って落ちてケガをしやすいので、床面積の広いものを選びましょう。運動

量が多いので、できるだけ広さのあるケージ等と回し車やトンネル等の運動具や遊具が必要です。床には、干し草、ワラ、チップ（杉や松等針葉樹が素材のものはアレルギーを起こすことがあります）等いずれかを適当に混ぜてハムスターが潜れるくらいに厚めに敷きます。床の隅には主食用と副食用の食器2個、ハムスター用トイレ、木製の巣箱（中に床材と同じものを入れる）を置き、側面には給水ビンを設置します。

飼養環境としては、寒暖差の激しさ、低温（15℃以下になると動きが鈍くなります）と高温、多湿、特に突然の大きな物音、騒音を嫌うことに留意が必要です。採光は、昼間は窓からの自然光が感じられ、夜は暗くできるようにします。水槽飼いの場合は蒸れないよう通風に十分気をつける必要があります。

(4) 飼い方のポイントと注意点

ドワーフ及びチャイニーズ以外の単独性のハムスターはつがいにせず1頭ずつ別々の収容物で飼うのが原則です。（縄張り意識が強いため）

晩秋頃から冬季にかけてはヒマワリの種やクルミを多めに与えて体力をつけ、保温に気をつけて、飼養下では冬眠させないで飼った方が無難です。

主食は専用のペレットにし、副食としては、根菜類や野菜、ハト用配合飼料等の穀類、アルファルファ等の乾牧草があります。

また、一日おきくらいにペット用煮干しやゆで卵の白身等の動物性食品やリンゴ等の果物を与えます。なお、ミネラル補給のための塩土と、歯の伸びすぎを防ぐため「かじり木」は常時置いておきます（これは、以下のげっ歯類に共通します）。定期的に、巣の中に溜め込んだ食物を点検し、生ものや腐りそうな物は取り除きます（巣の中に食物を貯める習性のあるものは、以下同様にします）。

ケージ等や個体の手入れ、しつけはウサギに準じます。なお、トイレ砂は全部を取り替えますが、臭いの付いたものを少しだけ残しておきます。同様に、週に1回は床材と巣材を全部取り替えますが、臭腺で縄張りに臭い付けしていますので、汚れていない古い床材を少し混ぜます。

長時間手でいじることはハムスターにとっては大きなストレスになり健康を害することになるということに留意しなければなりません。

逸走防止はウサギに準じます。ハムスターの背後又は上方から急に掴もうと手を出したり、うっかり手を出すと咬まれることがあり、意外に深い傷を受けることがありますので、不用意にケージの中に指を入れないよう注意する必要があります。

3. マウス <げっ歯目ネズミ科>

(1) 分類、品種

マウスはげっ歯目ネズミ科のハツカネズミを研究用に改良したものです。一般的な品種は全

身が白色で目の赤いアルビノですが、茶や黒い毛が現れたものや全身が黒、グレイ、茶等様々な色変わりや、研究用に改良された無毛・無菌のもの（ヌードマウス）もあります。また、ひと回り小型のパンダマウス（体長約5cm）といわれる品種もあります。



【ハツカネズミ】

(2) 形態、習性、生理

体長約7cm、尾長約8cm、体重はオスが40g前後、メスが30g前後。毛のない細長い

尾は体温調節の役目をしているといわれ、また尾を器用に巻き付けて使い、樹木や綱等の細いものでも登り降りや渡ったりできます。夜行性で、学習能力に優れ、1頭で飼えば人によく馴れます。寿命は2～3年。生後4～6週間頃に体重が急に増え、繁殖が可能となります。

おとなしく人馴れしやすい性質がありますが、不用意に手を出すと噛み付くこともあります。体臭はハムスターよりも少し強く、排泄物の量が多いので掃除をこまめにしなければ臭いになりきつくなります。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

専用のケージで飼うか、水槽飼いが一般的です。高さがある程度あるものが適当で、ハシゴや枝付きの木等を立てかけておいたり回し車を設置しておく運動に使います。他はハムスターに準じます。

(4) 飼い方のポイントと注意点

複数飼いは可能ですが、オスは強いものが弱いものをいじめることがあり、オス・メス混合飼養だとすぐに繁殖してしまいますので、考慮が必要です。

主食はマウス・ラット用ペレットかハムスター用ペレットにします。（副食やその他はハムスターと同じ）食物や水分が不足すると、複数飼いの場合は共食いが起こりますので注意を要します。ペレット等腐りにくい食物の食べ残しは次の食事の時までそのままにしておいて構いません。排尿はたいてい隅の方にしますが、あちこちに臭い付けをすることもあります。尿量が多くてトイレにはしないので、掃除は毎日こまめにしましょう。マウスはしっぽを持っても嫌がりません。

飢餓状態になるとすぐに餓死しますし、複数飼いの場合は共食いが起きるので、エサを切らさないように注意する必要があります。

4. スナネズミ（ジャービル） <げっ歯目ネズミ科>

(1) 分類、品種

げっ歯目ネズミ科に属し、人間には100年ほど前から実験用に飼養されてきました。原種は灰褐色で腹は白色ですが、白い身体に赤目のアルビノや黄色がかかった褐色、灰色、黒、それらのツートンカラー等の色変わり等があります。



【スナネズミ】

(2) 形態、習性、生理

体長13 cm前後、尾長10 cm前後、体重は60g前後。尾はマウスと違って毛で覆われています。前肢は小さくて器用で、物を掴

んだり毛づくろいし、後肢は太くて強く、30 cm以上も跳び跳ねることができます。基本的に夜行性ですが、気温が適当であれば昼間でも地上で活動します。

食性は、雑食に近い草食性で、草の種子、葉、茎、根、果実を主として虫等も食べます。春先と秋口に換毛します。寿命は4~7年。生後2~3ヶ月で性成熟します。

おとなしく、噛み付くことはほとんどありません。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

ケージや水槽等のセットはハムスターに準じますが、スナネズミの特徴として床材を飛び散らかすのが常ですし、飛び跳ねることもありますので、なるべく大きめのものを用意します。また、小さな隙間に尻尾を引っかけやすい傾向があるので、水槽の方が適しているといわれます。なお、自然に爪が削れるように岩を入れておくと爪の伸びが防げます。

飼養環境としては、非常に臆病で気絶しやすいので、大きな物音がすることのない静かな環境を考えることが大切です。他はハムスターに準じます。

(4) 飼い方のポイントと注意点

スナネズミは群居性で、なれた個体同士ではけんかもないので一つのケージや水槽等での複数飼いは可能ですが、オス・メス混合だとすぐに繁殖してしまいますのでよく考慮する必要があります。

主食はハムスター用ペレットでよく、食事内容はハムスターに準じます。ただし、動物性食品の割合は少なめにします。定期的に、巣の中に貯めこんだ生ものや腐りそうな物は取り除き、汚れた巣材や床材も新しいものに取り替えます。週に1回は床材と巣材は全部新しくしましょう。少なくとも月に1回以上は飼養機材全部を洗剤で洗うか熱湯消毒をし、天日干しして清潔な環境を保ちましょう。ケア用ケージに移す時等、スナネズミは尻尾をつまんで持ち上げても構いませんが、尻尾の先を持つと皮がむけることがあるので必ず付け根を持つように注意し、片方の手の平に乗せます。もし、部屋の隅や物陰に逃げてしまった場合、あわてて捕まえようとすると気絶させたりケガをさせたりしかねないので、食べ物を入れた缶を近くにおいておき、

おびき出して捕まえるようにします。

ストレスが原因でケージの金網を齧り、鼻や口を傷付けてしまうことがあります。広いケージに変えるか、癖になっているようなら水槽飼いにしましょう。驚かさないようにすることが大切です。

5. モルモット <げっ歯目テンジクネズミ科>

(1) 分類、品種

モルモットは南アメリカ原産で、げっ歯目テンジクネズミ科に属し、現在では野生のものではなく、家畜化されたテンジクネズミといわれ、インディオによって3千年以上前から食肉用に家畜化されたといわれています。短毛（イングリッシュモルモット）、長毛（ベルビアンモルモット）、ヘアレス（スキニーギニアピッグモルモット）、巻き毛（アビシアンモルモット）や、それらの色変わり等、品種のバリエーションは豊富です。



【モルモット】

(2) 形態、習性、生理

体長約21 cmで尾はなく、体重は1.2 kg前後です。

群居性で、色々な鳴き声でコミュニケーションを図っており、オスには順位制があります。食性は完全な草食性。人と同じく体内でビタミンCを合成できない数少ない動物です。本来は夜行性ですが飼い主の生活に活動周期を合わせることができます。平面活動が中心。暑さには割合に強く、寒さに弱い動物です。寿命は5～15年（平均10年）です。繁殖適期はメスで生後3ヶ月、オスで4ヶ月以上からです。

オットリとした人馴れしやすい性質をもっています。排泄物の量が多いので掃除をこまめにしなければ臭いがきつくなります。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

屋外の小屋飼いやも容易ですが、室内のケージ飼いが一般的です。ケージは水平的になるべく広いもの（1頭飼いで少なくとも50 cm四方以上が理想的）で、高さは30 cm以上あれば天井はなくても大丈夫です。床には木製のすのこ（足がすっぽりと抜けることのない、また、指を挟むこともない適度な隙間のあるもの）をとり付け、その上に床材として干し草、ワラ等を多めに敷くと湿気対策になります。すのこの下には新聞紙を厚めに敷いておくと毎日の掃除に便利で、その他もウサギと同様にします。寒さに弱いので冬季は保温に気をつけること（18℃以

上を保てるように工夫)、また臆病、神経質なので物音にも敏感に反応し、騒音があると用心して眠らずストレスがたまるということを考慮することが大切です。湿気対策や採光、日光浴等はウサギに準じます。屋外のサークル内の運動も良いでしょう。

(4) 飼い方のポイントと注意点

群居性なので複数飼いは可能ですが、オスどうしは順位づけのためにけんかし、逃げ場所がないとケガをしますし、オス・メス混合飼養だとすぐに繁殖してしまいますので、考慮が必要です。

主食はビタミンC入りのモルモット専用ペレットにし、毎日朝夕2回与えます。副食としてビタミンCの豊富な色々な野菜（レタスは適しません）や、タンパク質が豊富な乾牧草（アルファルファ等のマメ科のものが適切。モルモットは植物性タンパク質を多く必要とし、また歯の伸びすぎ防止にもなります。）を毎日少しずつ与えます。ハコベやナズナ、シロツメグサ、タンポポ等の野草も喜びます。ビタミンCの豊富なミカンやイチゴ、キウイ、リンゴ等の果物も、糖分が多いので与えすぎに注意しながら時々与えましょう。カルシウム補給のためにペット用煮干しも時々与えます。

また排泄物の量が多いので、床材の汚れた部分は毎日取り替え、すのこの下の新聞紙も湿気予防のために濡れたら上から取り除いていくと手間がかかりません。

大声を出したり、急に乱暴に抱き上げて驚かせるとショック死することがあります。

6. チンチラ <げっ歯目チンチラ科>

(1) 分類、品種

チンチラはチリ北部原産で、げっ歯目チンチラ科に属しています。人工繁殖が盛んで、原種は黄色がかった灰色の腹部のほかは身体の大部分が青みがかった灰色をしています。黒っぽいもの、薄い灰色のもの、白っぽいもの等、色変り品の品種が作り出されています。



【チンチラ】

(2) 形態、習性、生理

体長約23~28cmで、体長の3分の1ほどの長さのふさふさと毛の生えた尾

をもち、体重約500g、大きなものは800gくらいあります。本来は群居性の動物で、夜行性です。食性は草食性で、草やその種子、果実、樹皮、サボテンの果肉等を食べていますが、昆虫等を食べることもあります。春と秋に換毛期があつて冬眠習性はありません。毛は引っ張ると容易に抜けてしまいます。皮膚から出る分泌物（ラノリン）を取り除き清潔を保つために砂浴びが欠かせないという特徴をもっています。寿命は約10年で、生後4~6ヶ月で性成熟します。

人馴れしやすい性質をもっていますが、怖がっている時に無理に手を出したり、急に鼻先に指をもっていったりすると噛み付くことがあります、思わぬ深い傷を負うことがあります。トイレのしつけも可能で、臭いはほとんど出しません。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

活動的ですのでケージは広さ、高さともなるべく大きいもの（チンチラ専用ケージか、猫用ケージなら理想的）にし、ケージ内はウサギと同様にします。なお、チンチラ専用の砂浴び用容器を設置します。砂浴び用の砂は、必ずチンチラ用の砂か、細かく砕いた鉱物質の砂を用意します。また、天地の中間にジャンプしても良いように柵板を設置し、その上に十分動けるくらいの広さの木製の巣箱を置き、中に干し草をたっぷりと入れます。ウサギと同様、高温、多湿に弱いことを認識する必要があります（温度は25℃、湿度は50%を越えないように）。寒さにはかなりの抵抗力があります。日光浴は特に必要ありません。臆病ですので静かな環境が必要です。

(4) 飼い方のポイントと注意点

室内の放し飼いも可能ですが、室内のケージ飼いが一般的です。また、相性が合えば1つのケージに複数飼いも可能ですが、1ケージ1頭が適当です。

夜行性なので食事は夕方に与えます。チンチラ専用かウサギ専用のペレットを主食にし、副食に乾牧草や野草を与え、おやつ程度に天日干しの人参やサツマイモ、干しぶどう、果物、ナッツ類、ヒマワリの種を与えます。主食や副食の乾牧草等はやや多めに与えておき、あとの傷みややすい食物の食べ残しはすぐに片づけます。歯の伸びすぎ防止のために市販されているチンチラストーン（齧り石）や小枝、かじり木等を常備しておきます。床材は湿ってきたらすぐに取り替えることが大切ですが、たいていは週に2回程度で良いようです。砂はこまめに取替えます。適宜、ケージや機材全部の掃除が必要なことは他の動物と同様です。シャンプーは禁物です。ケージの中だけでは運動不足ですので、可能であればウサギと同様に部屋の中で遊ばせましょう。

逃げようとした時にあわてて捕まえようとしたり大きな音を立てたりすると、気絶したりショック死したりすることが多いので気をつけましょう。

7. リス <げっ歯目リス科>

(1) 分類、品種

げっ歯目、リス科に属する動物は276種類がオーストラリアを除く世界各地に分布しており、リス（ニホンリス）をはじめ、マーモット、プレーリードッグ、ムササビやモモンガ等がその仲間になります。

我が国にはリス科、リス属に分類されるニホンリス、エゾリス（キタリスの1亜種とされる種類）、シマリス属に分類されるエゾシマリス、伊豆大島をはじめ、神奈川県等で野生化して

いる外来生物の台湾リス（台湾リス属）が知られています。ペットショップで見かけるシマリスの多くは中国産です。

(2) 形態、習性、生理

ニホンリスは我が国特産の種類で、本州、四国、九州に生息しています。頭胴長 16～22cm、尾長 13～17cm、体重 250～310g、夏毛は茶色で腹部は白く、前肢、後肢は赤褐色、冬毛は灰褐色で脇の赤褐色は消えます。

エゾリスはニホンリスに比べ、やや大型で頭胴長 22～26cm、尾長 16～20cm、体重 270～410g、夏毛は茶褐色で腹部は白く、冬毛は灰褐色で腹部は白く、耳の先端に長い毛が見られます。

冬も冬眠はしません。

寿命は長いもので 16 年くらいとされています。

台湾リスは元来台湾の森林に生息しているリスで、我が国では外来生物です。頭胴長 20～22cm、尾長 17～20cm、体重 360g、体色は茶褐色で黒色の霜降り状です。

シマリスは体長約 14 cm、尾長約 13 cm、体重 100g 前後。尾が長いのは、木の上でバランスをとったり、冬眠時に身体をくるんで保温するのに役立ちます。昼行性で、単独生活をする動物で、地中にトンネルを掘ってすみかとしていますが、日中は樹上で過ごすことが多く、半地上、半樹上の生活を営んでいます。頬袋をもち、そこに詰め込んだエサを巣やその周辺に掘った小さな窪みに蓄え、疑似冬眠をします。寿命は 5～10 年。性成熟は生後約半年くらいです。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

1 頭あるいは少数での飼育は小鳥用の金網製のケージでも十分ですが、活発に動く動物ですので、やや大きめのケージが良いでしょう。複数で飼育する場合には専用のケージを用意します。1 頭につきどの位のえさが必要ということはありませんが、180cm 立法の空間で数頭の飼育は可能です。

リスの歯は鋭く、木の部分は齧られてしまいます。大きなケージを用意する場合、人の出入りのための扉は二重構造とし、脱走防止を図ります。いずれの場合も巣箱を用意します。小鳥用のものを利用できますが、やや大きめのインコ用の巣箱が良いようです。リスは餌を貯めこむ性質があります。特に秋から冬にかけては冬季用の餌を大量に巣箱内に運び込みます。清潔に保つために時々巣箱内を点検します。

餌はひまわりの種子、リンゴ等の果実、イモや人参、パンやビスケット等を使用します。クルミやドングリの他煮干等の動物質のものも与えます。給水器を用いての給水も必要です。



【台湾リス】

(4) 飼い方のポイントと注意点

リス類の門歯は一生伸び続けます。野生の場合色々なものを齧ることで一定の長さを保っていますが、飼育している場合は伸びすぎてしまうことがあります。時々殻付きのクルミを与えるのも一つの予防策です。

台湾リスを除き、日本産のリスは暑さを嫌います。夏期には注意が必要です。

また、ヘビやネコといった動物はリスにとっては天敵です。ケージを置く場所を考慮して、被害を受けないようにします。

その他、逃げようとするのをあわてて捕まえようとしたり、周囲で大きな音を出したりすると、気絶したりショック死したりすることが多いので気をつける必要があります。

(5) その他の特記事項

クリハラリス（台湾リスを含む）、トウブハイイロリスについては特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（以下、外来生物法という。）に基づく「特定外来生物」として指定対象とする方向で検討が進められています。指定された場合は、飼養、保管、運搬、輸入、譲渡等が原則禁止され、適切な飼養等を行うことができると認められる目的、施設、方法等の要件を満たしている者に限り主務大臣による許可をもって国内での飼養等が認められます。

なお、愛がん目的による飼養は、指定前より飼養等されていた個体であって、施設の許可要件を満たしておりかつ繁殖を行わない場合に限り、許可の対象となります。

クリハラリス（台湾リスを含む）、トウブハイイロリスを発見した際、外来生物法に関する疑問等がある場合には、環境省野生生物課等に問い合わせして下さい。

8. プレーリードッグ <げっ歯目リス科>

(1) 分類、種類

北アメリカ原産のげっ歯目リス科の動物です。5種類のプレーリードッグに分類されていますが、ペットとして日本に輸入されていたのは多くはオグロプレーリードッグと呼ばれる種類です。

(2) 形態、習性、生理

プレーリードッグは尻尾の短い大きなリスです。地中に張りめぐらしたトンネルに棲み、コテリーと呼ばれる高度に組織化されたコロニーを形成しています。日中は地上にでて草を採食します。

厳寒時には冬眠もします。寿命は8～10年くらいです。体長（頭胴長）は28～35cmで、尾長は3～11.5cm、体重は0.7～1.4Kgです。24～36ヶ月で性成熟に達します。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

プレーリードッグの習性に合わせ、1メートル四方の立体的な構造をした専用のケージを使用します。床材にチップを敷きます。水飲みや食器は市販のもので十分です。しかし、彼らの行動から見た場合、逃走できないような排水性の良いコンクリート製で、少なくとも50平方メートル以上の動物舎を作り、その中に土を入れて地中に自由にトンネルや巣穴を作らした方が、より良い飼養環境を提供できます。

(4) 飼い方のポイントと注意点

主食としてウサギ用ペレットを与え、副食として種々の野菜を与えます。ドッグフードも食べますが、肥満の原因になります。脱走防止には、出入り口の施錠を確認します。



【オグロプレーリードッグ】

9. モモンガ <げっ歯目リス科>

(1) 分類、種類

モモンガはげっ歯目リス亜目（リス型げっ歯類）リス科に属します。愛玩動物としては主にアメリカモモンガとタイリクモモンガが飼育されています。

(2) 形態、習性、生理

体長17cm前後、尾長12cm前後、体重130g前後。リスの仲間ですが、大きく異なる点は夜行性であることと、体と手足の間に体毛で覆われた皮膚があり樹間を滑空することです。樹上生活の動物で、地上に降りることはめったになく、爪は鋭い鉤爪になっていて樹木を走り回ることができます。頬袋があり、秋には巣（木の洞）にエサを貯め、シマリスとは違って冬眠せず、冬は数頭から時には数十頭が群居してあまり巣から出ないで越冬します。冬ごもりのためにエサを貯め込み



【モモンガ】

始める時期と冬ごもりの時以外は単独生活が基本です。食性は植物食主体の雑食性で、木の葉、種子、昆虫、鳥の卵等と多彩です。寿命は5～10年で、生後約1年で性成熟し繁殖が可能とな

ります。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

シマリスに準じます。なお、巣箱は樹上性のためケージの上部に取り付けます。また、クヌギ等の自然木の棒を段差をつけて取り付けておくと、飛び移ったりして運動にもなりますし、爪の伸びすぎ予防にもなります。飼養環境として、夏季は、昼間眠っている巣の中が蒸れないよう、風通しの良い涼しい直射日光の当たらない場所に置き、冬は隙間風の入らない温暖な環境を保つことが大切です。日光浴は特に必要ありません。

(4) 飼い方のポイントと注意点

冬ごもりが不要な飼養下では、単独飼いをするのが適切です。夜は明るいままでは生活サイクルを狂わせて体調をくずす原因となりますので、部屋の照明は早めに消すか黒い布をかぶせるかして暗くします。

夜行性なので食事は夕方の活動時期に与えます。食物の内容と世話はシマリスに準じます。量の加減は、朝方になって主食が少し残っているくらいを目安にします。野性味が強くてブラッシングや爪切り等は人を怖がる原因となりますので、ケージの清潔さ保持と爪の伸びすぎ予防が大切となります。なお、行動習性を考え、深夜はゆっくりと休ませましょう。ケージからの脱走や逸走防止のための措置はリスと同じく特に注意が肝要です。

木の皮や木の芽等自然界にある食物を与え、果物や野菜等美食を避けるのが、病気にさせない飼養法の要点といわれています。

10. ヌートリア <げっ歯目ヌートリア科>

(1) 分類、種類

げっ歯目、ヌートリア科、ヌートリア属の動物。南アメリカ、中・南部が原産地ですが、我が国には防寒用の毛皮を目的として輸入、飼育されていたものが第二次世界大戦後その用途がなくなり、放されたものや逃げ出したものが岡山県、広島県、兵庫県、大阪府等中部以西を中心に生息が確認されています。生息地では野菜畑等農作物に被害を与えるようになっています。



【ヌートリア】

(2) 形態、習性、生理

体長 43～63cm、尾長 30～43cm、体重 6～10kg、体色は黄褐色か赤褐色で下毛は密で防水性が高く、繁殖率も良く、成長も早いいため、毛皮獣として輸入されたという経緯があります。

水辺に生息し、岸辺に穴を掘って生活します。主に朝、夕に活動し、日中は巣穴で過ごしています。ホテイアオイやマコモ等の水草を主食としていますが、野菜畑やイネに被害を与えることで害獣駆除の対象となっています。

生後3～4ヶ月で成熟し、6～7ヶ月で出産可能となります。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

水辺に棲み、水を好む動物なので、一時的な飼育の場合、金だらい等で水を張ったりして、飼育することは可能ですが、長期間の飼育の場合、コンクリート製のプールをしつらえた飼育舎を使用します。日中は主に巣穴で過ごすため、飼育舎内に巣箱を用意します。乾草等を自分で巣箱に運びこみますので、時々中をのぞいて清潔に保つようにします。ネズミの仲間では門歯が鋭いため、木製の部分はブリキ等で保護するようにします。餌は野菜や青草を給与します。アライグマ、他の食肉目の動物に準じるところが多くあります。

(4) その他特記事項

ヌートリアについては、外来生物法に基づく「特定外来生物」として指定対象とする方向で検討が進められています。指定された場合は、飼養、保管、運搬、輸入、譲渡等が原則禁止され、適切な飼養等を行うことができると認められる目的、施設、方法等の要件を満たしている者に限り主務大臣による許可をもって国内での飼養等が認められます。

なお、愛がん目的による飼養は、指定前より飼養等されていた個体であって、施設の許可要件を満たしておりかつ繁殖を行わない場合に限り、許可の対象となります。

ヌートリアを発見した際、外来生物法に関する疑問等がある場合には、環境省野生生物課等に問い合わせして下さい。

11. ハリネズミ <食虫目ハリネズミ科>

(1) 分類、種類

ハリネズミは、名前とは違ってネズミの仲間（げっ歯目）ではなく、食虫目ハリネズミ科に属し、愛玩動物として一般的に飼われる種は、ナミハリネズミ、ヨツユビハリネズミ、アルジェリアハリネズミ、オオミミハリネズミがあります。

(2) 形態、習性、生理

体長は14～30 cm位まで、体重も400～900g位までと、種や個体によって様々です。聴覚、嗅覚ともよく発達しており、逃げ足は人間の早足と同じくらいに速く、低い障害物も乗り越えられます。

生息地の環境は種によって様々ですが、湿地には住まず、森林や草原、耕作地帯、乾燥地の木の根元や草むら等にもぐったり草や落ち葉を集めたりして寝場所にし、単独生活をしています。基本的に夜行性で、行動範囲は広く、一晩に1 kmから数kmに及ぶといわれています。

食性はほぼ完全な動物食性で、ミミズやナメクジ、カタツムリ等の軟体動物や昆虫、両生類、爬虫類、ネズミ等の哺乳類と多彩です。生息地の状況や種によっては、人間の残飯や植物質も少量食べます。食物がなくなる時期には、寒い地方に棲むものは低温下での冬眠、乾期がある地方に棲むものは高温下での夏眠（休眠）をする習性があります。

寿命は5～10年で、繁殖可能な時期は生後2～8ヶ月頃からです。妊娠期間は約40日、1回で3～7頭を産みます。生後約6～7週間で離乳し始め、45～60日で独立します。

一般的におとなしく臆病ですが、怒ると噛み付くこともあります。抜け落ちた針に気をつける必要があります。



【オオミミハリネズミ】

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

金属製のケージ飼いか水槽飼いが一般的です。高さはあまり必要とせず、平面的な広さが十分あることが大切です。ケージの場合は、よじ登って落下するとケガをすることがありますので、むしろ高さのないものを選ぶよう注意します。床材として、固まらないタイプの猫砂が適当ですが、干し草、ワラ、チップ等使いやすいものを選び、もぐれるくらいの厚さに敷きつめます。木製の巣箱（寝箱）は、アレルギー防止のため針葉樹以外の素材のもので、中で体を動かせる位の広いものを選び、中には干し草かワラをたっぷりを入れます。食器は2個用意し傷みやすいものとそうでないものを分けて入れますが、ハリネズミは手で物を掴むことができませんので、背の低い安定性のあるものを選びます。トイレは使いません。飼養環境としては、冬眠、夏眠をさせない温度管理をして飼った方が途中の死亡事故につながることもなく安全です。したがって、特に冬季の保温と隙間風や昼夜の気温差には気をつけるとともに、夏季の高温と蒸れに注意する必要があります（20～27℃位が適温の目安）。

(4) 飼い方のポイントと注意点

単独生活をする動物なので一つのケージ等に対して1頭飼いが原則です。

夜行性なので食事は夕方に与えます。食欲旺盛なので、傷みやすいもの以外は容器に入れたままにしておきます。主食としてはハリネズミ専用フードまたはキャットフード（硬いものを齧ることはないのでドライタイプのもは湯でふやかします。また獣肉か鶏肉の総合栄養食タイプの製品を選ぶことが大切です）を与え、副食として市販の乾燥バッタや昆虫、ミルワーム、ゆで卵の黄身、牛の生レバーや心臓等の動物性食品を種類多く与えます。ミネラルやビタミンの補給のため、時々食品にカルシウム粉や総合ビタミン剤を添加するとともに、塩土も置いて

おきます。また、たまに果物や野菜も与えます。

行動範囲が広い動物ですので、できるだけケージ等から出して運動させることがストレス防止のために大切です。日光浴はそれほど必要としませんが、野生下では比較的陽に当たる環境に住んでいますので、時々穏やかな陽に当てると皮膚病の予防にもなります。逃げ足が速いことを考慮し、戸締り等逸走防止の措置をとることが重要です。

12. イタチ(ニホンイタチ) <食肉目イタチ科>

(1) 分類、種類

食肉目、イタチ科の動物。イタチ科の動物はユーラシア大陸、北アメリカ等に広く分布しており、オコジョ、イイズナ、ミンク（アメリカミンク）等16～17種が知られています。イタチ（ニホンイタチ）は日本の固有種とされ、北海道（人為分布）、本州、四国、九州に分布していますが、タイリクイタチ（チョウセンイタチ）の亜種とする学説もあります。



【ニホンイタチ】

ノネズミ駆除を目的とし、北海道、南西諸島、伊豆諸島等に放たれ、各地で繁殖している国内移入種でもあります。外来種のタイリクイタチ（チョウセンイタチ）の分布拡大にともない、減少している地域もあります。

(2) 形態、習性、生理

オスはメスより大型で体長27～37cm、尾長12～16cm、体重400～500g、メスでは体長19～25cm、尾長7～9cm、体重145～250g、体色は夏毛ではチョコレート色、冬期は赤褐色に黄色を帯びています。

河川流域等水辺を好んで生活し、主に夜間活動します。野ネズミ、小鳥、カエル、昆虫、魚等を捕まえて餌としています。またニワトリ小屋を襲うこともあります。繁殖期以外は草根で生活し石垣の穴等を巣としています。寿命は8年という記録があります。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

繁殖期以外は単独で行動するため普段は1頭で飼育することが望まれます。同じイタチ科のフェレット（ケナガイタチ）と異なり、家畜化されていないため、しっかりとした金網のケージを用意します。大きさはイタチを閉じ込めることのできる部屋とそれより広く運動ができる場所があると、清掃時に逃げられるようなことがなく便利です。ケージの扉は上下に動くものが餌の出し入れ等には便利です。

イタチは水浴が好きで、よく水にも入ります。水浴びの後には体をこすりつける行動が見ら

れます。乾草等乾いたものを用意しますが、時にはタオル等を利用することもできます。

餌は人工飼料を用いることもできますが、魚肉等を利用しても良いでしょう。体の割には量を食べるので、様子を見ながら与えるようにします。

夏涼しく冬暖かいというのはどの動物にも当てはまることですが、冬期の寒さを嫌う動物です。巣箱内に乾草を入れる等の処置が必要です。

(4) 飼い方のポイントと注意点

成獣の場合、取扱いには十分気をつけます。特にすばしこい動物ですので、逃げられることのないようにし、捕獲時には皮製の手袋等で対応します。

昔から「イタチの最後っ屁」といわれるように、肛門腺から臭いのある液を出します。あまり激しいものではありませんが、無理強いをすると臭いますので要注意です。

(5) 健康と安全の管理

イタチは犬ジステンパーに感染することが知られています。気をつけるべき病気の一つです。

13. フェレット <食肉目イタチ科>

(1) 分類、品種

フェレットは食肉目イタチ科に属するイタチの仲間です。毛色のバリエーションは多彩です。品種によって性格に少しずつ違いがあるようです。



【フェレット】

(2) 形態、習性、生理

体長 30～50 cm位、尾長 10～20 cm位、体重 0.7～3 kg位でオスよりもメスの方が小さいのが目立ちます。穴や隙間に潜りたがる習性があり、穴掘りも得意で、夏毛と冬毛とに生えかわる換毛期があ

ります。肛門腺をもち、驚いたり危険を感じたりすると強烈な臭いのする分泌液を霧状に吹きかけて防御します。交尾をしないと、発情が止まらない「エストロジェン過剰症」というホルモン中毒を起こし死に至ることもあります。寒さには抵抗力がありますが、暑さには大変弱く、熱射病にかかりやすい体質があります。寿命は6～10年位です。

人馴れしやすく、馴れたものは噛んだり攻撃したりしません。しかし、怒っている時に無理にさわろうとしたりすると咬まれることがあります。オス、メスとも不妊手術をすればおとなしくなる傾向があります。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

室内のケージ飼いが一般的です。1つのケージ等での複数飼いは可能です。

床は足を挟まない程度の隙間があいた木製のこにし、その下に新聞紙を敷いておくと掃除に便利です。床の隅に食器2個とトイレ（壁際や四隅に排泄する習性がありますので、入り口以外が高くなった専用のものが市販されています。中に猫砂を敷きます）を置きます。寝床として、ふわふわしたものを好む性質があり、ハンモックや布製のトンネル等の市販されているものや自家製のものを工夫して、適当な場所に設置します。給水ビンは、多くの水を飲むので専用のものを使用します。脱走防止のため扉の留め金も必要です。

飼養環境としては、特に暑さに弱いということを考え、夏季は直射日光が当たらない、風通しの良い涼しい場所にケージを置くことが大切です。寒さには抵抗力がありますが、急激な温度差や隙間風は悪い影響を与えますので注意しましょう。人間の生活サイクルに合わせてられますが、いつも明るいという状態にしないよう配慮することが大切です。

(4) 飼い方のポイントと注意点

フェレットは食物の消化時間が短く“貯め食い”ができませんので、1日に少しずつ何回かに分けて食べる習性があります。したがって、基本的には朝夕の2回食事の世話をするようにし、好きな時に食べられるように主食は容器に入れたままにしておくといいでしょう。肉食のため高タンパク、高タウリンを必要とします。そのために製造された専用のペレットを主食として与えます（生後3ヶ月位までの幼獣には猫用のミルクでふやかして1日に6、7回に分けて与えます）。主食だけではなく、ゆでた鶏肉やペット用煮干し等の動物性食物もおやつ程度に与えます。野菜、果物、イモ類も好物ですし、専用のドライフルーツもありますが、植物繊維は消化しにくく下痢の原因になりますので与えすぎに注意が必要です。水はかなりの量を飲みますので切らさないように注意することが大切です。糞の臭いが強いのでトイレの掃除はこまめにするようにしましょう。

フェレットはふれあいが大切で、毎日1時間位は室内で一緒に遊んでやらないとストレスとなります。

体の隅々までさわって人の手にも十分に馴れさせておけば、爪切りや耳掃除、ブラッシングも容易となります。ブラッシングは換毛期には毎日することが大切です。爪切りや耳掃除も適宜必要です。本来、水を嫌いませんので、コミュニケーションのため、また体を清潔に保つためにシャンプーも有効です。しかし、やりすぎは皮膚を乾燥させますので、1ヶ月に1~2回を限度にするようにしましょう。胴輪を使って庭や外の散歩も可能です。脱走の名人であることに留意し、ケージの扉は厳重に留めておくこと等逸走防止を図らなければなりません。

(5) 健康と安全の管理

室内で遊ばせることが必要なフェレットの場合は、安全のため特に次のような点に注意しましょう。

①思いもかけないようなところにも潜り込んで出られなくなる場合もありますので家具類の下等の隙間は塞ぐこと。

- ②誤って踏んだりしないよう留意すること。
- ③落下による椎間板ヘルニア等の予防のため高いところに登れる足場となるようなものを取り除いておくこと。
- ④ぬいぐるみや羽毛マット等の毛のあるものは本能的に咬んで毛球症を引き起こしやすいこと。
- ⑤ストッキングやゴム製品等の異物の飲み込みも多いので、これらも取り除いておくこと。
- ⑥無理な姿勢で抱いたり尻尾を持ったりすると脱臼や骨折の原因になりやすいこと。

14. スカンク <食肉目イタチ科>

(1) 分類、種類

食肉目イタチ科に分類される小型の肉食獣です。一般にペットになっているのはシマスカンクと呼ばれる種類です。



【 シマスカンク 】

(2) 形態、習性、生理

種類ふさふさした被毛で、毛色は黒と白のツートンカラーの縞模様をしています。危険を感じると肛門腺から猛烈な臭いを発射します。また、興奮すると、尾を上げて威嚇動作もします。飼養する場合は臭腺の除去が必要です。夜行性で寿命は6～10

年です。体長（頭胴長）は28～38cmで、尾長は18.5～43.5cmで、体重は3.0～10.7Kgです。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

大型の犬用のケージで飼養は可能です。動物が生活しやすく飼養管理を容易にするため床はチップを敷きます。動物が休む寝小屋も設置します。水のみや食器は小型犬用のもので十分です。寒さには強い動物ですが、日当たり、通風の良い場所にケージを置きます。

(4) 飼い方のポイントと注意点

主食は缶詰のキャットフードを与え、副食として少量の果物や野菜、ゆで卵等を与えます。肥満しやすいので体重を定期的に計測し、食事でウエイトコントロールを行います。

(5) 健康と安全の管理

スカンクは他の動物の感染症に感受性があります。犬や猫からの感染症を予防するため、犬ジステンパー、犬肝炎、レプトスピラ症、猫汎白血球減少症等の犬や猫とほぼ同じワクチネーションが有効です。

15. ミンク(アメリカミンク) <食肉目イタチ科>

(1) 分類、種類

食肉目、イタチ科の動物で、毛皮獣として知られているミンクは、1860年以降アメリカミンクを飼育し改良したものです。野生のミンクは北アメリカ大陸に分布しており、14の亜種が知られています。ヨーロッパからシベリア西部まで近似種のヨーロッパミンクが生息していますが、アメリカミンクとは別種の動物です。



【ミンク】

北海道には養殖されていたミンクが野生化しており、エゾクロテンをはじめ生態系に影響を与えていることが問題となっています。

(2) 形態、習性、生理

体の大きさはオスで体長33～43cm、尾長15～23cm、体重680～2300g、メスはオスより小さく、体長30～40cm、尾長13～20cm、体重790～1089gで被毛はやわらかく、体色は茶色から黒色に近いものまで変化に富んでいます。

川や湖等水辺に好んで棲み、泳ぎは巧みで5mの深さまで潜ることができます。単独で主に夜間行動しますが、日中も姿を見かけることがあります。野生のミンクはネズミ類、ウサギ、カエルや魚、ザリガニ、昆虫等を餌としています。岩の割れ目、木の根元等を巣穴として利用しますが、他の動物の巣穴も利用することがあります。

(3) 飼育上必要な施設、機材及び環境

飼育ケージは同じ仲間のイタチと同様の仕様で良いのですが、発育にともない、大き目のケージを用意します。しっかりした金網を用いた50cm×50cm×70cm程のケージで飼育可能です。

一般には魚肉を中心としてニワトリの頭やドッグフード等を与えます。魚肉を与えた場合、油により被毛が汚れることがありますので、環境を清潔に保つようにします。

ミンクは普通18℃以下の環境で飼育すると良質の毛皮が生産できるといわれていますが、これは毛皮を目的として飼育する場合のことです。

小さいケージの場合、給水器を用いて水を与えますが、水浴びの好きな動物ですので、水浴のできる容器を用意します。

(4) 飼い方のポイントと注意点

イタチ同様すばしこい動物で、体の構造から狭い場所にも入り込むことができます。逃げるのと捕獲に手間取り、野外に出してしまった場合、野鳥や小動物に被害を与えることがあり、十分注意しなければなりません。また咬まれると重度の外傷になることがあります。捕獲時には

皮製のキャッチンググローブ等を用います。

イタチ同様、肛門腺が発達しており、臭いを発しますから、注意を要する点でもあります。

(5) 健康と安全の管理

ミンクは緑膿菌による肺炎で死亡することがよく知られています。実験ではインフルエンザウイルスにも感染することが知られています。イヌジステンパーにも感染しますが、これらの病気の予防は日常の管理に気をつけて飼育することが大事です。

16. アライグマ <食肉目アライグマ科>

(1) 分類、種類

食肉目アライグマ科の動物で、カナダ南部、アメリカ合衆国、中央アメリカのアライグマとコスタリカ東部からペルーやウルグアイ東部に生息するカニクイアライグマの2種に分類されます。ペットとして一般的なものは前者のアライグマです。



【アライグマ】

(2) 形態、習性、生理

水辺の森に生息し、木登りや泳ぎが上手です。餌等を水に入れて洗うような動作(野生での餌探し行動)がアライグマの名前の由来です。夜行性の動物ですが、昼にも活動します。寿命は14年くらいです。体長(頭胴長)は41~105cmで、尾長は19~41cm、体重は5~8kgで、オスの方がメスよりも大きく、オスは24ヶ月、メスは12ヶ月で性成熟に達します。成長すると凶暴になり、人に噛み付く危険性があります。身体は軟らかく、また力が非常に強いため捕獲が容易ではありません。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

子供の時は犬用のペットケージで十分飼養することができます。しかし、地方自治体によっては規制対象動物となっている場合もありますので、条例の基準に従ったケージが必要です。飼養面積はできる限り広く取り、少なくとも10平方メートルとします。床は、穴を掘ることを防ぎ水洗いも容易であるコンクリートにし、水洗いのための給排水設備を設けます。放飼場所と寝室を仕切れるようにすれば、動物と一緒にケージに入らないで飼養管理をすることができます。放飼場に木登り用の止まり木も必要です。水飲みや食器はステンレス製の犬用の市販品で十分です。丈夫な動物ですので、気温や湿度を気にすることはありませんが、日当たり、

通風の良い飼養場所が健康に飼養するためには不可欠です。

(4) 飼い方のポイントと注意点

リンゴやバナナ、ニンジン等を主食とし、併せて乾燥ドッグフードを副食とします。肥満し易いため、バナナ等甘いものを控えめにします。与えたものを水に入れてから食べる習性があるため、水のみは大き目のものを用意します。ケージに止まり木を設置し、立体的にケージを利用できるようにして運動量を確保します。脱走防止のための飼育作業の後の施錠、定期的な清掃、危害防止措置（人止め柵の設置等）が必要です。

(5) 健康と安全の管理

アライグマは人や他の動物の感染症に非常に感受性があります。また、アライグマの回虫が人に感染し、寄生虫性脳炎を引き起こす恐れがあります。

(6) その他特記事項

カニクイアライグマ、アライグマについては、外来生物法に基づく「特定外来生物」として指定対象とする方向で検討が進められています。指定された場合は、飼養、保管、運搬、輸入、譲渡等が原則禁止され、適切な飼養等を行うことができると認められる目的、施設、方法等の要件を満たしている者に限り主務大臣による許可をもって国内での飼養等が認められます。

なお、愛がん目的による飼養は、指定前より飼養等されていた個体であって、施設の許可要件を満たしておりかつ繁殖を行わない場合に限り、許可の対象となります。

カニクイアライグマ、アライグマを発見した際、外来生物法に関する疑問等がある場合には、環境省野生生物課等に問い合わせして下さい。

17. キツネ <食肉目イヌ科>

(1) 分類、種類

食肉目、イヌ科、キツネ属の動物。ユーラシア大陸、北アメリカ大陸、北アフリカに分布し、我が国には北海道にキタキツネ、本州、四国、九州にホンドギツネが生息しています。

キツネの仲間にはユーラシアと北アメリカの北極圏に棲むホッキョクギツネ等 10 種類ほどが知られています。

(2) 形態、習性、生理

全長 50～90cm、尾長 30～55cm、体重 3k～14kg、我が国のキツネは体長 54～79cm、尾長 32～48cm、体重 3.3～6.8kg、ホンドギツネよりキタキツネの方がやや大型です。

体色は一般に赤褐色で、胸・腹部は白く、前後の足は体色より濃く、尾の先端は白色です。尾根部、背面には臭腺があり、足の蹠球部にも特殊な臭いを分泌する腺があります。

朝、夕に活動が見られ、果実、鳥の卵、昆虫、モグラやネズミ、ノウサギ等を捕えて餌としています。飼われているニワトリ等を食害することもあります。嗅覚と聴覚が発達しており、小走りに動くことが多く、時速 40km 以上の速さで走ることができます。

巣穴は自ら掘ることもありますが、アナグマの掘った穴や岩の割れ目等を利用することもあります。オス、メスで行動し、子育てには前の年の子供がヘルパーとして参加することが知られています。

(3) 飼育上必要な施設、機材及び環境

保護された個体を短期間飼育する場合にはモンキーケージを利用することも可能ですが、長く飼育する場合にはタヌキ同様1~2坪程度の飼育舎を用意すべきでしょう。この場合、寝小屋と運動場に分かれていると清掃の場合に便利です。キツネは自ら穴を掘るので、床が土の場合、周囲をしっかりとしておきます。また特有の臭いがあるので、飼育にあたっては気をつける必要があります。

雑食性の強い動物ですが、タヌキに比べ肉食性が強く、ニワトリの頭や雑肉を餌としますが、ドッグフードも利用できます。

(4) 飼い方のポイントと注意点

北海道産のキタキツネには、エキノコックス症の疑いのある個体もあります。取り扱いには注意を要する点です。イヌ科の動物であり、イヌの飼育の場合に準じます。



【キツネ】

18. フェネックギツネ <食肉目イヌ科>

(1) 分類、種類

フェネックギツネは北アフリカ原産の食肉目イヌ科キツネ属に分類される最も小さな野生のイヌ科動物です。

(2) 形態、習性、生理

フェネックギツネは、ふさふさした被毛で、イメージは小型のキツネです。砂漠等に生息し、夜行性です。寿命は12~14年です。体長(頭胴長)は35~41cmで、尾長は17~31cmで、体重は1~1.5Kgです。9~11ヶ月で性成熟に達します。捕獲しようとするれば噛んできます。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

大型の犬用のケージで飼養は可能ですが、少なくとも10平方メートルくらいの広さが必要です。床は砂やチップを敷きます。水のみや食器は小型犬用のもので十分です。寒さにはそれほど弱くはありませんが、寝小屋に遠赤外線等の部分暖房があった方が良いでしょう。

(4) 飼い方のポイントと注意点

主食は缶詰のキャットフードを与え、副食として少量の果物や野菜、ゆで卵等を与えます。

夜行性動物ですが、ケージや動物舎は日当たり、通風の良い場所に設置します。

(5) 健康と安全の管理

感染症の感受性は飼い犬と同様です。犬フィラリア症にも罹りますので、犬と同様にフィラリアを予防することが必要です。

(6) その他特記事項

ペットとして飼養されるキツネ属にギンギツネがいます。飼養上の注意点はフェネックギツネとそれほど変わりがありません。しかし、臭いは強烈ですので、室内飼養には向きません。200平方メートルほどの広さで、穴を掘っても逃げられない構造の動物舎を作れば、キツネにとって飼養環境のエンリッチメントになりますし、穴掘り等の自然な行動を見ることができます。



【フェネックギツネ】

19. タヌキ <食肉目イヌ科>

(1) 分類、種類

食肉目、イヌ科の動物。我が国には北海道にエゾタヌキ、本州・四国・九州にホンドタヌキが分布しています。東アジア特産の動物ですが、毛皮を目的に導入されたものが野生化し、ポーランドやドイツ等にも分布を広げつつあります。

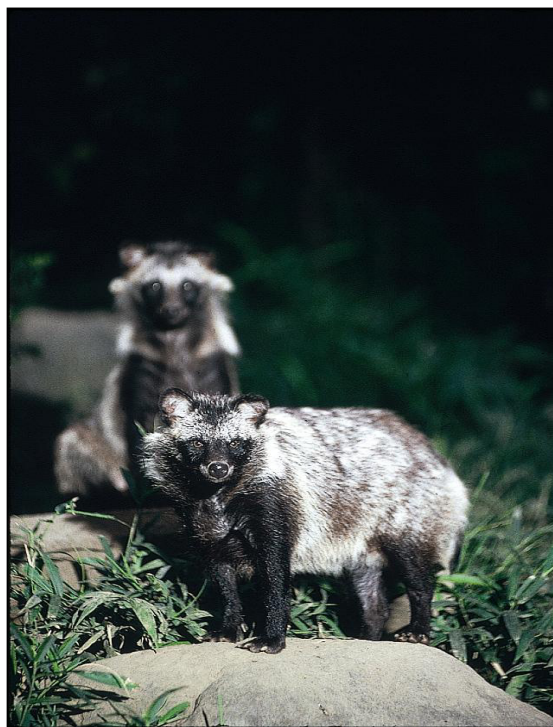
“同じ穴のムジナ”という言葉がありますが、ムジナとは一般にアナグマのことをいいます。

雑木林や水辺近くの下生えのある場所を好んで生息しますが、都会近くにも棲みつき、人家の縁の下等にも棲みつくことがあります。

野生動物の中では交通事故に遭うことの多い動物で、保護された個体では骨折等の有無についても気に留めておくべきでしょう。

(2) 形態、習性、生理

体長 50～80cm、尾長 12～25cm、体重 3～6kg、体色は灰褐色で四肢、前胸部、目の周囲は黒褐色をしています。夏毛は短く体はスマートに見



【ホンドタヌキ】

えませんが、冬毛では下毛が密になり丸く見えます。寒冷地では冬期に冬ごもりをすることが知られており、秋に脂肪を皮下に貯め込み、体重も 50%近く増加します。木にも登り、水泳も巧みです。雑食性でミミズ、トカゲ等の小動物、柿やその他の果実も食します。主に夜行性で、昼間はアナグマの掘った巣穴、木のうろや人家の床下等で過ごします。オス、メスで生活し、共同で子育てにあたります。

タヌキは決まった場所に糞をする性質があり、生息が確認できることがあります。

(3) 飼育上必要な施設、機材及び環境

良く馴れたタヌキはイヌのように首輪を付け、鎖でつないで飼育することもできます。普通ケージを利用して飼育する方法がとられますがタヌキは木に登ることもできますので、天井も必要になります。飼育舎には巣箱を付けることが望まれます。入口は 20～30cm の広さが必要です。

元来雑食ですので、ニワトリの頭、ふかした甘藷等を用いますが、ドッグフードを利用することもできます。

(4) 飼い方のポイントと注意点

狭い施設で複数飼育した場合、お互いに咬み合うことがあります。飼育舎に見合った頭数を飼育するようにします。タヌキは驚くと仮死状態になることがあります。俗にいう“タヌキ寝入り”ですが、うっかりするとごまかされることがあります。

タヌキはイヌ科の動物でイヌとの共通点が多くあります。保護したばかりの個体では、外部寄生虫、特にダニの寄生しているものが少なくありません。地方によっては疥癬に体全体がおかされているものもあります。また、内部寄生虫が寄生している場合もあります。

20. マングース（ジャワマングース） <食肉ジャコウネコ科>

(1) 分類、種類

食肉目、ジャコウネコ科、エジプトマングース属に分類される動物。エジプトマングース属にはエジプトマングース、アクアマングース、ワニクイマングース等 14 種が知られています。

マングースは我が国にハブの駆除を目的に 1910 年に導入され、沖縄、奄美大島等で野生化し、我が国の希少な在来生物であるアマミノクロウサギ、ヤンバルクイナ等への被害が及ぶようになっていきます。



【コビトマングース】

「外来生物法」の「特定外来生物」として色々な規制を受ける動物になっています。

(2) 形態、習性、生理

体長 29～39cm、尾長 23～29cm、体重 600～800g、オスの方が大きく、体色は薄い灰褐色で褐色から黒褐色のゴマ塩状の斑点が見られます。マレー半島、インドシナ半島、スマトラ、ジャワが原産地で我が国には外来種として持ち込まれたものです。

へビやトカゲ、ネズミ等の小動物、サソリや昆虫等を餌としています。

主に日中行動し、単独で生活しています。飼育の方法はニホンイタチやミンクに準じます。

(3) その他特記事項

ジャワマングースについては、外来生物法に基づく「特定外来生物」として指定対象とする方向で検討が進められています。指定された場合は、飼養、保管、運搬、輸入、譲渡等が原則禁止され、適切な飼養等を行うことができると認められる目的、施設、方法等の要件を満たしている者に限り主務大臣による許可をもって国内での飼養等が認められます。

なお、愛がん目的による飼養は、指定前より飼養等されていた個体であって、施設の許可要件を満たしておりかつ繁殖を行わない場合に限り、許可の対象となります。

ジャワマングースを発見した際、外来生物法に関する疑問等がある場合には、環境省野生生物課等に問い合わせして下さい。

21. ハクビシン <食肉目ジャコウネコ科>

(1) 分類、種類

食肉目、ジャコウネコ科、ハクビシン属に分類される動物。ハクビシンはインド、ネパール、チベット、中国、台湾、ビルマ、タイ、西マレーシア、スマトラ、北ボルネオ等に広く分布しており、地域により 10 以上の亜種が知られています。

(2) 形態、習性、生理

体長 47～54cm、尾長 37～43cm、体重 3.5～4.2kg、体色は褐色で頸部、耳、四肢、尾は黒っぽい色をしており、鼻端から頭部にかけて白い線がはしります。夜行性で単独で行動し、平地から森林の樹上で生活します。雑食性の動物で鳥類、昆虫等を餌していますが、時にはミカン畑、トウモロコシ畑等に被害を与えることが知られています。

(3) 飼育上必要な施設、機材及び環境

一時的にはイヌ用のケージやモンキーケースを利用して飼育することができます。1頭での飼育では大きなケージは必要としませんが、樹



【ハクビシン】

上で暮らすことが多く木の枝や日中過ごす巣箱を用意すると良いでしょう。

餌としては果物の他、肉類、ドッグフード、鶏卵等を与えます。

(4) 飼い方のポイントと注意点

飼育の難しい動物ではありません。日常の管理をしっかりすることです。アライグマ、他の食肉目の動物に準じる所が多くあります。

22. ワラビー <有袋目カンガルー科>

(1) 分類、種類

ワラビーはオーストラリアに分布する有袋目カンガルー科に分類される小型のカンガルーです。一般的に販売されているのはダマワラビーと呼ばれる種類です。



【ダマワラビー】

(2) 形態、習性、生理

有袋類は重さ2gほどの未熟児の状態です。生まれた子供を下腹部にある皮膚の袋(育児嚢)の中で哺乳しながら育てます。薄暮から夜間に行動します。寿命は9年ほどです。体長(頭胴長)は42~68cmで、

尾長は33~54cm、体重は2.6~9.9Kgです。12~36ヶ月で性成熟に達します。非常におとなしい動物ですが、捕獲時には両後肢で蹴ります。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

飛び跳ねる動物ですのでケージでの飼養は無理があります。乾燥した場所に生息する動物ですので、水はけ、日当たり、通風の良い場所で飼養します。100平方メートルほどの面積の放飼場に雨の時や冬の寒さを避けることのできる3.3平方メートルほどの動物舎が必要です。犬小屋ほどの大きさの寝小屋も利用します。舎内には遠赤外線ランプ等の部分暖房器が必要です。また、動物が生活しやすく飼養管理を容易にするため、地面や床を砂地にします。水飲みや食器は犬用のもので十分です。寝床として乾草を用います。

(4) 飼い方のポイントと注意点

主食は草食獣ペレットやウサギ用ペレットを配合し、副食として青物、ニンジン、サツマイモ、リンゴ、バナナ等を与えます。口腔粘膜を傷つけ、顎骨の化膿性疾患(カンガルー病)を引き起こす恐れがあるため、粗雑な茎のある乾草の給与は控えて下さい。

寒さに強い動物ではないので、風邪を引かせないように防寒に気をつけて下さい。

23. ポッサム（フクロギツネ） <有袋目クスクス科>

(1) 分類、種類

ポッサムはオーストラリア原産の有袋目クスクス科に分類される中型の動物です。

(2) 形態、習性、生理

体毛は密でふさふさした尻尾を持っています。森林で樹上性の単独生活を行い、夜行性ですので日中は樹洞のなかで寝ています。寿命は14年くらいです。体長（頭胴長）は32～58cmで、尾長は24～38cm、体重は1.0～5.0Kgです。オスは9～24ヶ月、メスは9～12ヶ月で性成熟に達します。捕獲時には噛み付きま



【フクロギツネ】

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

2メートル四方ほどの金網ケージに止まり木、寝箱が必要です。出入口は、二重鍵にします。屋外の場合、寝箱に雨が入らないように屋根が必要です。床は土でもコンクリートでも可能です。水のみや食器は小型犬用のもので十分です。寒さには強い動物ですが、日当たり、通風の良い場所にケージを置きます。

(4) 飼い方のポイントと注意点

主食は青物、ニンジン、サツマイモ、リンゴ、バナナ等与え、副食として乾燥ドッグフードを与えます。隙間に潜り込むのが上手ですので、脱走防止のためケージの隙間を点検します。

(5) 健康と安全の管理

有袋類はトキソプラズマに感染するため、猫の排泄物に近づけないようにします。

(6) その他特記事項

日本の気候はポッサムが生息し易い環境です。ニュージーランドでは19世紀にオーストラリアから毛皮の採取のために移入したポッサムにより、森林の葉が採食され大きな被害が出ています。

フクロギツネについては、外来生物法に基づく「特定外来生物」として指定対象とする方向で検討が進められています。指定された場合は、飼養、保管、運搬、輸入、譲渡等が原則禁止され、適切な飼養等を行うことができると認められる目的、施設、方法等の要件を満たしている者に限り主務大臣による許可をもって国内での飼養等が認められます。

なお、愛がん目的による飼養は、指定前より飼養等されていた個体であって、施設の許可要

件を満たしておりかつ繁殖を行わない場合に限り、許可の対象となります。

フクロギツネを発見した際、外来生物法に関する疑問等がある場合には環境省野生生物課等に問い合わせして下さい。

24. コウモリ <翼手目>

(1) 分類、種類

翼手目に分類され、空を飛び回ることのできる唯一の哺乳動物で、その種類はげっ歯目に次いで多く、約1,000種が知られています。

大翼手亜目（オオコウモリ）と小翼手亜目（食虫性コウモリ）に大別され、オオコウモリは約162種、残りの800種余りが食虫性のコウモリといえます。

我が国には絶滅した2種類を含め33種が知られています。（オキナワオオコウモリとオガサワラアブラコウモリは絶滅種）。

コウモリの仲間はエコロケーションシステムにより餌の昆虫を捕まえるものが多数いますが、オオコウモリの仲間はこのシステムが発生していないものが多くいます。



【インドオオコウモリ】

(2) 形態、習性、生理

我が国には2種のオオコウモリが分布しています。1種はオガサワラオオコウモリで頭胴長190～250mm、体重390～440g程で、他は南西諸島に分布するクビワオオコウモリで、大きさはオガサワラオオコウモリとほぼ同じです。クビワオオコウモリはその分布している場所によりエラブオオコウモリ、オリイオオコウモリ、ダイトウオオコウモリ、ヤエヤマオオコウモリの5亜種に分類されています。

都会でもよく見かけるイエコウモリ（別名アブラコウモリ）は頭胴長40～60mm、体重5～10gです。ヤマコウモリは我が国に分布するオオコウモリを除く最も大型で頭胴長89～113mm、体重35～65gで翼を広げると40cmもあります。

オオコウモリ類以外の日本産コウモリは、エコロケーションシステムにより昆虫類を捕まえて餌としており、冬期は木のうろや家の戸袋等で冬眠をして過ごします。

(3) 飼育上必要な施設、機材及び環境

コウモリ類の飼育は動物園においてもオオコウモリ類が主体で、食虫性のコウモリではチャマイコウモリ（我が国では飼育は見られません）を除くとほとんど見られませんでした。近年

にいくつかの動物園で積極的に取り組んでいる例も見られます。

オオコウモリの場合、別名フルーツバットの名前どおり、バナナをはじめ各種の果実を細かく刻んで与えます。この他にパン、ひき肉、チーズ等を加えます。

種類によっては小さな飼育舎でも飛ぶ姿を見ることができます。多くの種類は暖地性のため冬期暖房が必要で、簡易な方法としては赤外線ランプやペット用のランプを使用します。

食虫性のコウモリ類はチマイコウモリ等特殊なものを除いてはほとんどの種が生きている昆虫を捕まえて餌としている関係から、飼育の場合も生きている昆虫を餌として与えます。都会にも見られるイエコウモリは保護されることの多いコウモリですが、餌を自ら食するようになるにはかなりの努力が必要です。ミールワーム（チャイロコメノゴミムシダマシの幼虫）をピンセットを用いて食べさせます。ぶら下がっている顔の近くにミールワームを常時置いておくのも一つの方法です。ニクバエを飼育し、その蛹を利用する方法を考えた飼育者もいます。

飼育のための用器はプラスチック製の水槽等を利用します。

ヤマコウモリやテングコウモリ等は小鳥用のケージを利用することもでき、小さな空間をうまく飛び回りますが、イエコウモリの場合、飛び回るためには最低 180cm 立方の空間を必要とします。

(4) 飼い方のポイントと注意点

オオコウモリ以外の食虫性のコウモリを飼育する場合、餌の確保と餌付けの努力が重要なポイントとなります。最近では生きた昆虫もペット用の餌として市販されるようになり、餌の確保の問題は解消されましたが、イエコウモリの場合、1日 20 匹ほどが必要です。

コウモリ類の飼育に当たっては未知の部分がたくさんあります。

外国産のコウモリ類の場合、入手が困難となりますが、我が国のコウモリの場合、狩猟の対象となっていないものの、オガサワラオオコウモリのように天然記念物に指定されている種類や生息数の減っているものもあり、むやみに飼育することはできません。

25. シカ（ニホンジカ・キョン） <偶蹄目シカ科>

(1) 分類、種類

偶蹄目・シカ科の動物。ユーラシア大陸、アフリカの一部、南・北アメリカに 58 種類ほどのシカが分布していますが、シフゾウのように野生状態では絶滅したもの、ペルシャダマンカ、アルフレッドサンバー等その生息数が減少している種類も少なくありません。

ニホンジカは我が国に生息しているシカで、いくつかの亜種に分けられます。北海道にはエゾシカ、本州にはホンシュウシカ、九州・四国にはキュウシュウシカ、屋久島にヤクシカ、慶良間諸国にケラマジカ、対馬にワンマジカが生息しています。

キョンは外来生物として伊豆大島、千葉県等に定着しています。

野生動物の場合、北に棲む動物ほど大型化するというベルクマンの法則があります。北か

ら南にかけて長い我が国に分布する北海道のエゾシカが最も大きく、南のヤクシカは体重がエゾシカの半分ほどにすぎません。

近年我が国でもシカを飼育し、肉、毛皮、角等を利用する養鹿業を営む所があります。中国では昔から盛んにシカを利用してきました。またニュージーランドのように積極的にシカを移入した国もあります。シカは亜種間の雑種ばかりでなく、種間の雑種も知られています。シカを飼育した場合、安易に放すようなことは行ってはなりません。

キョンは小型のシカで元来中国東南部、台湾に分布していたものですが、施設から逃げ出したものが野生化したとされています。



【 ヤクシカ 】

(2) 形態、習性、生理

シカには体重が 400kg にもおよぶヘラジカもありますが、我が国のシカは体長 140～180cm、尾長 15cm、体重 90～140kg (オス)・70～100kg (メス) のエゾシカ、体長 130～160cm、尾長 13cm、体重 70～90kg (オス)・40～60kg (メス) のホンシュウシカ、体長 120～140cm、尾長 12cm、25～40kg (オス)・20～30kg (メス) のキュウシュウシカと大きさが異なります。体色は冬期は茶褐色で白斑はなく、夏期には赤褐色で白斑が見られます。

シカはトナカイを除きオスにのみ角があり毎年生え変わります。

普通 1 産 1 仔で生まれた子供には白い斑の鹿の子模様があります。

キョンは中国南部、台湾が原産で体長 47～70cm、尾長 8～10cm、体重 12～14kg の小型のシカで、オスにのみ 6.5cm 程の 2 尖の角があります。上顎の犬歯は牙のようにのびます。体色は赤褐色で四肢は暗褐色をしています。群れをつくるはことなく、森林に単独で暮らしています。寿命は 10 年ほどです。

(3) 飼育に必要な施設、機材及び環境

飼育舎は普通金網を用いたフェンスで周囲を囲ったものが使用されます。特に大型のシカでは角の力が強く、丈夫なものを使用します。特にフェンスの裾はしっかり止まっていないと角によって巻き上げられることがあります。広い放飼場では雨よけの場所があれば問題ありませんが、狭い飼育舎では寝小屋を用意します。清掃等での搬出入の場合等には便利です。水飲み、草架等はヤギ等と変わりません。

飲料としては夏期には青草を利用し、冬期に乾草、ヘイキューブ等を与えます。この他に草食獣用固型飼料を常時給与します。

(4) 飼い方のポイントと注意点

シカ類は一般に驚きやすい動物で、扱いには気をつけねばなりません。捕獲後間もない個体では、飼育舎の周囲を目隠しで覆う等の処置も必要です。小型のキョンの放飼場内には隠れ場所を用意すると良いでしょう。馴れているシカは低いフェンスでも飛び出すことはありませんが、小型のヤクシカでも2mのフェンスを何の苦もなく飛び越えた事例があります。フェンスの高さは1.8~2mは必要になります。

9月以降、角の立派なオスではしばしば角による事故が見られます。同じ放し飼い場内の他の個体、時には人にも危険な場合があります。角が硬化した時点で切り落としてしまう方法もあります。成長期の袋角の状態では出血が見られ、切る時期としては適当ではありません。

シカを捕獲する場合、吹き矢等を用いて薬物により不動化をはかることがシカや人にとっても安全です。シカの体重、使用する薬物の種類等知っておくことが必要ですが、獣医師の分野になります。

(5) その他特記事項

キヨンについては、外来生物法に基づく「特定外来生物」として指定対象とする方向で検討が進められています。指定された場合は、飼養、保管、運搬、輸入、譲渡等が原則禁止され、適切な飼養等を行うことができると認められる目的、施設、方法等の要件を満たしている者に限り主務大臣による許可をもって国内での飼養等が認められます。

なお、愛がん目的による飼養は、指定前より飼養等されていた個体であって、施設の許可要件を満たしておりかつ繁殖を行わない場合に限り、許可の対象となります。

キヨンを発見した際、外来生物法に関する疑問等がある場合には、環境省野生生物課に問い合わせ下さい。

26. ヤギ（山羊） <偶蹄目ウシ科>

(1) 分類、種類

偶蹄目・ウシ科・ヤギ属に分類される家畜で、家畜化の歴史はヒツジとともにイヌに次いで古いものと考えられており、紀元前9千年から1万年頃、中近東においてノヤギやマーコールといった野生ヤギを飼いならしたものと考えられています。

全世界に飼育されるヤギは形態的にベゾアー型（トッケンブルグ種、ザーネン種等）、サバンナ型（カシミヤ種、ア



【ヤギ】

ンゴラ種等)、耳の長いジャムパリ型(ジャムナパリ種、ヌビアン種等)に分けることができますが、用途別には乳用種、肉用種、毛用種に分けることができます。我が国のヤギの飼育はその歴史が浅く、本格的に導入されたのは明治時代になってからのことです。現在はヤギの飼育、特にザーネン種等の乳用種は盛んではありませんが、九州、南西諸島においては肉用種のシバヤギやトカラヤギの飼育が盛んです。特にシバヤギは体高50cm程で、小型で飼育も容易なことから、実験動物としても利用されています。

家畜動物の再野生化はウマをはじめ、ラクダ、クジャク等でその例を見ることができますが、ヤギほど世界各地で再野生化した動物はいないといわれています。

我が国でも小笠原諸島において再野生化したヤギにより島の生態系を乱すことが問題となっています。

(2) 形態・習性・生理

小型のヤギ(ピグミーゴート)では体重15~20kg、ヌビアン種では50~80kg、大型のザーネン種では120kgに達するものがあります。体色は白色、茶色、黒等色々ですが、肩から脊、前脚に黒いすじの入るノヤギの体色をしたものも少なくありません。

角は改良され無角の品種もあります。オスにもメスにも見られるものがありますが、メスでは無角のものが多く見られます。やぎひげといわれる髭が下顎にあり、ヒツジとの見分けになります。

性質は温和で丈夫な動物で、手軽に飼育することができ、集団性が強く多数で飼育することも可能です。高いところを好む性質があり、木の枝にも登り木の葉を食すこともあります。

(3) 飼育上必要な施設、機材及び環境

小型のヤギの場合、屋根のついた小屋は1頭につき1平方ほどを必要としますが、大型ヤギではこれより大きくなります。また乾燥した所を好みますので、飼育舎は地面より若干高くし、運動場、休憩する場所を用意します。

ヤギはその温和な性質から学校等でも飼育されることが多く、子ども達にとっても飼育作業のしやすい施設とすることも考える必要があります。

草食動物のヤギは草だけ与えても飼育することはできますが、普通青草、乾草、ヘイキューブ、草食獣用ペレット等を飼料とします。野菜くずを用いることもできます。

青草や乾草を常時食すことのできる草架(くさかけ)、餌おけ、水飲み、ミネラル保給のための鉱塩を置く場所等がヤギ小屋には必要になってきます。

(4) 飼い方のポイントと注意点

青草のシーズンは野草を利用することができます。青草が常時入手できない場合は、乾草を主体とし入手できる野菜等を給与することになります。学校での飼育の場合、校庭の一角の芝生の場所等に首輪を付け、繋いでおくこともできます。

ヤギは性質が温和で丈夫ですので、比較的飼いやすい動物といえます。しかしウシと同じ反

芻動物で、消化器の疾患には注意が必要になります。繊維質の少ない飼料では便状に異状が見られることもあります。飼育舎が狭い場合、運動不足でしばしば蹄がのびることがあります。蹄がのびすぎたり変形が見られる場合には剪定鉸を用いてこまめに切ってやるようにします。

27. サル① <リスザル：霊長目オマキザル科、マーモセット：霊長目キヌザル科>

(1) 分類、種類

サルは私たち人にとっても近い動物です。一般の家庭で飼養しやすい種類は、霊長目のうち南米産であるリスザルやマーモセット等です。

(2) 形態、習性、生理

①リスザル

オマキザル科。南米のコロンビアからパラグアイに生息する小型の昼行性のサルで、大きな群れ（10～35 頭）を作って生活しています。寿命は12～25 年です。体長（頭胴長）は23～37cm、尾は32～42.5cmの長さです。体重は500～1,000gになります。オスは54～60 ヶ月、メスは30～36 ヶ月で性成熟に達します。無理に捕まえたりすると噛み付きます。糞や尿の独特な臭いがあります。大きな声は出しません。



【 コモンマーモセット 】

②マーモセット

マーモセットは中南米にすむキヌザル科に分類される小型のサル類の総称です。ペットとして飼養されているコモンマーモセットは耳の房毛に特徴があります。ブラジル東部の熱帯雨林が原産で昼行性です。寿命は16 年ほどです。大きさは、体長（頭胴長）13～30cm、尾長17.2～40.5cm、体重230～453gです。性成熟はオスで9～17 ヶ月、メスで10～24 ヶ月です。無理に捕まえたりすると噛み付きます。リスザルほど強くはありませんが、糞や尿の独特な臭いがあります。小鳥のような高い声をだします。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

小鳥用ケージ（できれば1 立方メートル以上）でペア飼養は可能です。ただし、床もメッシュにして排泄物が下に落ちるか、あるいはチップを敷き、身体が汚れないようにする必要があります。水飲みや食器はケージに付属した容器で十分間に合います。休息できるような太目の止まり木を取り付けます。寝床が必要になりますので木箱や段ボール箱（30cm 四方）をケージの上隅に備え付けて下さい。湿度はそれほど気にする必要はありませんが、室温は少なくとも15℃以上は必要です。また、ペットヒーター等部分暖房も併設します。しかし、真冬でも風が

なく日光が十分あたっていけば、屋外に出すことができます。ケージを置く場所は、日当たりがよく、通風の良い場所を選びます。ただし、真夏の直射日光は避けて下さい。

(4) 飼い方のポイントと注意点

食事は高タンパク質（粗タンパク質 25%含有）が必要です。そのため、マーモセット用飼料等を主食とし、適量の青物やニンジン、サツマイモ、リンゴ等を副食とします。ただし、副食は25%以下に抑えます。

食事および給水の回数は1日2回程度です。

食物中のビタミンD₂をほとんど利用しません。毎日、直射日光にあたらぬ場合、餌からビタミンD₃を十分摂取することが重要になります。

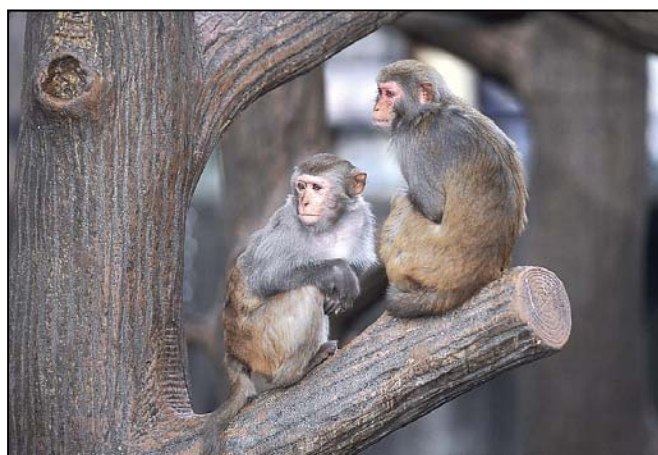
全ての霊長類はビタミンCを餌から摂取する必要があります。副食の青物、オレンジ、フルーツジュース、複合ビタミン剤やビタミンC剤で補う必要があります。

ケージの入り口には施錠し、また、飼育作業時には、飼養している部屋の窓や扉を閉め、脱走防止に努めます。また、糞尿には独特な臭いもありますので、隣の家が接近している場合、飼養場所を考慮して迷惑防止に努めるようにします。

28. サル-2 <タイワンザル・アカゲザル・カニクイザル：霊長目・オナガザル科>

(1) 分類、種類

霊長目に分類されるサルの仲間は北アメリカ大陸、オーストラリア大陸をのぞく世界に広く分布しており、およそ200種が知られています(最近の分類学ではこれより多くの種類に分けられています)。ニホンザルをはじめタイワンザル、アカゲザル、カニクイザルは霊長目、オナガザル科、マカク属に分類され、世界中で16種類が知られています。なかでもニホンザルは我国固有のサルで、サルの仲間では最も北に位置する所に生息することで知られています。



【アカゲザル】

(2) 形態・習性・生理

①タイワンザル

オナガザル科。台湾に分布し、頭胴長 36~54cm、尾長 26~46cm、体重 6~10kg、オスはメスに比べて大きく、群れで生活しています。

②アカゲザル

オナガザル科。分布は広くパキスタン北部、インド、ビルマ、チベット、インドシナ半島、

中国の福建省、四川省に生息しています。頭胴長 47～64cm、尾長 19～30cm、体重 5～7kg、オスはメスより大きく、10～50 頭、時にはこれより大きな群れで生活します。3 年程で性成熟に達します。

③カニクイザル

オナガザル科。ビルマ、タイ、ラオス、マレー半島、ボルネオ、ジャワ、スマトラ、フィリピンに分布し、20～50 頭ほどの群れで生活しています。海岸や水辺に好んで棲み、カニや昆虫等を餌とします。カニクイザルの名はここから来ていますが、カニを主食としているわけではありません。寿命は 27 年という記録があります。

(3) 飼育上必要な施設、機材及び環境

飼育の目的により必要な施設も異なります。3 種のサルは一般にモンキーケージとして実験動物用に市販されているもので飼育が可能です。

また若干大きなケージを用いて飼育する場合、鉄製のボルト、金網を使用し、コンクリートの床、寝小屋、止まり木、暖房施設等を用意します（各都道府県等で条例の定めのある場合これに従います）。3 種のサルはすべて、意外と力が強く、ケージの強度には十分注意を払います。サル類はその生活している状態から排泄をしつけることが難しく、清潔に飼育するには日常の管理に気をつける必要があります。

(4) 飼い方のポイントと注意点

3 種のサルは通常、木の葉、木の実、昆虫や鳥の卵等を食していますが、飼育する場合、甘藷、人参、青菜、ゆで卵等を与えて飼育することができます。サル用固形飼料を使用すると便利です。この場合、一日 100～150g を目安とします。水は給水器を用いて与えると、いたずらされずに与えることができます。時期、個体によって異なりますが、日量 500ml は必要です。

野生での 3 種のサルは群れを作って生活し、群れを維持するために個体間での上下関係がはっきりしています。飼育している個体が飼い主以外の人に攻撃的な行動をとることが普通に見られます。この行動が人に対しての事故につながる場合があります。またオスの犬歯は大きくて鋭く、咬まれると大変な外傷を負うこととなります。サルは手先が器用で知能も発達していることから逃げられてしまう場合があります。馴れているサルでも捕獲は困難が伴います。飼育しているすべての動物に言えることですが、注意する必要があります。

3 種のサルは比較的寒さにも強く、特に日本の冬に馴化した個体は暖房の必要がありませんが、一般的には寒さを嫌います。特にカニクイザルの尾は凍傷になりやすく、冬期の管理には注意します。

(5) その他特記事項

タイワンザル、カニクイザル、アカゲザルについては、外来生物法に基づく「特定外来生物」として指定対象とする方向で検討が進められています。指定された場合は、飼養、保管、運搬、輸入、譲渡等が原則禁止され、適切な飼養等を行うことができると認められる目的、施設、方

法等の要件を満たしている者に限り主務大臣による許可をもって国内での飼養等が認められます。

なお、愛がん目的による飼養は、指定前より飼養等されていた個体であって、施設の許可要件を満たしておりかつ繁殖を行わない場合に限り、許可の対象となります。

タイワンザル、カニクイザル、アカゲザルを発見した際、外来生物法に関する疑問等がある場合には、環境省野生生物課等に問い合わせして下さい。

○ 鳥 類

I. 鳥類飼育管理の共通事項

鳥類は羽毛に覆われ、飛翔力を持ち、卵生の恒温動物で、地球上には約 8,600 種の鳥が生息し、脊椎動物、鳥綱に属し、27 の目、約 150 の科に分類されています。

1. 飼育管理の面から見た生理上の特徴

- ・ 体を軽くするため、腸等の消化管は短く、速く消化して糞もすぐに排泄します。
- ・ 大部分の鳥は年 1 回春から夏にかけて換羽します。
- ・ 鳥は「病気を隠す」生き物といわれます。これは自然生態系の中で一番弱い生き物だからです。

犬やねこと比較して鳥の医学は発達していませんし、ワクチン等も家禽類を除いてありません。

早期発見、早期治療が必要です。

2. 飼育管理

(1) 飼育環境

鳥にとって有効で快適なスペースを用意することが、良い飼育環境をつくり出すことです。鳥が隠れられて休める安全な場所や、安心して止まれる止まり木、清潔な餌や水と容器、種によっては遊び道具を鳥かごや禽舎内に用意するのが理想的です。

(2) 換気

鳥の健康のために新鮮な空気を入れ替えます。窓や戸を細めに開けっぱなしにすると隙間を通る流れ風ができ、かえって風邪を引かせる恐れがあります。冬の寒い日等は空気の温まった午前 10～11 時ころに、短時間窓を大きく開けて換気をするとう良いでしょう。屋外の禽舎なら通風の良い場所と風の通らない場所を作り、鳥自身が居場所を選べるようにします。

(3) 採光

鳥の成長や健康のために日光浴も大事で 1 日 15 分間でも日光にあたることで、ビタミン D の形成を促し、成長を促進します。夏の強い日光の直射にあうと日射病にかかることもあり、夏なら朝のうちに日光浴をさせる等、季節により工夫が必要です。大きな鳥かごや禽舎なら日の当たる場所と当たらない場所を作り、鳥自身が好きな時間に日光浴ができるようにすると良いでしょう。

(4) 温度・湿度

気温が高すぎたり、低すぎたり、風通しが悪く蒸れてしまわないようにすることが大事です。人の快適な気温、湿度で飼えば問題ありません。

(5) 禽舎

鳥をもっとのびのびと飼うことを実現してくれるのが禽舎です。禽舎はふつう金網の日差し
の差し込む方向が南向きか東向きに建てます。全体が屋根に覆われた屋内式、半分が屋根に覆
われた半露天式、天井全体が金網で屋根のない露天式があります。雨の多い日本では半露天式
が鳥の健康のために良いでしょう。禽舎も飼う鳥の種類により、構造や材質が異なります。木
を齧るインコやオウムなどの禽舎は太めの金網を使い、骨組みも鉄等金属製が理想でも水鳥の禽舎
は池が必要ですし、キジ類だったら砂あびのできる床が必要です。屋外の禽舎の鳥は犬やねこ、
あるいはイタチ等、襲われることがあります。土台の強度、金網の網目の大きさ、扉の構造等、
害獣が侵入しないよう頑丈につくることが肝心です。

(6) 鳥かご

鳥を飼う目的により鳥かごも様々な種類があります。材質も色々なものが使われ、竹、木、
金属等のほか最近ではプラスチック製のものも作られています。オウム類は嘴の力が強いので、
太い丈夫な金属製のかごで飼います。

(7) 掃 除

鳥かごや容器は常に清潔にしておくことが大事です。日頃は汚れが目立つところ等をまめに
掃除し、月1回くらい全体の大掃除をするのが良いでしょう。

(8) 衛 生

普段から掃除をまめにし、飼育環境の清潔さを保つことが、鳥を健康に飼うことの第一歩
です。鳥かごや餌入れ等に熱湯をかけてから洗って日に干すことで、細菌や寄生虫を駆除でき
ます。

(9) 飼 料

鳥の種類により与える餌の種類や量は決まっています。まき餌鳥に与える穀類、すり餌鳥に
与えるすり餌、養鶏用の配合飼料、ハト用配合飼料、猛禽用の肉や魚、それに昆虫、菜、ボレ
ー粉（カキ殻：着色していないもの）等鳥の種類や状況により色々な餌を使用します。餌は毎
日新鮮なものが食べられるようにすることが大事です。殻つきのアワやヒエでは殻だけが残っ
ていることがありますから、毎日確認します。自動給餌器等を使う時は、残りの量の確認を怠
らず、餌の清潔さを保つことが大事です。

(10) 水

飲水は毎日新しく取り替え、いつでも新鮮な水を飲めるようにします。自動給水器を使う時
は残りの量の確認を怠らず、容器に水あか等が出ないようにこまめな管理をして下さい。水浴び
の好きな鳥では水浴び用の水も用意しますが、狭いかごでは周りを濡らしてしまうので、天気
の良い日等に時間を決めて水浴びをさせても良いでしょう。

(11) その他の特記事項

ガビチョウ、カオグログビチョウ、カオジログビチョウ、ソウシチョウについては外来生物

法に基づく「特定外来生物」として指定対象とする方向で検討が進められています。指定された場合は、飼養、保管、運搬、輸入、譲渡等が原則禁止され、適切な飼養等を行うことができると認められる目的、施設、方法等の要件を満たしている者に限り主務大臣による許可をもって国内での飼養等が認められます。

なお、愛がん目的による飼養は、指定前より飼養等されていた個体であって、施設の許可要件を満たしておりかつ繁殖を行わない場合に限り、許可の対象となります。

ガビチョウ、カオグロガビチョウ、カオジロガビチョウ、ソウシチョウを発見した際、外来生物法に関する疑問等がある場合には、環境省野生生物課等に問い合わせして下さい。

II. 種類ごとの個別事項

1. フィンチ

(1) 分類、種類

フィンチとは、スズメ目の60科中のホオジロ科、アトリ科、カエデチョウ科、ハタオリドリ科の4科の鳥を表す総称です。鳥類は同じ科に属する仲間であっても、種によって色々なものを餌とし、ホオジロ科の鳥の中には飼い鳥としての分類上、食性の違いから通常は軟食鳥として扱われるフウキンチョウ類、ミツドリ類も含まれます。したがって飼い鳥におけるフィンチの範囲は食性による違いも考慮して「前記の4科の内、粒餌(播餌)を主食として飼育できる



【カエデチョウ】

スズメ型の鳥」ということになります。そのうちの約50種程度が一般的な飼い鳥として知られ販売されています。なお、アトリ科のカナリアはフィンチの範囲に含まれる鳥ですが、飼育の歴史が長く、多くの品種もあることから通常、フィンチとは分けて個別に取り扱います。

(2) 飼育上必要な施設、器具、機材及び環境

①施設、環境

飼育には鳥かごや庭箱を使う方法と禽舎と呼ばれる大型の小鳥小屋を利用する方法がありますが、短期間の飼育には金属製の鳥かごを用います。鳥かごの大きさは小型フィンチのつがいでは35(間口)×35(奥行)×40(高さ)cm(以下同じ)、大型種のつがいでは45×45×50cmを標準に、少なくとも羽を広げて止まり木から止まり木へと飛び移ることができる空間が必要です。庭箱は前面を除く面が木製で小鳥を落ち着かせることができるので、神経質な鳥を飼育するのにむいています。鳥かごや庭箱は人の目と同じくらいの高さで安定の良い場所におきましょう。

禽舎飼育の場合は植木や草等を利用して自然に近い環境を再現できます。飼育の歴史が長く、飼い鳥化の進んだ一部の種類を除くフィンチ類は鳥かごでの飼育は難しく、禽舎飼育が勧められます。可能であれば1×2×1m程度の広いスペースが確保されると良いでしょう。

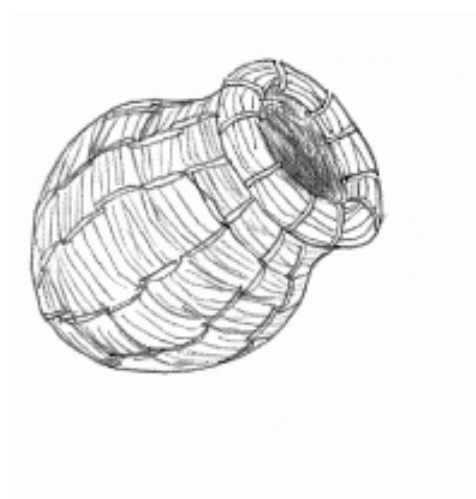
②器具、機材

止まり木は、鳥が生活のほとんどの時間を過ごす重要な場所です。木製のものが推奨され、鳥が止まった状態で爪の先端が止まり木に触れる程度が標準的な太さです。設置は鳥かごの奥と手前に段差をつけて鳥の尾羽が鳥かごや餌入れに当たらないように十分な間隔を取って取り付けます。止まり木を交差させて設置すると必要以上に糞で汚れるので、平行に取り

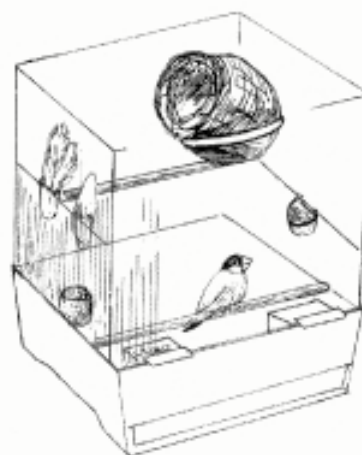
付けるのが一般的です。自然木を利用することも良いことです。熱湯消毒をした後、よく乾燥させて使用して下さい。

餌入れ、水入れは鳥かごに付属の物でかまいません。副餌用にかごにかけられる小型の容器と菜さしを別に用意します。フィンチの多くは、水浴びを好みます。飲み水とは別に水浴び用の容器が必要です。陶器製の小判型の水入れが安定性に優れ、洗浄も容易なのでよく利用されます。跳ね水防止には専用のカバーを利用するのも便利です。

巣は通常、ツボ巣と呼ばれるワラ製の物や木製巣箱等で、その鳥の習性や体の大きさに合った巣を選びます(図 7, 8)。カエデチョウ科の約半数は夜間巣に入って寝る習性を持ちますが、それ以外の大部分のフィンチは、繁殖以外の目的に巣を必要としません。雑菌や害虫の発生のほか、ホルモンバランスの異常の原因にもなるので必要な時以外は取り付けないようにします。巣材としてワラ、乾草、シュロ、コケ等も与えます。禽舎では十分に巣材を与えれば自分で営巣する鳥が多くいます。



【 ツボ巣 】



【 フィンチの飼育機材セット例 】

(3) 飼い方のポイントと注意点

① 飼料

フィンチ類の飼料も、他の動物と同じく栄養的に蛋白質、炭水化物、脂質、ビタミン、ミネラル等のバランスの良い餌が基本です。また、鳥種、季節的要因、繁殖期、換羽期、成長段階等を考慮して主餌に混合する穀物の種類や割合の工夫が必要です。フィンチ用として一般に市販されているのは、ヒエ・アワ・キビ・カナリアシードの4種の穀物を混合したもの(以下4種混合)です。

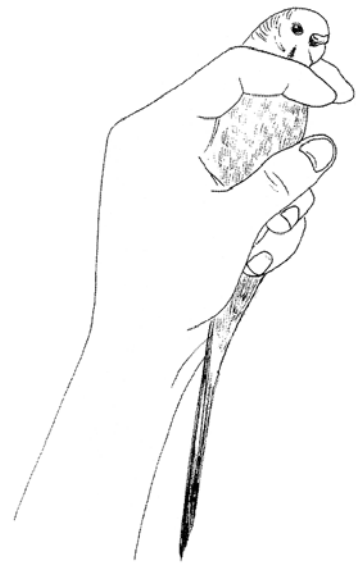
このほかにナタネ、エゴマ、ニガーシード等の脂肪餌、玄米や未熟米、エンバク(オートミール)等を与えることもあります。冬季や換羽後期には高栄養を必要としますので脂肪餌や動物性の餌を少量加えます。ムキ餌は雑菌やカビが付きやすく、栄養分も損なわれやすいので、特別な事情のある場合を除いて殻付のものが推奨されます。またフィンチ類の嘴は穀

物の殻を剥いて採食する形状に進化しており、鳥の習性上、ストレスの解消のためにも殻付の穀物が適正な飼料形状といえます。主餌の他に補助飼料としてボレー粉や青菜、ビタミンやミネラル等のサプリメントを与えます。青菜はビタミンの供給源として小松菜、キャベツ、アブラナ等を与えます。また、最近では各種フィンチ、カナリア用のペレットフードが市販されるようになりました。ブンチョウやカナリア等飼い鳥化が進んだ種類の場合、飼料の選択肢の1つとして利用してみるのも良いかもしれません。飲み水は常に新鮮なものを与えます。フィンチ類の鳥は水浴びを好む種類が多いので、水を汚しがちです。できる限り1日に2回は取り替えるようにします。

②日常管理

フィンチやインコ類の1日の生活は日の出とともに始まり、もっとも活発に活動するのは早朝の時間帯です。したがって朝できるだけ早い時間に水を交換し、主餌や副餌、その他の点検、補給を済ませます。この時に小鳥の状態を観察するようにし、餌や水の摂取程度、動作、便の状態等チェックします。普段と何か違うような気がした時は、早めに獣医師の診察を受けるようにしましょう。

かごの掃除は汚れの状態によって行います。あまり頻度が高くなると鳥が落ち着けなくなってしまいます。日の入りとともに鳥の1日は終了し、寝につきます。このサイクルは非常に大切に、不自然な人工灯の下での飼育、特に1年を通した日照時間のリズムを無視した飼育はホルモンに影響を与え、その結果、健康に影響を及ぼします。鳥かごの設置場所についても、日没後は消灯し、静かな環境においてやるのが望まれます。1日と1年の日照サイクルを適正に守ってやれば、小鳥は比較的丈夫な生き物です。



【 小鳥の持ち方 】

人差し指と中指の間に小鳥の頬の部分を
はさんで固定する

③季節ごとの管理

1) 春

もっとも気候の良い時期ではありますが、昼夜の気温差が激しい日もあり、若鳥などでは温度変化が大きくなりすぎないように注意が必要です。梅雨のころには飼料のカビや腐敗、ワクモ等の害虫の発生等に注意が必要で、器具類の消毒を適時行います。

2) 夏

羽毛が抜け替わる（換羽）季節に入ります。抜け始めの頃はそっとしておき、休養をとらせませす。新しく生えはじめる頃から十分なたんぱく質やビタミン・カルシウムの補給が必要

です。高温多湿の日が続き、餌にカビや虫が発生し易いので、日光に当てよく乾燥させて与えるようにします。また真夏の直射日光の下での長時間の日光浴は危険です。室内でも密閉されていると思わぬ高温になることがあるので注意します。

3) 秋

小鳥にとって一番安定した季節といえます。この時期は冬越しのための体力作りの季節でもあります。適当な日光浴と運動、ビタミン類の補給が必要です。晩秋になると1日の昼夜の気温差が大きくなるので注意します。初めて冬を迎える若鳥や温暖な地方原産の種には保温の準備をはじめます。

4) 冬

飼い鳥化の進んだ種類では通常の室内飼育で越冬は十分可能です。熱帯地方原産の種、体力の乏しい小型品種、老鳥等には保温を行います。一部分を暖めるのではなく、室内、少なくとも鳥かご全体が暖まるように、エアコン、ヒヨコ電球による保温が効果的で、石油やガスストーブ、コタツの利用はガス中毒や酸素の欠乏、火災発生等の危険を伴うので避けた方が賢明です。なお、乾燥が強い季節でもありますので適度な加湿も重要です。

(4) 代表的なフィンチ

① ジュウシマツ (十姉妹)

1) 分類、品種

スズメ目カエデチョウ科に属しますがジュウシマツは野生には存在しない鳥で、コシジロキンパラや近似種を交配して作り出された愛玩鳥です。野生の生活を知らないため鳥かごの中でもよく落ち着いていて、初めて鳥を飼う人にとって入門鳥として飼育が容易なフィンチの代表です。

2) 飼い方のポイントと注意点

主餌は4種混合で、ヒエ、アワを好みます。

② ブンチョウ (文鳥)

1) 分類、品種

スズメ目カエデチョウ科に属し、ジャワ島、バリ島等東南アジア近辺の原産です。一般に販売されているのは飼育下で代々繁殖を重ねた飼い鳥です。羽色によって桜、パイド、白、シナモン、シルバー、アルビノ等があります。白ブンチョウは日本で江戸時代に出現し固定された品種です。



【ブンチョウの孵化後22日頃】

2) 飼い方のポイント

主餌は4種混合のほか未熟米(中米)、エンバク(オートミール)を与えます。

③ キンカチョウ (錦華鳥)

1) 分類、品種

スズメ目カエデチョウ科に属するオーストラリア原産の初心者から愛好家まで幅広いファンがいる小鳥です。ジュウシマツよりやや小型で、飼い鳥化が進み、ノーマル、古代、白、シナモン、フォーン、ペンギン等様々な羽色の種類が作り出されています。

2) 飼い方のポイント

アワを好みますので、主餌は4種混合にアワを多めに増量します。巣は小型のツボ巣をもちいます。

④コキンチョウ(胡錦鳥)

1) 分類、品種

スズメ目カエデチョウ科に属し、オーストラリアフィンチと呼ばれる種類の中で最も代表的なフィンチです。その名前のおりオーストラリアの原産です。古くから飼い鳥として知られ、赤コキンチョウ、黄コキンチョウ、黒コキンチョウ等のほか、多彩な種類の色変わり品種が作りだされています。

2) 飼い方のポイント

雄は雌より色彩が鮮やかです。主餌は4種混合、ニガシードを少量加えます。寒さに弱く、北半球では冬季に繁殖に入るため保温は必ず必要です。巣はとっくり型の専用のツボ巣があります。

※その他、オーストラリア産フィンチには、コモンチョウ、オオキンカチョウ、カノコスズメ、サクラスズメ、シュバシキンセイチョウ等があります。これらの鳥はすべて保護政策がとられていて、市販されるのは繁殖されたものです。飼い方はコキンチョウと同様です。

⑤アフリカフィンチの仲間

1) 分類、品種

アフリカフィンチとは、アフリカ原産のフィンチの総称です。カエデチョウ科に属する種類が多く、小型で活発に活動します。代表的なアフリカフィンチとして、カエデチョウ、ホウコウチョウ、セイキチョウ、コウギョクチョウ、シマベニスズメ等があります。いずれも体長約10cmでジュウシマツよりやや小型、平均寿命は4~5年です。

2) 飼い方のポイントと注意点

金かごでも飼育出来ますが、出来れば庭箱飼育が適切です。主餌は4種混合餌にアワを増量します。カエデチョウ、ホウコウチョウは比較的丈夫な鳥で移動等の疲れが取れば、室内では保温の必要なく越冬します。通常飼育において特に気を使うことはありませんが、臆病なので静かな環境に置くようにします。

⑥キンランチョウ(金蘭鳥)

1) 分類、品種

スズメ目ハタオリドリ科に属します。アフリカ大陸に広く分布しているため、地域により色

合いの異なる亜種が多くあります。

2) 飼い方のポイントと注意点

雄は普段は雌と同じような色合いで、背部の斑紋の濃さで判別しますが、繁殖期になると頭部から胸部にかけて鮮やかなオレンジ色になります。主餌は4種混合を基本に、カナリアシードを好むので増量します。冬季にはニガーシード、虫類を少量与えます。禽舎内によく乾燥させたワラ、牧草を入れておけば雄が巣作りをします。

⑦ベニスズメ(紅雀)

1) 分類、品種

スズメ目カエデチョウ科に属し、インド、セイロンから東アジアにかけて広く分布する鳴き声の美しいフィンチです。

2) 飼い方のポイントと注意点

通常の主餌は4種混合でも良いのですがアワ以外ほとんど食べないので、アワをかなり多めに混合すると良いでしょう。

⑧ナンヨウセイコウチョウ(南洋青紅鳥)

1) 分類、品種

スズメ目カエデチョウ科に属します。ニューギニアを中心にセレベス、カロリン諸島、ソロモン諸島、北東オーストラリアに広く分布します。

2) 飼い方のポイントと注意点

神経質な小鳥で庭箱飼育するのが一般的です。身を隠すために天井から針葉樹の枝を吊るしてやると落ち着くようです。近似種のヒノマルチョウ(日の丸鳥)はニューカレドニア島の固有種でサイズや飼い方は同じです。主餌は4種混合で、カナリアシードを若干多くします。未熟米もあたえます。越冬には保温が必要です。

⑨ヘキチョウ(碧鳥)

1) 分類、品種

スズメ目カエデチョウ科に属し、マレー、スマトラ、ジャワに分布しています。

2) 飼い方のポイントと注意点

丈夫な鳥で飼い易く、室内では越冬も容易にします。主餌は4種混合、玄米や未熟米もよく食べます。中近東からアジアにかけて分布するギンパラ、アミメチョウ、キンパラ、コシジロキンパラ等もほぼ同様です。

2. カラス

(1) 分類、品種

スズメ目、カラス科に属し、原産地はユーラシア全域、アフリカ、アメリカでほぼ、世界全域に分布しています。

日本には大都会を中心に棲息するハシブトガラスと水田や畑がある郊外に棲むハシボソガラスのほか、ミヤマガラス、コクマルガラス、ワタリガラスの5種類がいます。

(2) 生態、習性、生理

カラスは体長 35～55cm くらいの中型から大型の鳥類で、野生のカラスは集団生活をしています。

利口で用心深く、しばしば外敵に対し、群れで防衛します。また、ものを隠す習性を持っています。声は太く、しわがれており、他の鳥の真似をするものもいます。カラスはヒナから飼育するとよく馴れます。

(3) 飼育上必要な施設、器具、器械

カラスはからだが大いなので、ケージで飼うより庭先に小さな禽舎を作ってその中で飼うのが良いでしょう。

ケージで飼う場合は1メートル四方以上のものを用意すると良いでしょう。

水、エサ入れの容器は大型インコ用の一般的なものならなんでも良いですが、カラスがいたずらしてひっくり返さないように工夫する必要があります。

室内で飼う場合には、紫外線が健康上必要となるので、紫外線灯が必須になります。また、止り木、おもちゃ等も用意してやる必要があります。

(4) 飼い方のポイントと注意点

カラスは雑食性ですので、人間が食べるものなら何でも食べます。野生のカラスは木の実、セミ等の昆虫類、スズメ等の小鳥や残飯等を食べていることはよく知られているところで、飼育下のカラスに与える餌としては、ドッグフード(水やお湯でふやかしたもの)、九官鳥の餌、バナナ、リンゴ等の果物、コマツナ等の野菜等があります。しかし、塩辛いもの、甘いもの等調味料を使っているものは病気の原因となるので与えないようにします。

カラスは水浴びを非常に好みます。毎日、洗面器やタライに水を汲んでやり、1日1～2回程度水浴びさせて、その都度日光浴させてやると良いでしょう。

カラスは知能が高く脱走しやすいので、その防止に充分配慮が必要です。

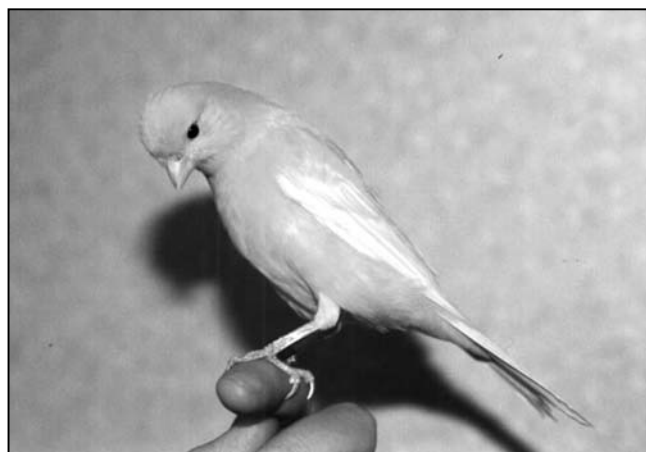


【ハシブトガラス】

3. カナリア

(1) 分類、品種

スズメ目アトリ科カナリア属カナリアという野生種を祖先にして、鑑賞鳥として長い歴史の中で作出された飼い鳥であり、①鳴き声②姿態③羽彩④色彩の4分野の鑑賞をそれぞれ目的として改良され、多くの品種が作られています。ジュウシマツと同様かご以外の生活を知らないのか、かご内で落ち着いて生活し、人を恐れることも少なく飼育しやすい種類の鳥です。国内の繁殖家のもとで繁殖されたカナリアには、産まれた年と通し番号の入ったクローズドリングが装着されています。



【レモンカナリア】

①ローラカナリア

鳴き声を鑑賞するための品種です。

②スコッチファンシーカナリア

姿態（スタイル）を楽しむ品種です。

③リザードカナリア

羽彩を楽しむ品種です。

④カラーカナリア（赤カナリア、レモンカナリア、白カナリア等）

(2) 飼育上必要な施設、器具、機材及び環境

金かごで飼育する場合は正面以外を段ボール等で囲い鳥が落ち着いて営巣できるようにします。なお、鳴き声の鑑賞やつがいの相性を見る場合には金かごや竹かごに1羽飼います。その他はフィンチと同様です。



【皿巢】

(3) 飼い方のポイントと注意点

カナリアの主餌は、ヒエ、アワ、キビ、カナリーシードの他にナタネ、エゴマ等の脂肪種子を全体の2~3割程度加えて配合します。その他の飼料としてボレー粉や青菜を与えるのはフィンチと同じですが、赤カナリアの換羽期には黄色の色素を増やすルテインを含む青菜、卵黄、ナタネ等の給餌は避け、カロチンを含む専用の色揚げ飼料やビタミンサプリメントを与えます。これによりオレンジがかった色への退色を防げますが、与えすぎると肝臓を悪くすることがあります。なお、換羽期の飼料管理として、換羽前期（抜けはじめ）には飼料のカロリーを下げて早く古い羽を落とし、その後、一気に高カロリーの飼料に切り替えて美しい羽を揃えるテクニックがありま

す。この方法はほとんどのフィンチにも共通して使えます。換羽期間を短くすることで鳥の負担も軽減できます。脂肪種子を好んで食べることもあり、糞はフィンチと異なりべっとりとしていて、金網やかごの底に付くと取れにくく不衛生になりがちです。脚について固まってしまうと爪が欠けたり、脚を傷めますので注意して下さい。

4. キュウカンチョウ（九官鳥）

(1) 分類、品種

インドから東南アジア、中国にかけて分布するムクドリ科の鳥です。体の大きさと肉だれの具合によって数種の亜種がみられます。



【 キュウカンチョウ 】

(2) 飼育上必要な施設、器具、機材及び環境

一般的には、1羽をキュウカンチョウ用の竹やプラスチック製のかごで飼育します。餌、水入れは専用のものが市販されています。陶器とプラスチック製の物がありますが、陶器製の方が安定もよく衛生上も好ましいでしょう。寒さに強くないため、冬季の保温器具を用意します。

(3) 飼い方のポイントと注意点

雑食性の鳥で成鳥にはキュウカンチョウ専用のペレットフードを、芯が残らないように軟らかくふやかしたものと、果物（リンゴ、バナナ、桃等）や蒸かしたサツマイモをさいの目に切って与えます。たまにミルワームやコオロギ等の生餌を与えます。その他、ビタミン等のサプリメントはペレットフードに混ぜて与えます。

雛や若鳥にはペレットフードだけでは栄養が不足するので、生肉やレバーを少量与えるか、または5～7分のすり餌に果物や卵黄を練り込んで少し軟らかめにして与えます。

キュウカンチョウは軟便の鳥です。汚れたかごや止まり木の糞で細菌が繁殖し、脚部の感染症になることがありますので洗浄はこまめに行います。また、水浴びはシャワー等を利用して定期的にさせます。

5. すり餌鳥（軟食鳥）

(1) 分類、種類

シジュウカラ等国内で身近な鳥から、ソウシチョウ、ガビチョウ類、キュウカンチョウ等の外来種の鳥もふくめて、「すり餌」というわが国独自に発達した餌を使って飼育する鳥類の総称で、分類上の種別ではありません。例えばホオジロは播餌で飼育すればフィンチといえます

が、すり餌で飼えばすり餌鳥ともいえます。

※なお、メジロやホオジロなど我が国に生息する鳥類を登録等の手続を行わずに愛がん目的で飼養することは「鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律」に抵触する可能性がありますので注意が必要です。傷病により保護を要する場合も同様です。



【ソウシチョウ】

(2) 飼育上必要な施設、器具、機材及び環境

すり餌鳥は通常「さしこ」と呼ばれる竹製のかごで飼育します。大きさは鳥種によってメジロ用の8.5寸から1尺6寸くらいまで、1寸刻みにあります。一般に関西地方では関東より一回り小さいかごを用います。また鳥の習性に合わせた、ヤマガラかご、ヒバリかご等専用のかごや水浴び専用かごもあります。餌入れは「餌ちょこ（ちょく）」水入れは「なつめ」という陶器のものを使用します。すり餌による鳥の飼育は鳴き声の鑑賞目的が大半で、囀鳴期を過ぎれば再び野に帰すことが一般であったため、長期にわたる飼育、繁殖については飼育目的の対象外であり、一時的に飼うための機材しか開発されていません。

(3) 飼い方のポイントと注意点

すり餌は、わが国で数百年前から利用されてきた飼育技術で、その範囲は、果食型、蜜食型、虫食型、雑食型の鳥に幅広く利用できます。

すり餌の材料は、植物質（米ヌカ、玄米粉、大豆粉、小麦粉）と動物質（魚粉）に大別されます。植物質の材料を上餌とよび動物質を下餌とよびます。上餌は、それぞれ煎って乾燥させ、粉末状にして使用します。下餌は塩分の低い川魚を乾燥させて利用し、脂肪分の調整のため魚の種類（一般にはフナを使いますが、特殊な場合には、山女、はや等も使われました）や内臓の有無等加工方法を選びます。すり餌の「～分餌」とは上餌の重量に対する下餌の重量比を表します。例えば3分餌とは上餌100に対して下餌30の混合物であることを示しています。下餌の多い餌を強餌、少ない餌を弱餌とよびます。何分の餌を選ぶかの選択は虫食の傾向の強い種類ほど動物性たんぱく質の多い「強餌」を用い、季節や成長等を考慮して強弱を調整します。寒期や成長期の雛鳥には通常より1～2分強めの餌を与えます。関東では3分、5分、7分、関西では2分、4分、6分が標準品として市販されています。これは関東に比べて関西が温暖であることから、少し「弱い餌」が適当とされたからです。すり餌の作り方は、1羽当たり手の平に半分程度の青菜をすり鉢でよく摺ることから始めます。その中にすり餌を加え水で固さを調整しながら練ります。メジロのような蜜食性の鳥は軟らかく、穀食や虫食の鳥は固めにします。水分を加えるため、すり餌は腐敗し易いので1日朝昼2回、夏季は3回程度新しく作り直す必要があります。すり餌鳥の補助飼料として、鳥の食性に合わせて、みかん、りんご、柿等

の果物や蜂蜜、クヌギやピーナッツ、エゴマ、麻の実等木の実や穀物等を与えます。虫食の鳥にはミルワーム、青虫、くも、バッタやコオロギの幼虫等の生餌やラード(豚の脂身)を時折与えます。なお、飲水及び水浴び用の水は常時新鮮なものを与えて下さい。

6. セキセイインコ

(1) 分類、品種

オウム目インコ科に属し、オーストラリア原産です。頭部が黄色で全身が緑色、後頭部から翼にかけて黒い斑紋がたくさんある原種から、200年以上にわたって飼育され、色々なタイプに改良されてきました。代表的な品種は、ルチノー、ハルクイン、オパーリン、オーストラリアンパイド等で、非常に多くの品種が作り出されています。



【セキセイインコ】

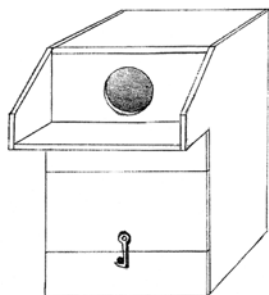
(2) 生態、習性、生理

野生では、オーストラリアの乾燥地帯に群れで生活し、雨が降るとその後、繁殖行動に入るといわれています。雨で草が伸び、餌が多くなるのに合わせて繁殖するのです。そういった習性があるので、餌の豊富な飼育下では仲の良いペアなら季節に関係なく繁殖します。巣は木の穴等に作ります。成鳥の色になるには3~4ヶ月かかります。

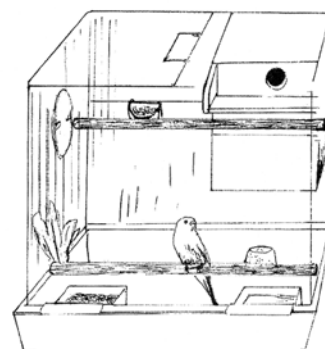
飼育していると大体10年前後は生きるようですが、上手に飼うと15年以上生きる個体もいるようです。

(3) 飼育上必要な施設、器具、機材及び環境

金かごで十分飼育できます。かごの置き場所は、夏は涼しく直射日光の当たらない場所、冬は暖房は必要ありませんが、暖かく風の当たらない環境に置きます。



【箱巢】



【セキセイインコの飼育機材セット例】

(4) 飼い方のポイントと注意点

非常に丈夫な鳥で、餌はヒエ、アワ、キビにカナリアシードを加えたインコ用混合飼料を主食とし、青菜も与えます。カルシウム補給としてイカの甲や塩土も必要です。

餌の量は1~2日で食べ切る量にして、餌の追加や総入れ替えは栄養のアンバランスを引き起こすので避けるべきです。身体の小さい鳥は体力がないので、いつも餌があることを必ず確認して下さい。水は毎日取り替えます。

7. 中型インコ類

(1) 分類、品種

中型インコと一般的に呼ばれるものは、オウム目の鳥の中でセキセイインコより大きく、ボウシインコ類よりは小型の種類です。具体的には、オカメインコ、ボタンインコ類、クサインコ類、ホンセイインコ類、メキシコインコ類、アケボノインコ類、ヒインコ類等が含まれます。

(2) 生態、習性、生理

中型インコといっても、単にその大きさだけで分けられているので、その生態、習性等は様々です。

ボタンインコの仲間は、アフリカのサバンナ等に生息していて、つがいの仲がよくラブバードといわれます。インコの仲間では珍しく、巣材を運びます。寿命は10~15年くらいです。

オカメインコは、オーストラリア原産で、性質が穏やかで他の小鳥とも同居しても大丈夫です。寿命は15~20年くらいです。

ヒインコ類は、花の蜜や果汁を食べるのに適応し、舌の先がブラシ状になっており、その食性のため糞は水分がとても多いです。寿命は20年以上です。

メキシコインコ類は、中南米に生息していて、オカメインコと同じくらいか、少し大きい鳥たちです。活発な性質です。人には慣れやすい鳥が多いようです。寿命はやはり15年ほどです。

アケボノインコ類は、中南米産で、体形はボウシインコ類そっくりですが、より小型で、ハトより一回り小さいくらいです。性質はおとなしいものが多いようです。寿命は20年以上生きるといわれています。

(3) 飼育上必要な施設、器具、機材及び環境



【 アカクサインコ 】

飼育するには、金かごか禽舎が適しています。オカメインコやボタンインコの仲間は、大き目の金かごに市販の巣箱を付けることによって繁殖することも可能です。他の種類は手乗り以外なら、禽舎で飼育するのが良いでしょう。ただし、メキシコインコ類は非常に破壊的なので、木製の部分はトタン等でカバーする必要があります。

(4) 飼い方のポイントと注意点

餌は、基本的にはセキセイインコ用の混合飼料に若干、ヒマワリや麻の実を加えると良いのですが、太りやすいのでかご飼いの場合は少なめに与えましょう。これに青菜や少量のリンゴ等の果物を与えます。イカの甲等もカルシウム補給として与える必要があります。

最近市販されているインコ用のペレットは、栄養価が高く、ビタミン等も追加されているので、混合飼料の代わりにペレットを使用することもできます。

アケボノインコやメキシコインコの仲間は、他の中型インコよりも果実や野菜等の副食を多く与えるようにします。

ヒインコ類については、他のインコ、オウム類と食性、生態が違うので、当然与える餌も違います。ヒマワリの種子やカナリアシードを食べる個体もありますが、基本的には果実食の鳥なので、できるだけ多く果物や野菜を与えます。また、最近ではヒインコ類用の人工飼料も販売されていますので、これらと果物、野菜で飼育します。

新鮮な飲み水を与えることはいうまでもありませんが、水浴びをさせることも健康を維持するのに重要です。自分で水浴びをしないようなら、霧吹きで水浴びさせましょう。もちろん、嫌がるようなら無理にしなくてもかまいません。

冬の温度については、ボタンインコ類やオカメインコ等は成鳥なら無加温で大丈夫ですが、風の当たらない暖かい所に置きます。他の種類も同様ですが、ヒインコ類の一部の種やアケボノインコ類等は若干保温した方が良いでしょう。いずれにせよ、本来、日本より暖かい国が原産です。寒さに耐えられるといっても、考慮する必要があります。

8. 大型オウム・インコ類

(1) 分類、品種

代表的な大型のオウム・インコ類は、東南アジアからオーストラリアにかけて生息する白色系で、尾が短く冠羽のあるコバタン、キバタン、タイハクオウム、モモイロインコ、クルマサカオウム等と南米産で全身が緑色のボウシインコ類（キソデボウシインコ、キホオボウシインコ、キビタイボウシインコ）それに同じく南米産で尾が長いルリコンゴウインコやベニコングウインコ、アフリカ産の全身が灰色で尾が赤いヨウムもよく飼育されています。

(2) 生態、習性、生理

ほとんどの種が熱帯に生息していて、果物や木の実、花、木の芽等を食べて生活しており、非繁殖期には群れで生活し、繁殖期になるとペアで生活します。

大きさはコバタンやモモイロインコ、ボウシインコ類、そしてヨウムはハト位の大きさで、300～400g弱の体重です。タイハクオウムやキバタンは600g程度、ルリコンゴウインコやベニコンゴウインコ等はニワトリ大で1kgを超える体重です。

寿命については、飼育下で30年以上生きることができます。中には50年以上生きた記録もあります。

(3) 飼育上必要な施設、器具、機材及び環境

嘴の力が非常に強く、金属のかごでも丈夫なものでないと簡単に壊してしまいます。特にコンゴウインコ類や大型のバタン類には、しっかり溶接されたかごが必要です。かごの大きさは、基本的には大きければ大きいほどよく、少なくとも翼を広げられる程度の大きさは必要です。冬季の温度については、初めて冬を越す場合は、15度以上に保つ必要があります。1回冬を越していれば、次の冬からは無加温で大丈夫です。しかし、寒さに耐えられるというだけであり、熱帯の鳥なので、できるだけ暖かい環境を整えるべきです。



【ベニコンゴウインコ】

(4) 飼い方のポイントと注意点

飼料については、以前はヒマワリの種子と麻の実、それにバナナ等を副食として与えるというのが一般的でしたが、現在は多くの大型種用のペレットが市販されていますので、こういったペレットを主食として、バナナやリンゴだけでなく、ブドウ、マンゴー等の果物やニンジンやサツマイモ、ブロッコリー、トマト等の野菜、時期によって入手しやすいものを毎日、1種類の量は少なく種類を多く、副食として与えます。ヒマワリの種子や麻の実等を主食とすることも出来ませんが、この場合、ヒエ、アワ、キビやハト用の配合飼料等も主食の一部として加えることが必要です。もちろん、この場合も上記の副食を与える必要があります。

大型のオウム・インコの飼育で気をつけなければならない1つが、肥満です。肥満になるかどうかは、運動量、餌、その種の特性によって決まります。

健康管理には水浴びも必要です。ほとんどの大型のオウム・インコは自分では水浴びはしませんが、シャワーをかけると喜んで羽を広げて水浴びをします。可能であれば暖かい日の午前中に水浴びをさせます。オウム類はこの水浴びによって、羽毛から出る粉が洗い流され、かごやその周囲が汚れるのを減らすことが出来ます。

大型のオウム・インコは、最近では手乗りとして、雛鳥が市販されています。これらを育てるにはかなりの時間と根気が必要です。ある程度育って、自分で餌を食べ始めたくらいの方が、

飼い易いでしょう。

(5) その他特記事項

大型のオウム・インコム類は、非常に鳴き声が大きく、鳴き叫んでいる時には、近くで話が出来ないほどです。鳴くのは朝や夕方が多く、何かで興奮した時等も鳴き叫びます。

近隣に迷惑がかからない環境での飼育が必要です。

9. ハト類

(1) 分類、品種

ハトはハト目ハト科の鳥類で、約300種がいます。そのうちよく飼育されているのは、カワラバトから改良されたといわれているレースバトやクジャクバト、ジャコビン等の品種でしょう。その他にジュズカケバト、ウスユキバトがよく飼育されています。ギンバトはジュズカケバトから改良された真っ白なハトであり、ウスユキバトも白色や淡色となった色変わりがあります。



【ピクトリアカンムリバト】

(2) 生態、習性、生理

ハトの仲間は種子や果実が主食で、大量に水を飲み、飼料が十分にあり、栄養状態がよければ通年繁殖できます。1回に2個の卵を産み、抱卵をはじめて18日で雛がかえります。その雛を素囊から分泌されるピジョンミルクという分泌物で育てるのがハトの仲間の特徴です。

いったんつがいになると、どちらかが死んだりしない限り、ずっと連れ添います。20年くらい生きるということもありますが、一般的には10～15年位が寿命のようです。

(3) 飼育上の必要な施設、器具、機材及び環境

ウスユキバトやジュズカケバトは大型のかごで飼育することができます。レースバトはハト小屋で飼育するのが一般的です。ハト小屋は、内部に巣箱とハトのためのトラップのついた入り口、到着台があることが必要です。クジャクバトやジャコビン等は禽舎や小屋で飼育する方が良いでしょう。

かご等で飼育する場合、ウスユキバトでも保温は必要ありませんが、冬は風のあたらない暖かい場所、夏は直射日光のあたらない涼しい場所におきましょう。

(4) 飼い方のポイントと注意点

餌については、ウスユキバトやジュズカケバトは小型なので、ヒエ、アワ、キビ、それにカナリアシード等を混合したインコム用の混合餌に少量の麻の実を混ぜると良いでしょう。青菜や

ハト用の塩土も必要です。レースバトやクジャクバト等の場合、市販されているハト用配合飼料を与えるのが一般的です。内容はコーン、サフラワー、マイロ、豆類等が入っています。これに加えてビタミン補給のため青菜やミネラル補給のための塩土を与えましょう。

ハト類は多量に水を飲むので、給水器等で水を切らさないようにすることが必要です。また、水浴びも好むので、水浴び用に大きな水入れを別に用意します。

10. ニワトリ

(1) 分類、品種

ニワトリはキジ目キジ科のセキショクヤケイから改良されてきたとされています。セキショクヤケイは東南アジア原産で、現在でも生息地では飼われているニワトリと交雑しているといわれています。ニワトリを大きく分けると、卵用、肉用、卵肉兼用そして愛玩用に分けられます。卵用として有名なのは白色レグホン、肉用は白色コーリッシュ、兼用はオウハンプリマスロック等があります。ペットとして飼育されるのは、チャボや



【ウコッケイ】

ウコッケイ、コシャモ等小型の愛玩用がほとんどで、チャボにはシロ、カツラ、ゴイシ等羽毛の色の違う品種があり、また尾羽の退化したウズラチャボ等もあります。ウコッケイにもシロとクロがあり、コシャモにもアカザサ、シロ、スズナミ等の体色があります。

(2) 生態、習性、生理

本来のセキショクヤケイは雑食性で、地上で種子や昆虫を食べ、巣も地上に作ります。夜間は外敵から攻撃されないよう、樹上で眠ります。そして、テリトリーを持ち、一夫多妻です。ニワトリもこの先祖の習性を受け継いでいます。

(3) 飼育上必要な施設、器具、機材及び環境

小型のチャボ等は、市販されているチャボ用の金かごで飼育することもできますが、できれば禽舎で飼育した方が良いでしょう。可能であれば南向きの西日の当たらない所に禽舎を作りましょう。また、冬季は風が直接当たらないようにします。体が入るくらいのも木製の箱を設置するとそこに産卵します。床には乾いた砂を敷くと掃除しやすく、また、ニワトリは砂浴びができます。

(4) 飼い方のポイントと注意点

飼料は、市販されているニワトリ用の配合飼料が良いでしょう。しかし、これだけではビタミンや素繊維が不足してしまいます。配合飼料に加えて、青菜類をできるだけ多く与えます。

ハコベ等の野草も良い餌となります。時々、ミルワーム等昆虫を与えると喜びます。配合飼料は、1日で食べきる量を毎日与えます。水も勿論、毎日新しくする必要があります。

一般的には、複数で飼育しますが、オスが2羽以上いると喧嘩する場合がありますので、オスは1羽だけにしましょう。

(5) その他特記事項

ニワトリは鳴き声大きいので近所迷惑にならないところで飼育します。

11. キジ類

(1) 分類、種類

キジ科には、スズメ位の大きさしかないヒメウズラから5kg近くになるインドクジャクまで、約210種類がいます。その中で、比較的多く飼育されているのは、ヒメウズラ、ウズラ、キンケイ、ギンケイ、インドクジャク、キジ等でしょう。



【インドクジャク】

(2) 生態、習性、生理

キジ科は鳥の中では脚力が強く、普段は地上で歩き回って生活しています。翼は長距離を飛翔するには適していませんが、敵に襲われると数十メートル以上飛んで逃げます。

オスは縄張りを持ち、抱卵、子育てはメスだけが行うのが一般的です。

雑食性で、草の種子や花、昆虫、トカゲ等の小動物も採食します。

(3) 飼育上必要な施設、器具、機材及び環境

小型のヒメウズラやウズラは大型の鳥かごでも飼育できます。可能であればキンケイやギンケイは1坪以上の禽舎を、インドクジャクにはオスの尾羽が折れないように2坪以上の大型の禽舎を準備します。禽舎は、夏は涼しく、直射日光が当たらず、冬は暖かく、風の当たらない場所に作りましょう。鳥かごの場合も禽舎と同じ環境におきましょう。

(4) 飼い方のポイントと注意点

飼料は市販されているニワトリ用の配合飼料が使いやすいでしょう。ただ、この配合飼料のみでなく、青菜類もできるだけ与えるようにしましょう。ハコベ等の野草も非常に良い餌となります。また、基本的には雑食性なので、時々ミルワーム等の昆虫を与えることも必要です。ヒメウズラは小型なので、小鳥用のヒエ、アワ、キビ等で飼育できます。

飼育する場合、繁殖期にはオス同士が闘争するので、オス1メス1のペアまたはオス1羽に複数のメスを1つの鳥かごや禽舎に収容します。キジ類では繁殖期にオスがメスを追いまわす

ことがあるので、1ペアで飼育するより、メスを複数入れることで、オスからの攻撃を分散することができます。また、植え込みや隠れ場を設けることにより、オスからの攻撃を避けることができます。

(5) その他特記事項

インドクジャクは鳴き声が大きいのので近所迷惑にならないところで飼育しましょう。

12. 水禽類

(1) 分類、種類

カモやカイツブリ等、一般に水辺で生活する鳥類を水禽といいます。代表的なものに、カモ目に分類されるハクチョウやガンがいます。これらの鳥の中には家禽としてのアヒル、ガチョウ、バリケン（マスコビーダック）をはじめ、冬期我国に飛来するハクチョウやマガン等のガン類、マガモやオシドリ等多くのカモ類がいます。

世界的に広く生息しているガン・カモ類は 150 種類ほどが知られていますが、我国では 48 種類が見られ、その多くが渡り鳥として渡来するもので、国内で繁殖するものはカルガモ・マガモ等少数です。



【オオハクチョウ】

(2) 生態、習性、生理

野生種は、ほとんどが北方で繁殖し、渡りをして南方で越冬するという習性があり、このために雛の

成長は早く、春に生まれ秋の始めには飛翔できるようになります。コブハクチョウも同様に、野生の場合は渡りをします。また、この渡りをするために親鳥は夏の間羽が抜け変わります。

餌は種子や水草、水生昆虫等で、基本的には草食性が強いものが多いです。

家禽化されたアヒルやガチョウは大型化し、ほとんど飛翔することはできません。一方で、品種によってはより多く産卵するように改良され、年に 300 個以上産卵するアヒルもいます。しかし、家禽化されてきた過程で、就巢性が失われており、人工孵卵育雛して雛を育てる必要があります。

(3) 飼育上必要な施設、器具、機材及び環境

飼育に必要なのは、少なくとも十分に水浴びのできるプールがある禽舎です。アヒルやガチョウは飛べないので問題ありませんが、オシドリやコブハクチョウは断翼してあれば、周囲を囲った池等で飼育することもできます。この場合は、ネコやカラス等の害獣に襲われないようにしなければなりません。

コブハクチョウは大型の鳥なので、かなり大きな池が必要です。

(4) 飼い方のポイントと注意点

餌については、ニワトリ用の配合飼料と小松菜等の青菜類が一般的です。池に餌をそのまま撒くと配合飼料は沈んでしまい、また、池の水が汚れるので、別のバット等に入れて与えた方が良いでしょう。

アヒルやガチョウは群れで飼育できますが、コブハクチョウは繁殖期になると縄張りをもって闘争するのでつがいで飼育した方が良いでしょう。オシドリは広さがあれば、複数のペアで飼育できます。

13. 猛禽類

(1) 分類、種類

トビやワシ、タカ等のワシタカ類と、フクロウやミミズク等フクロウ類を一般に猛禽類といます。分類学的な名称ではありませんが、いずれの鳥も他の動物を捕えて餌とすることからこの名があります。

ワシタカ類の属するタカ目には 300 種程が知られていますが、ワシタカ科の鳥は 237 種が世界的に分布しています。我が国にはオオワシ、オジロワシ等の大型のワシやオオタカ、クマタカ、トビ、ハヤブサ等 22 種類が見られ、内 16 種類が繁殖しています。

フクロウ目の鳥は世界に 200 種類程があり、我が国には大型のシマフクロウをはじめ、フクロウ、小型のブッポウソウ等 21 種類が知られており、内 6 種類が国内で繁殖しています。



【オオワシ】

(2) 生態、習性、生理

猛禽類は、ヤシハゲワシ等ごく一部の種を除いて、完全な肉食です。小型の種では、コノハズクのように昆虫を主食とする種があり、また、ミサゴのように魚を主食とする種もあります。

ほとんどの種が、縄張りを持ち、つがいか単独で生活していて、繁殖期には、かなりよく鳴きます。また、ワシタカ類は昼行性ですが、フクロウ類は一般的には夜行性です。

寿命は、種によって違い、飼育下では、小型の種で 10 年から 15 年くらい、オオタカ等は 20～30 年生きると言われています。

(3) 飼育上必要な施設、器具、機材及び環境

小型の種は、かごで飼育することもできますが、狭いかごでは翼を傷めやすいです。かごで飼う場合は、内側にダンボール等を付けると良いでしょう。ただし、通気に気をつける必要があります。自作で鳥の大きさにあった木箱を作ることもできます。中型種以上は禽舎や専用の小屋で飼育する方が良いでしょう。

馴らすために足革を付けてつないで飼う場合、オオタカ等は専用の小屋にTバーにつないで飼育します。チョウゲンボウ等はTバーではなく、ブロックを止まり木にします。

この方法は、知識のある経験者むけで、特に小型種は難しいです。

(4) 飼い方のポイントと注意点

動物食なので、鶏肉、牛肉等で飼育することが出来ますが、これらのみを与えているとビタミン、ミネラル不足となり、長期飼育は出来ません。そこで、可能であればマウス、ウズラ、ハト等、内臓も共に採食できる餌を与えるべきです。中型種以上は1日1回、小型種では1～2回の給餌が基本ですが、特に大型種は野生でも毎日獲物を捕獲できるわけもなく、1週間に1回程度、状態に応じて絶食させても良いでしょう。ただし、季節によって採食量も変わるので、絶食もその状態により加減します。

水については、基本的に水分は餌から取っていますが、自分から飲むこともあるので、きれいな水を用意します。水浴びも好むことが多いので、特に暑い時期には大きい水入れを使用します。

猛禽類は、餌が肉類のため、糞の水分が多く、また、たくさんの尿酸が含まれています。かなり臭気もあります。こういったことから、非衛生的になりやすいので、こまめに掃除します。

14. サギ類・カモメ類

(1) 分類、種類

サギ類とカモメの仲間は分類学上同じものではありません。また飼い鳥としては一般的なものではなく、動物園やトキ・コウノトリのように特別な施設で飼育されているものですが、餌となるものが似ていること、保護された個体の扱いが同じであること等から便宜上同様に取り上げます。

サギの仲間はコウノトリ目、サギ科に属しています。コウノトリ目の鳥にはこの他にシュモクドリ科、コウノトリ科（我国で



【 ユリカモメ 】

は絶滅したコウノトリを含む)、ハシビロコウ科、トキ科（絶滅した我国のトキを含む）の鳥類が知られています。サギ科の鳥類は全世界で60種が知られています。我国にはダイサギ、

コサギ、ゴイサギ、アオサギ等 19 種が知られています。うち、16 種類の繁殖が見られます。小笠原に生息していたハシブトゴイは絶滅しています。

カモメの仲間はシギ目、カモメ科に分類され全世界には 51 種が知られており、我国にはウミネコ、オオセグロカモメ、ユリカモメ等 15 種類が見られます。日本以外で繁殖するものが多く、2 種類が繁殖しています。

(2) 生態、習性、生理

①ゴイサギ

全長約 60cm、頭部背部は光沢のある黒色、翼と尾は灰色、嘴は黒色。コサギ等と集団で繁殖します。

②コサギ

会長 55～65cm、全身が白色、嘴と足は周年黒色で趾は黄色。コサギより大型のダイサギ、チュウサギが見られます。

③アオサギ

全長 90～98cm、日本では最も大きなサギです。背から尾にかけ青灰色、頭部に黒い羽がのび、嘴は褐色、足は緑褐色をしています。サギの仲間はいずれも魚、カエルや昆虫を餌としています。

④ウミネコ

全長 48cm、代表的なカモメの仲間。夏は背面と翼が青灰色、頭頸部は白色、嘴は黄色で先端に赤い斑があります。岩棚部は白色、嘴は黄色で先端に赤い斑があります。

⑤ユリカモメ

全長 38～43cm、冬鳥として日本にやって来ます。冬期は頭、卵、下面、尾は白、背と翼の上面は青灰色、足と嘴は赤色です。水辺、海岸地帯に生息し魚やカニ等を餌としています。

(3) 飼育上必要な施設、器具、機材及び環境

保護される個体の多くは衰弱していることが多いため、保温に努め、安静にさせて体力の回復をはかります。自ら採食しない個体も多く、アジ等の鮮魚をさし餌することが多くあります。

このような個体を維持するための保温器等があると便利です。

(4) 飼い方のポイントと注意点

猛禽類と同じ動物性の餌を食し、準ずる所が多くあります。

○ 爬虫類

I. 爬虫類飼育の共通事項

爬虫類には多くの種が含まれており、それぞれの種によって要求する飼育環境や管理が異なります。正確な情報のもとに、飼育環境の設定、管理が行われ、適正な飼育が行われるようにしなければなりません。以下に、一般的に留意すべき点について大まかに述べることにしますが、常に動物の状態を観察して、最初の環境設定や管理方法を修正することが大切です。

1. 飼育ケージと付属する用具類

(1) 一般的に求められる条件

一般的に求められる条件は、飼育個体に対して十分な広さを持つこと、脱走できないこと、温度や湿度の管理がしやすいこと、給餌や清掃といったメンテナンスがしやすいこと、観察がしやすいこと等です。

また、床材については、歩きやすいこと、ほこりが出にくいこと、汚れが目立ち清掃や交換がしやすいこと等を基準に選びます。また、多湿を好む種には保湿性が高いもの、乾燥した環境に生息する種には、濡れてもすぐに乾くものを選択します。

(2) 種類ごとに配慮すべき事項

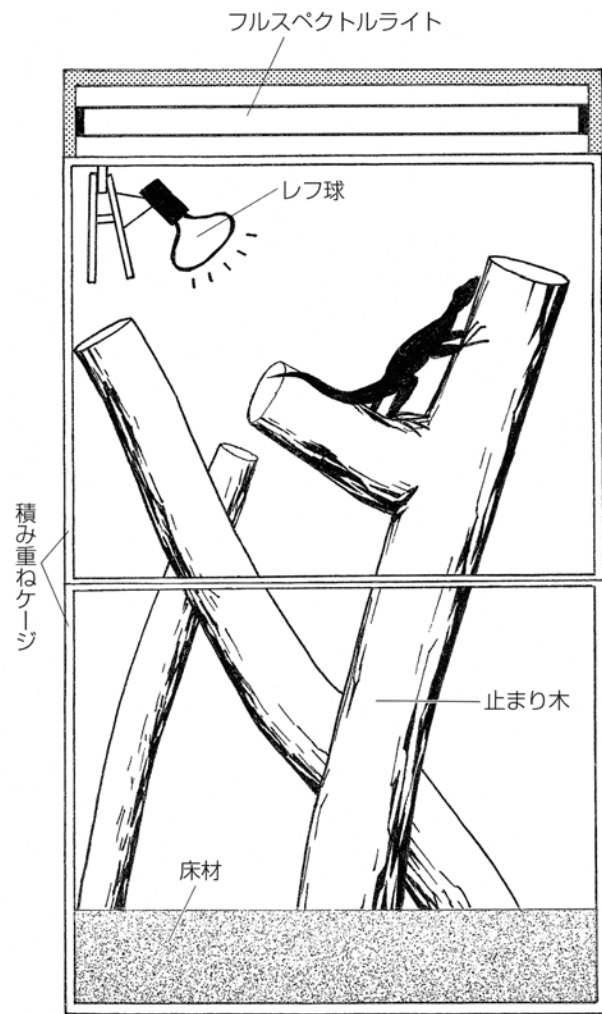
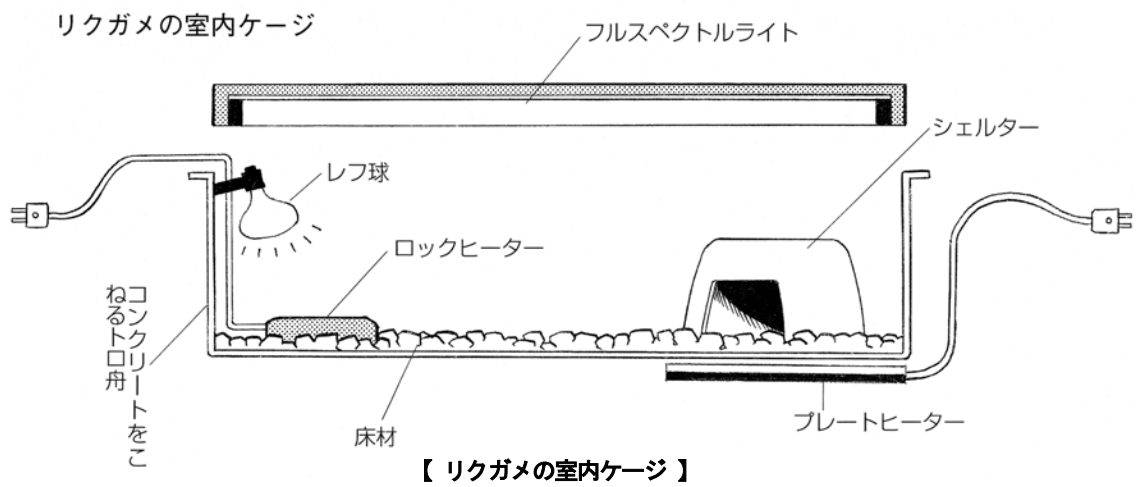
爬虫類には多くの種類があり、それぞれの求められる飼育環境は異なることから、次に示すようにそれぞれに特性にあったものにするように配慮する必要があります。

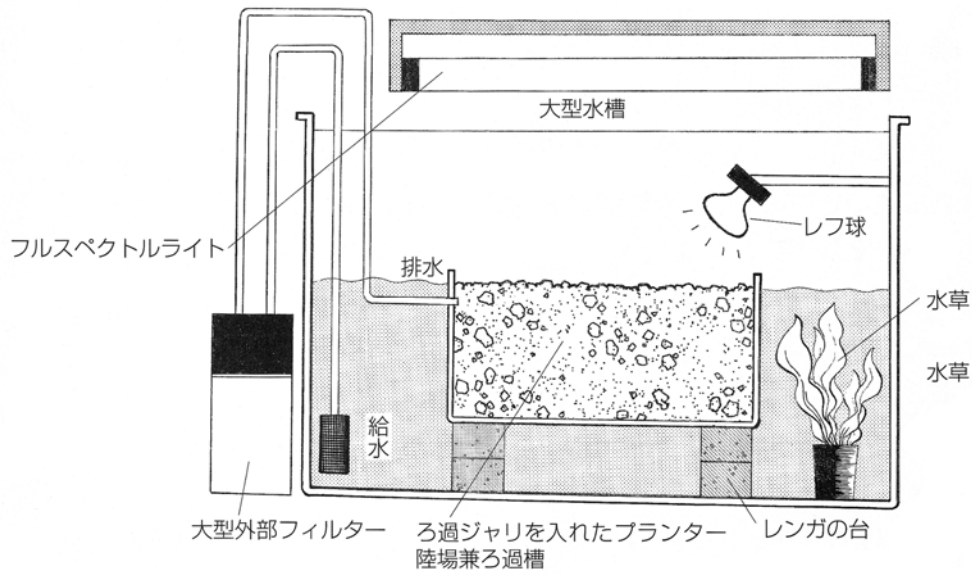
- ① 樹上棲の種には底面積よりも高さを重視・又、止り木
- ② リクガメ類のように行動範囲が二次元的な種には可能な限り広い床面積が重要
- ③ 水棲爬虫類にはろ過装置等大型魚類に近いセッティングと上陸するための浮島、流木
- ④ 地中に潜る爬虫類には砂に潜れる環境
- ⑤ 隠れる種にはシェルターを用意

(3) 付属する用具類

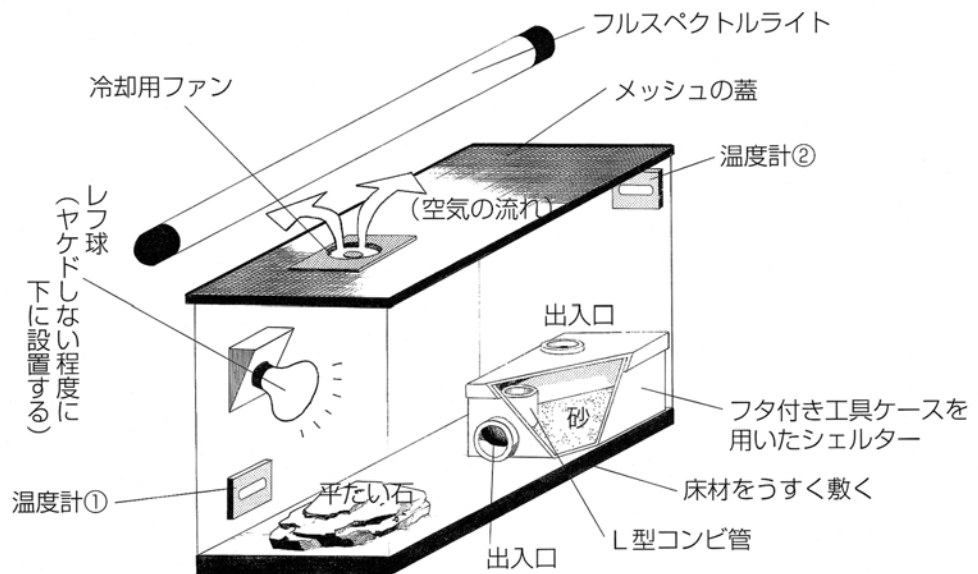
種類によって相違がありますが、一般的には付属する用具類としては次のようなものがあります。

- ① 餌入れと水入れ
- ② ヒーターとサーモスタット
- ③ 照明器具
- ④ 加湿器と除湿機
- ⑤ 蓋と鍵





【 水棲爬虫類のケージ 】



【 地中に潜る爬虫類のケージ 】

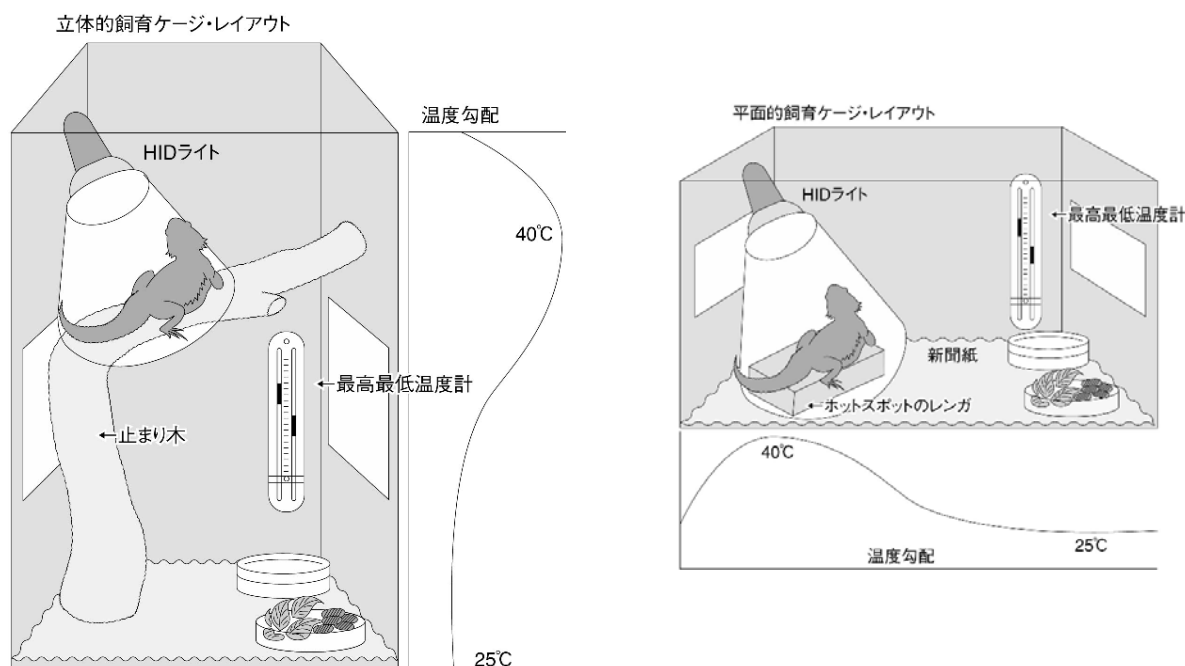
2. 温度管理

爬虫類は外温動物ですから、それぞれの種の要求に沿った温度管理を行う必要があります。温度により代謝機能が変動し、成長、内分泌、消化等に大きな影響を与えます。必ずしも熱帯産の種が高い温度を好むという訳ではなく、飼育種ごとの至適温度帯を把握して飼育環境の温度を設定します。わが国の夏の気温は、種によっては致命的な場合があり、低温を好む種の飼育にあたっては、エアコンによる温度管理が必要な場合もあります。

重要なのは飼育ケージ内に温度勾配を設けて、飼育個体はその時点で最も快適な温度の場所に移動できるようにすることです。ホットスポットと呼ばれる高温の場所をケージの一方に設置し、もう一方は低温になるように、このためにも飼育ケージにはゆとりのあるサイズが要求されます。

冬季の暖房に対しては、様々な保温器具が販売されていますが、大切なことは保温電球のような空気を暖めて飼育環境そのものの温度を上昇させるタイプの器具と、パネルヒーターのように動物自体を暖める器具を必ず併用することです。温帯に分布する種に対して冬眠を試みたり、無加温で越冬させようとする飼育者が見られますが、前者については相当の飼育スキルが必要なこと、後者については動物の生命を危険にさらす可能性が高いことから、基本的には避けるべきです。

温度は目に見えません、最高最低温度計の設置は爬虫類の飼育にあたって必須の装備です。



【 飼育ケージと温度勾配 】

3. 湿度管理

熱帯雨林に生息し高い湿度を好むものから、砂漠に棲み乾燥した環境に適応しているものまで様々な種がいます。いずれも通気性を十分に確保することが大切で、たとえ高湿度を要求する種であっても蒸れるような環境では体調を崩します。

また、冬季の極端に湿度が低下する季節には、暖房することによる乾燥とあいまって砂漠棲の種であつてもしばしば脱水を起こすため、霧を吹く等して最低限の湿度の確保に努めます。

4. 照明

例外はあるものの、多くのヤモリのような夜行性の種や、多くのヘビ類は照明を必要としませんが、多くのカメ類のような昼行性の種には必ず照明を設置し、昼間の時間帯に点灯するようにします。

爬虫類の飼育においては、古くから特にカルシウム代謝に大きな影響を持つ紫外線の照射に関心が高く、現在ではこの点を重視した照明器具が多く開発、販売されているので、こうした製品を利用します。ただし、紫外線は強ければ良いといった性格のものではなく、種ごとの紫外線要求量に見合ったものを選択します。

直射日光による日光浴は、大いに奨励されますが、通気性の確保及び動物が避難できる日陰の部分を用意することと、日光浴時の気温に十分な配慮をしないと熱死させてしまうことがあります。

また、昼行性の種であつてもむやみに明るい環境は好まない種も存在します。このような種に対してはシェルターを設けたり、飼育ケージに対して小型の照明器具を使用するといった配慮が必要となります。

5. 食餌と水

人工飼料が非常に発達しており、これだけで終生飼育が可能な水棲ガメ類以外の種においては、飼育している種に合ったエサを与えなければなりません。

肉食の種には、エサ用に販売されている昆虫類やマウス、魚、貝類、脂肪分の少ない肉等をそれぞれの種の食性に合わせて与えます。特にコオロギやミルワームといった昆虫類はカルシウム・リン酸比が悪いので必ずカルシウムの粉末をまぶして与えるようにします。これに加えてビタミン、ミネラル等の粉末も定期的に加えます。マウスは完全栄養であると考えられることが多いのですが、冷凍されたものはビタミンが破壊されていることを考慮し、やはり定期的なビタミンの添加が推奨されます。

草食種には、市販の野菜、果実、野草等を与えます。ここでもカルシウムとビタミンの添加は必要となります。

雑食で、何でも食べるから飼育しやすいという表現をされる種がいますが、これは逆に様々

なものをバランスよく与える必要があるということで、必ずしも飼育しやすいわけではありません。入手しやすい食餌に偏ることのないように注意が必要です。

飲用の水は必ず用意します。トカゲ類には止水を水と認識しない種がおり、霧を吹いたり、ドリップ式の容器を用意する必要もあるでしょう。乾燥した地域に生息するリクガメ類には、水を飲もうとしない個体が見受けられます。このような場合は、無理に飲ませようとするよりは、食餌にレタスやキュウリ等の水分量の多いものを混ぜて与えると良いでしょう。ヘビ類には必ず全身を浸すことのできる水容器を設置します。

6. その他の注意事項

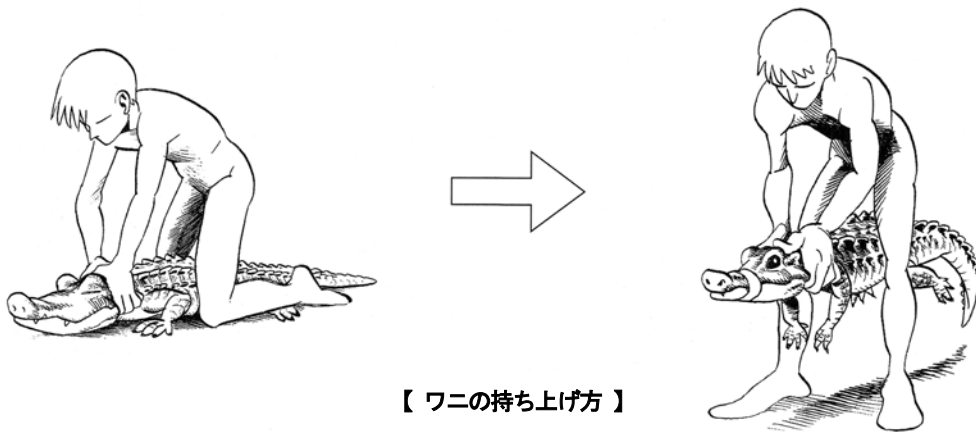
- ①よく食べるもの、欲しがるものでも与えてはいけない餌があります。純草食性の爬虫類でもドッグフードや昆虫等の動物蛋白を好んで食べる例がありますが、続けると腎臓障害によって死亡します。糖分の多いものや脂肪分の多いものも嗜好性が高いので多給しがちですが、長期的には必ず内臓障害を起こします。
- ②適切な種類の餌であっても、食後、消化能力が低下するような低温にさらしたり、大きすぎる餌を与えたり、不適切な温度の餌を与えると、致命的な消化不良を起こします。
- ③給餌間隔は爬虫類の種類によって大きく異なります。
- ④爬虫類は飼育環境に慣れるまで空腹でも餌を食べないことがあり、餓死するまで拒食する個体も珍しくありません。(適切な環境と隠れ家でしばらく安静にした後に驚かさないように給餌して、まずは餌付けすることが大切です。)
- ⑤マウス、昆虫等、通常では手に入りにくい餌を食べる爬虫類を飼育する場合、餌の入手ルートを確認する必要があります。
- ⑥昆虫食の爬虫類を飼育する場合、餌用の昆虫類の飼育繁殖技術を身につける必要があります。
- ⑦生餌を爬虫類のケージに長時間野放しにしないようにします。休息中の爬虫類が襲われてしまうことがあります。
- ⑧普段給餌の餌は腐敗したり萎れたりしないように、定期的に鮮度の良いものと交換が必要です。
- ⑨草食性爬虫類の餌は農薬に注意して用意します。自家製で栽培することも推奨されます。
- ⑩市販の栄養サプリメントが利用できます。過剰投与に注意しながら適宜利用します。

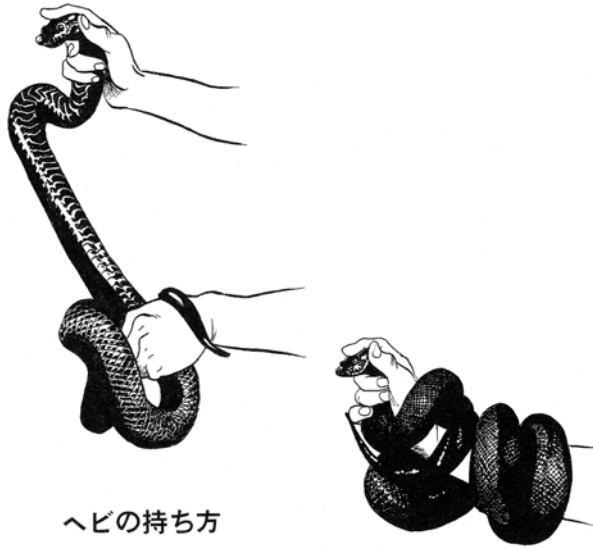
7. 爬虫類のハンドリング

爬虫類は人に触られることを好みません。管理上、よほどの必要がない限りはハンドリングしないようにすることが無難です。

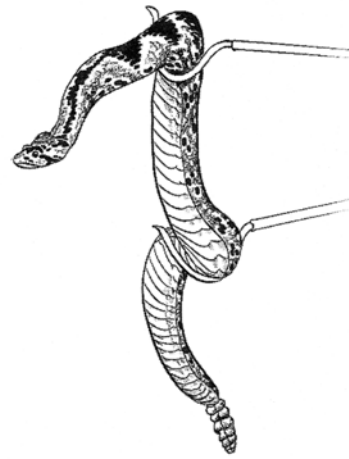
健康チェックや掃除のための移動の際、やむなくハンドリングする場合、なるべくストレスをかけないように適切な捕らえ方ですみやかに目的を達成するようにします。ヘビ類はスネー

クフックを使って、攻撃をかわしながら捕獲します。尾を自切するトカゲ、ヤモリ類は慎重に捕獲しないと尾を失います。皮膚の弱い種類では、手荒に扱うと皮膚が裂けてしまいます。シェルターを模した箱罠を自作して、そこに追い込んで捕獲する等の工夫をします。





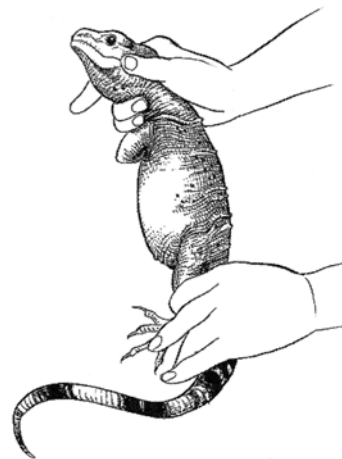
ヘビの持ち方



【スネークフックを使ったヘビの持ち方】



小型のトカゲの持ち方



【大型のトカゲの持ち方】

II. 種類ごとの個別事項

1. ワニ

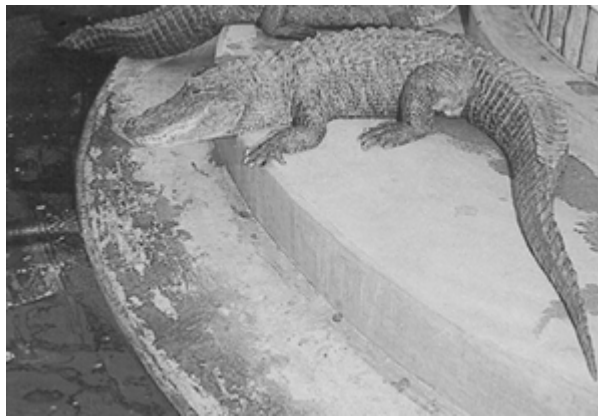
(1) 分類、品種

ワニはワニ目に属する動物で、通常3科22種に分けられます。

アリゲーター科：アリゲーター2種〈ミシシッピワニ、ヨウスコウワニ〉、カイマン5種〈メ
ガネカイマン等〉

クロコダイル科：クロコダイル 14 種〈イリエワニ、ナイルワニ、コビトワニ等。〉

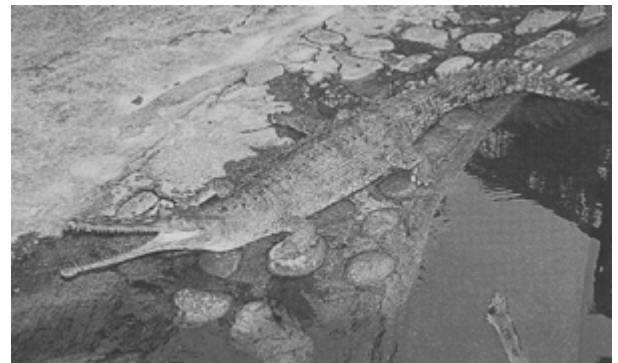
ガビアル科：ガビアル1種〈インドガビアル〉



【ミシシッピワニ】



【イリエワニ】



【インドガビアル】

(2) 形態、生理、習性

ワニの大きさは最大になっても1.5mに満たないものから、10mに達するものまであります。子供は20～30cmで生まれてかわいいものですが、成長が速く数年で超えます。餌が肉や魚ですから臭いは出ますし、水の濾過をしっかりとする必要があります。繁殖期や地震や雷の時等には大声で鳴く種類もありますが、そんなにやかましいものではありません。

(3) 飼育上必要な施設

ワニはアリゲーターの2種以外、熱帯・亜熱帯に分布しています。水中で生活し、陸にもよく上がります。水はワニがある程度泳げる位の広さが必要です。糞はだいたい水中でしますが、時々陸上でもします。濾過循環装置を付け、陸上から水を流しこまないような排水も必要です。水温は25～28℃位に保ち、20℃以下にはしないで下さい。採光は必要で、日光浴ができれば良いのですが、できなければ陸上でひよこ電球や赤外線ランプで照射して下さい。気温は30℃位あったら良いでしょう。飼育場所は限られていますから、温度が上がり過ぎないように注意が必要です。通風はあまり注意する必要はないかもしれませんが、ムレないように気をつけて下さい。

(4) 飼い方のポイントと注意点

餌はマウスやラット等のネズミ、鳥、淡水魚（ドジョウ、小魚、鯉等）です。餌はネズミ中心が良いと思われませんが、ヒヨコ、鯉等を組み合わせて色々な種類を与えた方が良いでしょう。その他、馬肉、レバー等があげられ週に1～2回与えます。子ワニにはカルシウムやビタミンを多く含む餌を与えて下さい。給水については生活水を十分濾過する必要があります。運動はあまり気にしなくて良いと思われませんが、逸走（脱走）には十分留意し、水槽の場合は金網等でフタをして、重しをのせておく必要があります。手荒な扱いをすると、気性が荒い個体になります。咬まれないように気をつけながら、やさしくして下さい。近寄ると、たいてい餌をくれるものと思って寄って来て、待つようになります。

(5) 健康と安全の管理

主な病気とその予防法としては、ワニに限らず爬虫類の健康はまず温度管理です。風邪や肺炎は温度管理が十分ならたいてい大丈夫です。

脂肪織炎は海水魚を与え続けると起こりやすくなります。

観察は動物を飼う時はいつでも必要で、食べ残し、糞、動き等に注意して見て下さい。時々餌を増やして様子を見ます。ケージ内は清潔に保って下さい。ワニは水中で過ごすことが多いので、特に水は清潔に保って下さい。

2. カメ

カメはカメ目に属する動物で、通常 12 科 200 種以上に分けられます。

	科 名	種類数	主な種類
潜 頸 類	①カミツキガメ科	1	カミツキガメ、ワニガメ
	②ドロガメ科	23	ニオイガメ、ドロガメ
	③カワガメ科	1	カワガメ
	④オオクビガメ科	1	オオクビガメ
	⑤ヌマガメ科	76	クサガメ、イシガメ、アカミミガメ
	⑥スッポン科	22	スッポン
	⑦スッポンモドキ科	1	スッポンモドキ
	⑧リクガメ科	39	ガラパゴスゾウガメ、ホシガメ
	⑨ウミガメ科	6	アカウミガメ、アオウミガメ
	⑩オサガメ科	1	オサガメ
曲 頸 類	⑪ヨコクビガメ科	17	テレケイヨコクビガメ、ヌマヨコクビガメ
	⑫ヘビクビガメ科	30	マタマタ、オーストラリアナガクビガメ

カメが棲む場所は、例外はありますが、四肢の形態である程度判断できます。池や川等に棲むヌマガメ類は、指の間の水かきの発達で分かりにくいかもしれませんが、指がはっきり分かります。陸に棲むリクガメ類は、四肢がこん棒状をしていて、爪ははっきり分かりますが、1本1本の指は分かりません。海にすむウミガメ類は、前肢がオール状をしています。

①ヌマガメ類

1) 分類、品種

ヌマガメ類とは、広い意味では池や川等に棲み、時々陸にあがるカメの総称で、リクガメ類とウミガメ類以外はこれに含まれ、狭い意味ではヌマガメ科に含まれるカメを指します。ヌマガメ科はカメの中でもっとも大きい科で、いちばん普通のカメらしいカメで、代表的な種類は日本にいるニホンイシガメ、クサガメ、北米産のスライダー類やクーター類で



【クサガメ】

す。ニホンイシガメやクサガメの子ガメはゼニガメと呼ばれます。スライダーやクーターの子ガメは緑色をしているのでミドリガメと呼ばれます。スライダー類の代表はミシシippアカミミガメです。

ヌマガメ類は70種以上ありますが、飼育方法はおおむね共通事項が多いので、ここではヌマガメの仲間としてひとくくりに飼育方法を紹介します。

2) 形態、生理、習性

スライダーやチズガメの多くは、孵化したての子ガメが輸入されることが多く、販売されている時の甲長はわずか3cm程度ですが、順調に成長すると4~5年後には雌で20cmに達します。種類によって異なりますが、スライダー類の寿命はおおむね20年ほどとみて良いでしょう。

多くが温帯性の亀であり、日本の四季によく順応します。十分なスペースと良好な環境を用意すれば、通年屋外飼育が可能で、屋内飼育よりもむしろ推奨されます。

肉食に近い雑食性で、野生ではザリガニをはじめとする水棲小動物やその死骸、各種水草やその腐植などを口にしています。

成長して20数cmに達したカメは、人馴れしている個体をのぞき、荒い性質をもつものが多く、咬み付く力もつよく、くちばしも鋭いので、咬まれると怪我をします。

大きな個体を屋内で水槽飼育をする場合、毎日水を変えても大量の糞尿によって相当な悪臭がします。

3) 飼育上必要な設備と機材

ヌマガメ類本来の生態を考えると、屋外の池で飼育するのが理想的です。ベランダに大型水槽を設置した飼育がこれに続きます。しかし、たいていの場合、屋内の水槽飼育ということになりますが、大きく成長した個体では、最低でも90cm、通常は120cmの大型水槽を用意しないと、泳ぎ回ることができません。

以上のことからヌマガメを正しく飼育するためには、アロワナ等の大型魚を飼育するつもりで飼育施設を用意する必要があります。ただし、アロワナ等よりもはるかに水を汚しますので、強力かつ大きな濾過システムをつくる必要があります。目詰まりのしにくい荒めの濾材（直径3~4cm大の溶岩濾材が最適）を底面濾過装置（穴の開いた塩ビ板に塩ビパイプで足を付けスノコにしたもの）にセットして、これに大きめの外部濾過装置接続して水をまわし、月に一度程度、部分的に水換えを行います。底面濾過装置にヘドロがたまりはじめたら、水槽ごと大掃除をしますが、直径3~4cm大の溶岩濾材を利用すると、おおむね1年に1度程度のメンテナンスですみます。

甲羅干しのための陸場を水面付近につくります。従来言われているような底砂利で傾斜をつくるのではなく、十分な水深をとった上で、浮島をセットします。子ガメから親ガメまであらゆる大きさのカメに対応した様々な製品が売られていますのでそれを利用します。

照明は、人工太陽灯を浮島にむけて照射し、上陸したカメがあたれるようにします。

室内飼育のカメにあてる照明は、以下の要因を満たしたうえで、太陽光の代用とせねばなりません。

すなわち、体温をあげるための熱、十分に明るいこと、物体本来の色がきちんと見えるような光の色、カメの生理活性を高める波長を含むこと、等の要素を過不足なく満たしていないと、カメの健康は維持できません。市販の器具でたとえると、ハロゲンライトで熱と明るさを。これに爬虫類用の蛍光灯を組み合わせると紫外線を補助するというのが一般的です。

4) 飼い方のポイントと注意点

餌は市販のヌマガメ用配合飼料か、鯉の餌が利用できます。カメの餌と称する商品の中には、バランスの良い配合飼料以外にも色々ありますので、犬でいうところのドッグフードに相当する配合飼料を選びます。バランスの良い配合飼料を与える限り、基本的に副食は必要ありません。

必須ではありませんが、爬虫類用のビタミンやカルシウムを配合飼料に添加して与えると病気の予防になります。

毎日食べるだけ与えると容易に肥満し甲羅の成長と身体の成長のアンバランスもおこしやすいので、適宜、給餌量や間隔は加減して下さい。

また、ベランダで飼育している場合、脱走に注意しないと落下事故等がおこります。

5) 健康と安全の管理

ヌマガメ類の多くは基本的に丈夫なカメで、適切な施設で適切な管理をして育てれば、あまり病気はしません。

よくある病気は、カビ等による皮膚病、日光浴不足による代謝性骨異栄養症、ビタミンA欠乏症、仲間どうしや同居の犬等による咬傷、脱走後の落下や交通事故による外傷（甲羅の損傷を含む）、浅い水深によって手足に体重がかかっておこる手足の皮膚の潰瘍、不衛生な水によっておこる甲羅の潰瘍等ですが、いずれも、適切な飼育を心がければ、まずおこらないことばかりです。

②ワニガメとカミツキガメ

1) 分類、品種

ワニガメとカミツキガメは共にカミツキガメ科のカメで、前者は北アメリカ南東部、後者は北アメリカから南アメリカ北部に分布しています。



【 ワニガメ 】



【 カミツキガメ 】

2) 形態・生理・習性

ワニガメは、最大甲長 80cm (体重 113kg) の記録があり、他の大型のカメと同様に順調に成長すれば、人力での移動もままならない物体と化します。

強靭な前足や鋭い爪とあいまって、総じて凶暴で危険なイメージを見るものに植え付けます。ただし、外見と実際の性質は別で、不適切な取り扱いをしない限り、積極的に人を攻撃してくる生物ではありません。おおむね四季のはっきりした気候帯の河川や湖沼の水底で生活し、産卵時以外はほとんど上陸しません。日光浴は、浅瀬で水面付近に浮上して行うようです。魚類を中心として口にはいるサイズであるなら、哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、甲殻類、貝類等、様々な生物を捕食し、一部は植物質を採餌します。

寿命は飼育下で 70 年という記録があります。

カミツキガメは、5つの亜種に分けられます

大きいもので甲長 49cm ほどに成長し、形態はワニガメに似ていますが、くちばしは鉤状には発達せず、背甲のキールもあまり発達せず、ワニガメよりはつるんとした形をしています。ワニガメと同様に河川や湖沼に棲み、一部は汽水域にまで生息域を広げています。

カミツキガメはワニガメ同様、口に入るものなら何でも捕食しますが、ワニガメよりも植物質を多く食べる傾向にあるようです。性質はワニガメより活動的で、取り扱い時の性質の荒さは明らかにカミツキガメの方が上です。発達した上半身で、上体を上下・前後させて相手を威嚇し、勢い良く咬み付いてきます。カミツキガメの寿命は飼育下で 38 年という記録があります。

3) 飼育上必要な施設と器材

カミツキガメもワニガメもほぼ完全な水棲生物であることから、水槽や池での飼育となりま

すが、ワニガメは巨大に成長し、カミツキガメは活発に活動することから、どちらも可能な限り大きな水槽や池を用意する必要があります。(規格水槽では1800mm水槽、可能なら水産業用の養魚プールを用意。)

また、水からあまり出ないとはいえ、どちらも脱走の名人ですので、脱走できない設備を作ります。

水の深さは、カメが四つんばいになって足と首を伸ばした状態で吻端が水面に出て呼吸ができる程度とします。取り扱い時に危険が生じる動物であることから、大きな排水バルブを設置して、直接個体にさわらずとも換水ができるように工夫します。

水温は、中南米の亜種をのぞき、日本の屋外の環境にまかせて問題はありません。ただし、冬季や春先、晩秋はヒーターで水温を管理し、25度ほどが維持できるようにします。冬眠をさせる場合は保温しませんが、死亡する可能性がありますので、亜種の同定を厳密におこなって耐える種類かどうか確認します。餌を大量に与えた直後は28度くらいまで水温を上げると代謝が上がって消化が進むようです。ただし、カメがヒーターを破壊する危険性がありますので、カバー等の保護対策をします。また、海水魚のオーバーフロー濾過システムに見られるように、濾過用の水槽を別に1本用意して、ポンプで水を循環させ、日常的に水を濾過しつつ、大量の排泄がみられた時に全体を換水するという方法も有効です。この方法では、抜気による溶存酸素量の増加(粘膜での呼吸を行うので)、水質の安定、ヒーターを濾過水槽側で安全に管理できる等のメリットがあります。

照明は、屋外で飼育する限り、日光が当たれば十分で、室内飼育の場合でもアカミミガメほどの強い光は必要ないようです。

幼体は、観賞魚の規格水槽で飼育できます。

4) 飼い方のポイントと注意点

カミツキガメもワニガメも餌は基本的に動物質を与えます。大きな個体では、週1回、小さな個体では毎日か隔日で給餌しますが、小型の個体は成長させなければならぬので、量だけでなく栄養のバランスにも気を使います。

幼体の餌は、市販の配合飼料を中心に口にはいるサイズの生餌を適宜あたえ、体が大きくなってきたら、川魚やザリガニ、マウス、ラット、ウズラ等の全体食を与えます。爬虫類用総合栄養サプリメントを添加して栄養の不足を補います。与える量は、一度に食べるだけを基本に、肥満や体形の異常が出ないように調節します。

基本的に、飼育施設にカメの知識がない人間や子供を近づけないようにします。普通の人は、カメの瞬発的な攻撃スピードをイメージできずに不用意にカメの頭部に手を差し伸べる危険があります。

カメが水槽の中で立ち上がって、壁面を這い登ろうとした時、前足が水槽のへりにかからないようであれば脱走の心配はありませんが、しっかりした蓋を付けた方が無難です。また万が

一水槽から脱走しても、水槽の置いてある部屋からの脱走ができないように部屋にはしっかりしたドアを付け、施錠等を行います。

5) 健康と安全の管理

適切な管理をしていれば病気になることは少ない生物です。特に大量の排泄物による水質悪化と急激な換水による水質の急変で皮膚や甲羅を傷めることがあります。飼育設備と管理の工夫で予防できます。管理上の危険防止とカメ同士のけがを防止する観点から、ひとつの水槽に複数を飼育することは常識的に考えられません。

そのほかの外傷として、執拗に水槽から出ようとしたために足の裏がこすれて潰瘍ができる場合があります。環境を見直し、水深を深めにとって、悪化を防ぎますが、大型の個体では治療困難です。

6) その他の特記事項

カミツキガメについては、外来生物法に基づく「特定外来生物」として指定対象とする方向で検討が進められています。指定された場合は、飼養、保管、運搬、輸入、譲渡等が原則禁止され、適切な飼養等を行うことができると認められる目的、施設、方法等の要件を満たしている者に限り主務大臣による許可をもって国内での飼養等が認められます。

なお、愛がん目的による飼養は、指定前より飼養等されていた個体であって、施設の許可要件を満たしておりかつ繁殖を行わない場合に限り、許可の対象となります。

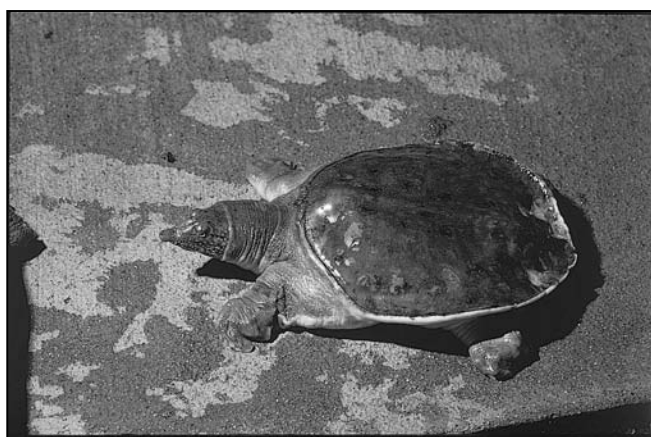
カミツキガメを発見した際、外来生物法に関する疑問等がある場合には、環境省野生生物課等に問い合わせして下さい。

③スッポン類

1) 分類、品種

スッポン類は、日本を含むアジア、アフリカ、アメリカに分布するスッポン科のカメで、20種以上に分けます。

スッポンは多くの種類がペットとして流通しています。小型のものでも30cmにまで成長しますし、大型のものでは1mを超える種類があります。



【ニホンスッポン】

2) 形態、生理、習性

スッポンの最大の特徴は背甲の表面に角質の甲板をもたず、代わりにうすい皮膚が覆っており、甲羅を形成する骨の板も他のカメより退縮しているため、全体に甲羅がやわらかいことです。また水底にいながらにして呼吸ができるように、甲長と同じくらいの長さまで

首を伸ばすことができます。このことは、このカメの攻撃範囲を知る上でも重要です。手足は遊泳に特化しており、全体が大きな水かきとして発達しています。陸上での歩行には向きません。

身近に生息するニホンスッポンは甲長 30cm 程度。コガシラスッポンは 1m、体重も 100kg を超えます。性質は概して臆病で攻撃的です。水底の砂泥質に全身を隠し、鼻先と目だけを出して獲物を待ち伏せするタイプが多いので、飼育下で全身丸見えな状態はストレスとなります。また、清掃や移動等の取り扱い時に怒らせるとさかんに咬み付いてきます。ほとんどが水中で生活しますが、特に小型の種類では積極的に日光浴をします。

3) 飼育上必要な設備、器材および環境

熱帯・亜熱帯性のものは、通年保温が必要です。温帯のものは外気温にまかせて良いですが、冬眠させないならば冬は保温します。水質の管理ならびに飼育施設の規模はワニガメに準じ、水底にはさらさらした細かい砂を敷き、潜ってからだを隠せるようにします。底砂は粒子に角がないものを選ばないと、皮膚や甲羅の皮膚を傷付けてしまうと言われています。

日光浴の設備をアカミミガメと同様の条件で設置します。日のあたる場所への水槽の設置も有効です。

スッポンの種類によっては、汽水域（淡水と海水が混じり合う河口域）に生息し、水質が高硬度の弱アルカリ性を好むものがおり、サンゴ砂等を濾材に混ぜて水質調節をします。おしなべて水質の悪化には弱く、容易に皮膚病になったり体調を崩しますので、強力な濾過装置と頻繁な部分換水（ただし急激な水質変化を避ける）が重要な鍵となります。

小型種であっても 30cm を超え、活発に活動する性質から考えても、飼育水槽は、ワニガメの施設と同等かそれ以上のものが必要で、大型種では、ペット飼育用品の概念から逸脱し、養殖漁業関連のメーカーに問い合わせる必要があるでしょう。

4) 飼い方のポイントと注意点

肉食性の種類が多いので、基本は市販の配合飼料で良いでしょう。餌付けが難しい種類もあります。配合飼料をよくふやかして、細長いピンセットやピアノ線に刺して、口もとでゆらすと食べることがあり、まずは人工的な餌の味を覚えさせます。販売されているのはたいてい数 cm の幼体なのですぐに食べ始めると思われますが、活きたアカムシから冷凍アカムシ、乾燥アカムシ、アカムシ風の配合飼料、一般的配合飼料といった順で餌を変えていく方法も有効です。入手も大変でコストもかかりますが、大型個体ではワニガメ同様に川魚やマウス、ラットの利用も必要となります。この場合、水質の悪化と過肥に注意します。また、植物質を多くとる種類もいますので、そのような種類は資料を調べた上で、適宜、メニューに植物を加えます。

逸走（脱走）の防止等は、ワニガメ等と同様に留意します。水槽のメンテナンスや給餌時に管理者が咬まれないように、皮手袋や、数十 cm の長いピンセット等を用いて安全を確保します。小さな子供が水槽に近寄らないようにします。

5) 健康と安全の管理

甲羅の潰瘍を含む、皮膚病が圧倒的に多い生物です。適切な水質の維持が肝要です。

④スッポンモドキ

1) 分類、品種

スッポンモドキは1種でスッポンモドキ科を構成しているカメで、甲羅にはスッポンに似て角質の鱗がありませんが、さわると甲羅が硬いので、スッポンとは違うことが分かります。ニューギニアからオーストラリア北部にいます。



【スッポンモドキ】

2) 形態、生理、習性

甲長70cmと大型になるカメです。大きな河川の淡水域から河口の汽水域、大きな池・沼等に生息し、魚や貝類のほか、果実等の植物質も多く摂食します。

3) 飼育上必要な施設・器材

基本的にこのカメは完全水棲で、広い範囲を自由に泳ぎまわりながら生活し、しかも甲長70cmの大型種であることから、飼育施設は少なく見積もっても養魚池レベルのものを用意しないと快適には生活させてやれません。直径5mの丸い養魚水槽の上からHIDランプを照らして、巨大な濾過装置で飼育水を循環させる。といった大がかりな設備が必要なペットです。

⑤ホルスフィールドリクガメ

1) 分類、品種

ホルスフィールドリクガメはリクガメ科のカメで、カスピ海周辺から東は中国まで広い分布をもつリクガメです。

2) 形態、生理、習性

甲長が約22cm、丸くて平べったいドラヤキのような形をしたリクガメです。分布が広いため、地域差は存在しますが、野生下では1年の8ヶ月を冬眠ないし夏眠して過ごす特殊なカメです。植物の生えるわずかな期間だけ活動し、あとは穴に潜んでい



【ホルスフィールドリクガメ】

ます。完全な草食性と考えておいて下さい。

3) 飼育上必要な設備と機材

日本では冬眠も含め屋外飼育が可能であり、穴を掘って脱走することさえ防げるならば、放し飼いの場所を確保して飼育するのがもっとも健康に良いと思われれます。リクガメ全般に言えることですが、運動が大切です。可能な限り広い場所を自由に歩かせることが大変重要です。

室内飼育の場合でも、22cm に成長した個体にとって、市販の飼育水槽は手狭で、十分に広いケージを必要とします。小動物用の藁を大量に敷いて飼育すると良いでしょう。足場が滑ると、四肢の発達に支障をきたすので、足をふんばって歩いているか観察する必要があります。上手に歩いていない場合は床材を工夫します。

日光浴は不可欠であり、屋外での日光浴の時間を設けることはもちろん、室内ではHID ランプを点灯して、太陽光を補います。飼育当初は、巣穴の安心感を再現するシェルターを用意してやると落ち着きます。大きな植木鉢を半分に切ったもの等が適切です。

4) 飼い方のポイントと注意点

わが国でもっとも安価に販売されているリクガメであり、輸入に対して死亡する数が異常に多いカメです。

輸入されたカメはほぼ 100% 野生採集個体で、大量の寄生虫を持っていることが多いので、購入と同時に新鮮な糞をもって動物病院に連れて行き、検便ののちに適切な処置をしてもらう必要があります。

餌はなるべく多くの種類の野草や野菜が必要です。桑の葉等、木の葉も良い餌となります。動物質の餌（ドッグフードやピンクマウス等）は決して与えないことです。

餌から十分な水分を補いつつ、時々温水に体を付け、大量の飲水と排泄を行います。これは結石の防止になります。さらに、温水浴の時には、糞をすることがあるので、排泄したての糞の検査をしたい時に便利です。

ちなみに、糞はコロっとしているのが正常で、練り歯磨き状であったり、葉がそのまま排泄されたり、ドブのような匂いがするのは異常です。

5) 健康と安全の管理

適切な餌と、十分な日光があれば、問題なく成長しますが、栄養過多で肥満や甲羅のズレ等を生じた場合は、餌やりのペースをやや落として調節します。ミネラルのサプリメントも適宜あたえ甲羅のカルシウム沈着を補います。

足のふんばりがきかない場所で長く生活すると巻き爪となり、指が変形しますので、歩き方や指の様子を観察しながら、床材を工夫します。

くちばしの変形も起こります。大きな変形がみられたら、餌が食べにくい等の障害が出る前に動物病院で麻酔をかけて削ってもらいましょう。

犬等に咬まれたり、ベランダから落下したり、車に轢かれる事故が起こります。甲羅の損傷

が軽度ならば治療は可能ですが、事故は予防しましょう。

同居のカメどうして強い個体と弱い個体の差が生じたら、別々に飼育しましょう。同種の仲間に対して思いやりのある生物ではないので、相手が餓死したりストレス死するまでいじめる傾向があります。

冬にはしっかり保温してしっかりライトをあてて飼育するか、しっかり冬眠させましょう。中途半端な温度にさらすと、どちらの生理状態にもいられずに体調を崩して死亡することがあります。なお、冬眠は失敗すれば死亡しますので、加温飼育が無難です。

⑥ケヅメリクガメ

1) 分類、品種

ケヅメリクガメはリクガメ科のカメで、アフリカのサバンナ地帯に分布しています。

2) 形態、生理、習性

大型で活動的なリクガメです。甲長は70cmを超え、大きな個体は一人の間では持ち運べないほど重くなります。最大級の個体では、甲長83cm、体重104Kgという記録が残っています。大量に食べ、大量に排泄します。



【ケヅメリクガメ】

乾燥系のリクガメで、大変丈夫で、急激

に成長します。強大な前足で穴をほり、日中の暑さをしのぐ習性がありますので、飼育下で放し飼いにしていると、隙間にもぐりこもうとして様々な、家財等を破壊します。

3) 飼育上必要な設備と機材

理想的には、牛の放牧場のようなスペースを確保して、広大な敷地を自由に歩かせ、生えている牧草を食べるがままにさせておくのが一番です。実際に、この大きくて活動的なカメを室内に持ち込んで飼育することは、室内でヤギと同居するような覚悟を必要とします。ただし、放し飼いにする場合、大量の排泄物をまきちらしますので、人間用の紙おむつを付ける等の工夫をします。また、激しく歩き回り、怪力で隙間にもぐりこみますので、家具を壊されたり、ものを倒されたりしないような場所を選ぶ必要があります。

HID ランプも倒されて火事にならないように設置します。

低温にも耐久性のあるカメですが、冬は保温して飼育します。保温の原則は背中からの強力なライトの照射で、やはり HID ランプが理想的です。腹を温めるマットヒーターだけで保温することは危険なので絶対にしてはいけません。

4) 飼い方のポイントと注意点

餌は植物食です。野菜等はコストがかかりますので、桑の葉や葛の葉等、野草を大量に調達します。干草に餌付けると冬の間の餌の管理が楽になります。ヘイキューブやチモシーグラス等、敷き藁兼用で与えると良いでしょう。餌を食べたら消化のために、背中に光線をあてて十分に体温上昇させてやりましょう。急激に成長しますので、ミネラルの補給と適切な日光浴が必要です。

外で飼育する場合、破壊力があるのでかなりしっかりした囲いを建築しないと脱走します。巨大な個体を自動車に轢いた場合、自動車への損傷が激しく、大変危険な結果を招きかねません。

5) 健康と安全の管理

脱水と高たんぱくな給餌（大豆等植物蛋白であっても過給は不可）ならびに運動不足で、膀胱結石になりやすく、手術しないと死亡するような重症も多いです。運動で十分に四肢を発達させ、十分に水を与え、かつ適切な餌を与えましょう。日ごろから、白い尿酸が排泄されているか観察を怠らないようにします。呻くような泣き声をあげはじめたら動物病院でレントゲン検査を受けるようにしましょう。

室内で、狭いケージで飼育する際、掃除が行き届かずにジメジメしていると、甲羅が感染症を起こしてしまいます。背中から十分な熱量と明るさをもった光をあてずに、マットヒーターだけを使用すると、過剰にヒーターの上で過ごしてしまい、低温火傷で甲羅が感染症を起こします。時々裏返して甲羅の覆面をチェックして、変色したり、じくじくしたりしていないか観察しましょう。

⑦インドホシガメ

1) 分類、品種

インドホシガメはリクガメ科のカメで、インド、パキスタン、スリランカに分布しています。

2) 形態、生理、習性

背の高いドーム型の甲羅と、黒と黄色の美しい放射模様をもつリクガメです。甲長は38cmになり、体積を考えればかなり大型のカメといえます。飼育下で24年3ヶ月間生きた記録があります。



【インドホシガメ】

モンスーン気候に生息しているため、極端な高温と乾燥、極端な集中豪雨という特殊な気候に適応しています。植物食が基本ですが、

他のリクガメよりは動物食に適応しており、飼育下で成長期の一時期、動物性タンパクを給餌することが推奨されています。

雨が降って湿度が上がった時に積極的な活動がみられたり、雨季にあわせて卵が孵化したりと、降雨に生活を依存しているようです。活動時以外の乾燥した季節は穴をほって隠れて過ごすことが多いようです。

3) 飼育上必要な設備と機材

基本的に高温で飼育します。他の爬虫類と同様に昼夜の温度差を付けることは重要ですが、日光浴をさせる場所以外の環境温度を昼 30℃、夜 28℃ほどと高めに設定し、日光浴させる場所では直下で 40℃近くになっても構いません。どちらかというとい隠遁性の強いカメですので、明るい光線を避けてシェルターに隠れる傾向にあります。必ず HID ランプのような強力なライトか、自然の日光にあたるようにしましょう。ただし、屋外での日光浴は、農業用の大きな温室の中で日光浴させる等、外気の寒冷にさらされないような工夫が必要です。

広い運動場所が必要なのは他の全てのリクガメと同様です。室内で飼育する場合は、コンクリートの桶を設置した飼育部屋全体を高温に保ち、各桶ごとにライトを設置します。

基本的には適度な乾燥を維持しますが、他のカメよりも湿度のある場所を好みますので、少し湿った床材に潜れる特殊な場所を別途設置したり、頻繁に温水浴（水温 35℃）させたり、朝夕に霧を吹いてやっても良いでしょう。この場合、時間がたてばすぐに乾燥状態にもどることを心がけ、衛生状態に気をつけます。

特にホシガメの子ガメは乾燥しないケージで高温を保って飼育することです。

4) 飼い方のポイントと注意点

餌は様々な種類の野草・野菜・木の葉を与えます。温度設定が適切なら毎日食べるだけ与えるようにしてもかまいませんが、肥満にならないように手足の観察をして下さい。

5) 健康と安全の管理

温度を下げないことが各種の感染症の予防となります。販売されているカメは例外なく野生個体なので、大量の寄生虫がいたり、輸入のストレスで弱っていたりします。まずは、完璧な飼育施設に迎え入れ、十分に水を飲ませ、獣医師の手によって駆虫を受けます。

温度管理は防水性のある精度の高いヒーターとサーモスタットを用いて行い、不意の故障にそなえて予備のセットも用意しておきます。

⑧アカアシガメ

1) 分類、品種

アカアシガメはリクガメ科のカメで、中央アメリカ南部から南アメリカに分布しています。

2) 形態、生理、習性

細長いドーム状の甲羅と、手足の鮮やかな紅色の模様が特徴です。大きさは 50cm に達し、

家庭で飼育するカメとしては明らかに巨大です。

熱帯雨林の林床を徘徊し、野草や落下した果物、きのこ類、動物の死体等を食べているため、植物メインの雑食性といわれています。隠遁性が強いですが、日光浴も必要とします。



【 アカアシガメ 】

3) 飼育上必要な設備と機材

広い場所で、高温(30℃前後。最低25℃)と適度な湿度を保ち、絶えず綺麗な温水に

浸かることができる環境を用意します。暗い場所を用意し、隠れられるようにし、開けた場所にはHIDランプを照射し木漏れ日を演出します。おそらくホシガメと同様に、部屋ごと保温して最低温度を確保するのが良いでしょう。季節の変わり目の低温であっけなく命を落とすことがあります。

保湿性の高い床材として赤玉土やヤシガラ等が推奨されますが、室内で衛生的に飼育するにはどう管理しきれないものではありません。土の上で飼育することを考える場合は、農業用温室に観葉植物を植え、熱帯植物園のようにして、そこで放し飼いにするような施設が必要でしょう。

4) 飼い方のポイントと注意点

餌は野菜や野草を中心に、果物類も添加します。果物は他のカメでは偏食に陥るうえに餌として適さないものですが、アカアシガメでは、積極的にメニューに加えて良いようです。ただし、あまり多くを占めないように与えます。そのほか、動物性の餌として、ピンクマウスやドッグフード、精肉類、九官鳥の餌等も与えます。これも多給による害をいつも考えながら与えましょう。

5) 健康と安全の管理

繁殖個体が流通のメインを占めるめずらしいリクガメですが、依然として野生個体も多くみられますので、入手時の管理が重要です。まず駆虫をすること、適切な環境で十分水を与えて腎臓機能を保護します。

また、ヘルペスウィルスのキャリアとして知られていますので、発症なく家に持ち込まれ、他のカメに感染する危険性もあります。

3. ヘビ

ヘビ類は、トカゲとともに有鱗目に入れられ、ヘビ亜目とされます。

ヘビ亜目 (約 2,400 種)	ニシキヘビ科
	ナミヘビ科 (ヘビ科)
	コブラ科
	ウミヘビ科
	クサリヘビ科
	メクラヘビ科
	ホソメクラヘビ科
	ジムグリニジヘビ科
	パイプヘビ科
	ミジカオヘビ科
	ヤスリヘビ科

①ナミヘビ類

1) 分類、品種

ナミヘビ類はナミヘビ科のヘビで、1500種以上のヘビが含まれています。ネズミヘビ (ナメラ)、キングヘビ、ゴーフアーヘビ、インディゴヘビ等の無毒蛇は、ペットスネークという言葉に代弁されるように、品種改良が行われ、もはや野生から捕獲せずとも累代繁殖した子孫のみで必要な個体数の生産がまかなわれている、きわめて稀な爬虫類群です。



【キングヘビ】

これらの蛇は、適度な大きさの飼育ケージと新鮮な水ならびに餌としてのげっ歯類が用意できれば、特殊な機材すら必要なく容易に繁殖まで楽しめます。

2) 形態、生理、習性

ナミヘビはおおむね 50cm から 2m 以内のサイズの種類がペットとして一般的です。

昼に活動するものもいれば夜に活動するものもありますが、おおむね飼い主の都合で餌を食べてくれますので、是が非でも日光浴が必要で世話のサイクルが動物中心となるカメとは大きく異なります。

餌は、ポピュラーなペットスネークの場合、100%げっ歯類で足りる。餌用に養殖された、様々なサイズのマウスやラットが冷凍状態で販売されていますので、これだけを与えておけば問題はありません。

巣穴をもつ種類がほとんどなので、隠れられる場所が必要です。

3) 飼育上必要な施設・機材・環境

ヘビは爬虫類の中でも、場所をとらずにコンパクトに飼育できるといわれています。たとえば、飼育ケージの長径はヘビの全長の3分の2、短径はトグロの直径の1.5倍もあれば良いといった具合です。1m ちょっとのヘビでも無理をすれば60cmの規格水槽で生涯飼育することができます。

ただし、これはあくまでもヘビに遠慮してもらっている場合で、途中から大きなケージに移し替えるとみるみる成長して、体格すら違ってきます。大きなゆとりあるケージに、木や岩等を配してゆったりと飼育してやると良いでしょう。

ケージの大きさは、 W (ヘビの種としての最大全長の倍) $\times D$ (ヘビの全長) $\times H$ (ヘビの全長) くらいにしてやると、ヘビ本来の美しい体型に育ち、種としての興味深い行動も観察できるようになります。

また、スジオナメラ (マレースジオ等) や、インディゴスネーク等、体長が2mに達する大型ヘビは、狭いケージで飼育すると、脱走しようとして執拗に鼻先を壁に押し付けたり、管理者や餌を攻撃する際に鼻先を壁にぶつけることが多く、鼻を損傷します。重症では骨が露出してしまい、感染症で死亡することもありますので、飼育部屋に十分なゆとりをもった大きさのケージを設置できるかどうか、あらかじめ検討してから飼育をはじめましょう。

これらの大型ナミヘビは、大型ケージさえ用意できれば、以下に記載する小型ナミヘビとまったく同様の管理方法で飼育を楽しむことができます。

また、ホソツラナメラ、マングローブヘビ、ミナミオオガシラ等の樹上棲の種類は、十分な高さのあるケージに、蔓や観葉植物を配した止まり木を設けます。ミナミオオガシラ、マングローブスネーク等は毒を持ちますのでケージはしっかり施錠する必要があります。

コブラ科やクサリヘビ科の多くも、ナミヘビ一般とほぼ同様の管理で飼育できます。

各都道府県の条例等によってペット用の販売は現実的ではありませんが、まれに国産のマムシ、ヒメハブ等が通信販売されていることもあり、地方によっては、ハブやサキシマハブ、タイワンハブ等が捕獲され一時的に保護しなければならない場合もあるかもしれません。毒蛇を管理する場合、まず、ケージにしっかりした施錠ができることが前提で、次に、管理者と毒ヘビとが過度に接近しないで済むようなケージデザインが必要です。例えば、ケージをなるべく広くとって、シェルターを離れた2箇所に設置し、ヘビのいない側を交互にメンテナンスしたり、ケージに仕切りの着脱機構をもうけ、ヘビを片側に追い込んだのちに仕切りをはめ、安全な側をメンテナンスするといった方法です。

取り扱いには皮手袋や丈夫な長靴を着用し、スネークフックやスネークトング等の道具を用い、ヘビの攻撃を避けられるようにします。

ケージを置く部屋は万が一ヘビが脱走しても部屋の中でカンタンに発見できるようにシンプルな作りであることが望ましく、部屋から外に脱出できない構造であることが前提です。ま

た、管理者は単独で世話をせず、へびと接触する場合には、第三者にその旨を伝えて作業をするようにします。さらに、種ごとの抗毒血清を準備し、その使用方法に熟知した医師の所在をあらかじめ確認しておきます。

ナミへびにはペット化されている種類だけでもきわめて多くの種類が含まれ、中には、高温を嫌い、日本の夏を越せない種類もあります。一方で、しっかりと保温して飼育しないと消化不良や感染症で死んでしまう種類もあります。冷房か保温か、飼育する種類にあわせてしっかり設定が必要です。

へびはよく水を飲む生き物です。また、暑い時、脱皮の時、体表にダニが付いた時等、全身を水に付けることがあります。へびがひっくり返せないくらいの適度な重さがある、中でトグロをまいても水がこぼれない程度の容量のある水入れを用意しましょう。

巣穴で生活するへびは、トグロがすっぽり収まるくらいの隠れ家を必要とします。市販のものや、植木鉢を削ったものを用意します。極端に樹上性に依存した種類では、天井付近に巣箱を付けてやると、掃除の時にへびを驚かせずに済むので便利です。そういった種類には木登り用の横枝を渡してやり、その枝にケージの外からスポットライトをあててやると、食後に腹を温めにきます。それができない場合は、ケージの底に一部、マットヒーターを敷いて、腹を温めて消化を助ける場所をつくります。食後の低温はへびの寿命を縮めます。

コンパクトに大量に飼育したい人は、引き出し式のケージ、ラックを用います。ケースの底には必要ならマットヒーターを敷きます。

4) 飼い方のポイントと注意点

餌はマウスを解凍して、38℃くらいの温度にして与えます。30cm 以上ある長いピンセットで、餌をへびの前に持っていくか、ケージに横たえて放置します。

へびが大きな餌を飲み込めるからといって、無理無理大きな餌を与えてはいけません。概ねへびの頭部と同じか、やや大きい程度の大きさのマウスをへびの食欲にあわせて好きなだけ与えます。腹がはちきれんばかりに大量に食べた場合は、ヒーターで十分に暖をとらせます。へびは消化能力に種差や個体差が大きく、あくまでの自分の飼育している個体がどのくらい食べてどのように消化するのか、よく観察しましょう。確実に消化された、密度の濃い、少量の糞となって排泄されるように給餌の量と間隔を決定します。

脱皮の前後は餌を食べません。目が白くなり、色がくすみ、やがて目がもとどおりの色になると、しばらくして脱皮がみられます。脱皮前に無理に捕獲したりして皮膚に傷がつくとそこから脱皮に必要な水分がうばわれて脱皮不全となります。脱皮前にも食べるような個体であっても、やはりこの時期はそっとしてやるのが無難です。

なお、脱皮前は一時的に湿気を要求しますので、ミズゴケの入った容器等を設置して脱皮不全を予防します。

餌は、マウス類だけで問題なく、たまに、爬虫類用のビタミンサプリメントを添加します。

ヘビは匂いに敏感なので、サプリメントはゼラチンカプセルに入れて、マウスの皮膚の下に忍ばせます。消化力の弱い個体を飼育している場合、マウスの尾と手足は除去し、背中中の皮も除去してやると、消化の助けになります。また、毛のはえていないピンクマウスのような小さいサイズの餌を与えることも消化不良の予防には有効です。

給餌と排便のペースを一定に保ちながら、適宜掃除をします。床材は新聞紙を幾重にも重ねたものが最適で、汚れた紙から順に捨てていくことでヘビにストレスを与えることなく管理できます。

水はなるべく頻繁に綺麗なものと交換します。

ヘビは餌と飼い主の指を区別ができない場合があります。餌やりには必ず長いピンセットを使い、マウスの臭いが手につかないように注意します。もし咬まれたらテレホンカード等を指と顎の間に差し込んでゆっくりとはがします。無理に引き剥がすと飼い主のけがも悪化しますし、ヘビの顎もこわれます。

ヘビは脱走する生物です。一度や二度は必ず逃げるといっても過言ではありません。

ケージは逃げないような工夫をして、逃がさないような管理をすることはもちろん、飼育ケージのある部屋からヘビが外に出ないように飼育部屋の入り口がしっかり閉まるようにします。ヘビが逃げたら、まず、ミズゴケの入ったシェルター等を部屋の四隅にしかけ、喉がかわいた時にもぐりこむように仕向けます。このようなトラップは念のため、飼育室の外にもしかけ、定期的に見回ると良いでしょう。

5) 健康と安全の管理

ヘビは適切な環境と餌を整えやすいペットなので、めったに病気はしませんが、湿度不足による脱皮不全や湿度の過多による皮膚病等は頻繁にみられます。

大きすぎる餌、与えすぎ、食後の低温での消化不良も要注意です。油の浮いた下痢便や嘔吐がみられたらまず餌やりの方法を見直すべきです。

複数での飼育は禁忌です。餌をめぐって、2匹がからみあい、どちらも命をおとすことがあります。

養殖個体中心のペット爬虫類であるにもかかわらず、伝染病の進入が後をたちません。コバエやダニ、水入れの共有が飼育施設内での感染に一役かっている様子です。新参個体の検疫も大切です。野生のヘビ等はむやみに持ち込まないようにしましょう。

6) その他特記事項

ミナミオオガシラ、タイワンスジオ、タイワンハブについては、外来生物法に基づく「特定外来生物」として指定対象とする方向で検討が進められています。指定された場合は、飼養、保管、運搬、輸入、譲渡等が原則禁止され、適切な飼養等を行うことができると認められる目的、施設、方法等の要件を満たしている者に限り主務大臣による許可をもって国内での飼養等が認められます。

なお、愛がん目的による飼養は、指定前より飼養等されていた個体であって、施設の許可要件を満たしておりかつ繁殖を行わない場合に限り、許可の対象となります。

ミナミオオガシラ、タイワンスジオ、タイワンハブを発見した際、外来生物法に関する疑問等がある場合には、環境省野生生物課等に問い合わせして下さい。

②ボア・ニシキヘビ類

1) 分類、品種

ボア・ニシキヘビ類はボア科のヘビで50種以上に分けられています。アジア、アフリカ、オーストラリア、アメリカと全ての大陸にいます。5mを越える巨大な大蛇も含みますが、小さな種類、中型のものもたくさんいます。ボア類は卵胎生で、ニシキヘビ類は卵生です。おもな種類は、ボールニシキヘビ、アミメニシキヘビ、ビルマニシキヘビ、ミドリニシキヘビ、カーペットニシキヘビ、ボアコンストリクター、エメラルドツリーボアがあげられます。



【ボールニシキヘビ】

2) 形態、生理、習性

ボールニシキヘビ、ミドリニシキヘビ、エメラルドツリーボア、カーペットニシキヘビ等は全長が1.5m前後。大きくても2mほどで、大蛇というイメージがありませんが、アミメニシキヘビでは最大7m近くまで、ビルマニシキヘビも4m近く、ボアコンストリクターが3mほどにまで成長し、太さや重さを考慮すると、人が一人で取り扱えない大きさの生物になります。事故が起きる、起きないは別として、人を殺傷する能力をそなえたペットだということを自覚しましょう。

完全樹上性（ミドリニシキヘビ、エメラルドツリーボア）から半樹上性、地上性（あるいは地中性）まで様々な生活様式を持ちますが、完全樹上性のものを除けば、基本的にはナミヘビの飼育の延長線として考えることができます。体のサイズにあった様々な生物を捕食し、おおむね熱帯雨林や熱帯サバンナに生息しています。

3) 飼育上必要な施設、機材、環境

大きくなるとはいえ、破壊的な生物ではなく、かつ運動量も限られているので、大蛇のイメージの割には狭い場所に押し込めて飼育することができます。市販の120cm幅の爬虫類ケージでも2.5mまでの大蛇は飼育できますし、環境抵抗で、成長が止まる個体も多いようです。

しかし、アミメニシキヘビやビルマニシキヘビは、普通に飼育していても楽に4mに到達し

ますので、種の最大全長に達していなくても、もはや普通のケージでは飼育できません。

完全樹上性の種類は、高さのあるケージの中段に止まり木をセットし、ケージの床に大きな水入れを設置してやり、ケージの前面を布等で目隠しすると落ち着いて飼育できます。水入れは主として湿度の維持と水浴のために、飲み水は別途、朝夕の散水によって補います。水は気温と同じくらいまで温めて散水します。ケージの床は排水機構を持たせます。

いずれの種類も昼は28℃前後、夜間は26℃前後を維持し、餌を与えたあとは特に床暖房で腹を加温してやります。

4) 飼い方のポイントと注意点

ボア・ニシキヘビの仲間は大型になる種類が多く、飼育の基本的な部分はナミヘビと同じですが全てにおいて規模が異なりますので飼育には相当の覚悟が必要です。ナミヘビ程度の飼育設備で飼育できるボールニシキヘビは、大蛇の中でもペット向きといえる種類です。丈夫で、それなりに大蛇の風格を持っていますが、一年のうちで餌を食べる時期が限られていて、食べる時期に一気に食べさせて体格と栄養を備蓄させ、食べない時期には、水を新鮮に保つだけで一切干渉しないといった特殊な管理をします。

樹上性のミドリニシキヘビやエメラルドツリーボアは神経質で、温度や湿度の要求が厳しく、多くは野生採集個体であるため、初心者には不向きです。始めに完璧なケージセットをして、あとは個体が慣れるまで、ケージを布で隠して一切干渉せず、小鳥や生きたピンクマウス等を駆使して餌付けを行います。寄生虫が多いので、餌付いたらすぐに餌に駆虫薬を仕込むか、いちばん最初の導入時に一気に駆虫を完了してからケージに入れるようにします。飼育者をケージ越しに攻撃してくる個体は容易に吻端をけがして、口腔内潰瘍等になります。「大きくて背の高いケージに止まり木を付けて湿度を高くとり通気も確保し、高温を維持して、目隠しをして干渉しない。」これらの基本を守っても最後まで餌付かず死亡するケースも多いです。

ボアコンストラクターは温度を高め設定して餌と飼育ケージをサイズアップすれば、ナミヘビと同じような感覚で飼育できます。飼育下の繁殖個体がペットとして出回ることが多いので、性質も温和で、事故も起きにくい種類といえますが、条例に合致した完璧なケージを用意する必要があります。

大蛇を飼育する上で問題となるのは脱走した場合に巻き起こる社会不安や、ケージの設定ミスによる火災の発生等です。強化ガラスの水槽も、水入れと水槽の隙間にヘビがもぐりこんで力めば割れますし、保温球やライトがケージの中にあれば、これも破壊される危険があり、火災の危険が生じます。風呂や日光浴を、犬の散歩よろしく外で行えば、脱走の危険も増します。二重三重の安全策をとって、飼育に臨むべき生物です。

5) 健康と安全の管理

新しい個体の導入によってウイルス疾患がアウトブレイク^{*}したり、保温設備の作動不良で一夜にして風邪や消化不良になったり、保温器具によって火傷をしたり、生きた餌の逆襲によ

ってけがをしたりすることがあります。

※アウトブレイク：突発性に感染症が発生し、次々と伝播していく様子。

(6) 特記事項

歯が鋭くて長く、たくさん生えています。咬まれると相当なけがとなります。普段から飼育者の動きと餌を関連づけないような取り扱いをしましょう。長いピンセットやスネークフックやスネークトング、肩まである革手袋等、安全を確保するための道具もそろえましょう。

4. トカゲ

トカゲ類は、ヘビとともに有鱗目にいれられ、トカゲ亜目とされます。

トカゲ亜目	イグアナ科
	アガマ科
	カメレオン科
	ヤモリ科
	トカゲ科 (スキネク科)
	カナヘビ科
	ドクトカゲ科
	オオトカゲ科
	ヒレアシトカゲ科
	ヨルトカゲ科
	テグー科
	ヨロイトカゲ科
	アシナシトカゲ科
	ワニトカゲ科
	ミミナシトカゲ科
ミミズトカゲ科	

種類は3400種以上で、種類は現存する爬虫類では最も多いグループですが、四肢の有るもの、まれですが二肢のもの、無いもの等、外見上も変化の多いグループです。四肢の無いものはヘビと似ていますが、動くまぶたがあったり、尾が自切したりして、ヘビには無い特徴を持っています。餌は種類によって様々なものを食べます。

①ヒョウモントカゲモドキ

1) 分類、品種

ヒョウモントカゲモドキは、ヤモリ科のトカゲモドキ亜科に属するトカゲです。トカゲモドキ類はアジア・アフリカ・アメリカに20種以上が分布しています。日本には南西諸島（沖縄・徳之島等）にいます。トカゲモドキのなかで最も良く知られているのが、パキスタンやアフガニスタン等に分布するヒョウモントカゲモドキです。飼いやすく、繁殖が容易なことから、様々な体色や模様のバリエーションが作られています。

2) 形態、生理、習性

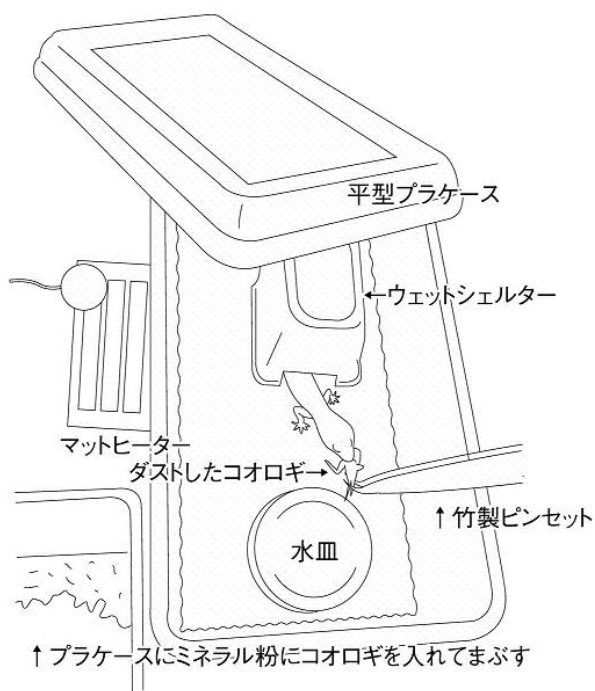
トカゲモドキとは妙な名前ですが、ヤモリでありながら、指に壁等に登るための吸盤が無い、動くまぶたが有る等、ヤモリ科の他のヤモリと違って、他のトカゲ的な特徴を持っている等ことからトカゲモドキと付けられています。寿命は飼育下で 28 年という記録があります。実際には 10 年を越すものはそう多くないと思われます。全長 25cm 位で、本来は夜行性です。卵生で、普通は 2 個産卵します。生まれたばかりの子は濃い横縞があり、斑点は成長につれ、徐々に出てきて、それにつれ横縞が消えていきます。慣れやすく、小さいので、危険性はありません。



【ヒョウモントカゲモドキ】

3) 飼育上必要な施設

ヒョウモントカゲモドキの場合、床には何もなくても良いのですが、新聞紙を敷いたり、小砂利を入れるのも良いでしょう。細かい砂は好まないようです。隠れ場所（シェルター）は必要です。市販のシェルターもありますが、新聞紙を入れれば、その下がシェルターになります。また、厚紙を波状に折って入れても構いませんし、板でU字溝のように作ったもので構いません。下に隠れられれば、それがシェルターとなります。排水はこのヒョウモントカゲモドキのように小さい種類の場合どちらでも良いと思いますが、ケージを水洗いする時には、あつた方が良いでしょう。ケージに排水孔を付けると、脱走経路（トカゲも餌も）にもなります。温度は 25～30℃。20℃以下または 32～33℃以上にはしない方が良いでしょう。湿度はやや乾いたという程度にし、水飲みは簡単にひっくり返らないものを用意します。水はいつも忘れずに、きれいなものを入れておきます。



【ヒョウモントカゲモドキの飼育ケージの例】

(注：ダストしたコオロギ＝栄養剤をまぶしたコオロギ)

4) 飼い方のポイントと注意点

餌はフタホシコオロギ（クロコオロギとも言う）等のコオロギ類、バッタ、蛾、ミルワーム等昆虫類、クモ、ミミズ等で、ピンクマウスも良い餌です。初めての餌は食べないことがある

ので、色々与えてみるのが良いでしょう。主食としてはコオロギで、栄養を高めるためにピンクマウスを時々与えるのが良いでしょう。ヒョウモントカゲモドキは馴れやすいので、餌はピンセットでいつも与えるようにすると、人の接近を恐れなくなります。注意することは、脱皮がうまくいかなかった時のことです。指先に脱け殻がたまると爪や指の脱落の原因になるので、気をつけピンセット等で取り除きます。繁殖期に雄同士は争うので、雄は1ケージに1頭にします。雌同士の同居は可能です。

5) 健康と安全の管理

飼っていて病気はあまりしないように思われます。温度管理、栄養管理をしっかりとして下さい。尾が太いのは栄養が蓄えられている証拠です。

②グリーンイグアナ

1) 分類、品種

グリーンイグアナはイグアナ科に属すトカゲです。イグアナ科は600種を超す大きな科です。単純にイグアナと言った場合、イグアナ科のトカゲを指す場合と、グリーンイグアナを指す場合があります。グリーンイグアナはアメリカ大陸のメキシコからブラジル南部、パラグアイまでと、西インド諸島に分布します。以下の「イグアナ」は「グリーンイグアナ」を指します。



【グリーンイグアナ】

2) 形態、生理、習性

グリーンイグアナは、小さい時は緑色でかわいらしく、つい飼いたくなりますが、大きくなると、小さい時は違い見事な容貌になります。餌が植物質なので飼い始めは簡単です。寿命は飼育下で20年近く生きたものがありますが、10年以上生きることは、そう多くはありません。全長1.8m位になります。

3) 飼育上必要な施設

グリーンイグアナは樹上性のため、ケージは他のトカゲ類より広さ、高さを必要とします。水入れはイグアナが入れるくらい大きいものを用意し、水の量はイグアナが入ってもこぼれない程度にします。イグアナは体が大きくなるので結構汚します。樹上生ですから、床だけでなく、とまり木にも壁にも糞が付きます。イグアナは自分の糞や尿で体が汚れるのをまるで気にしません。ケージを清掃するには水洗いが一番です。ですから、排水を十分考え、排水孔を付

けて下さい。温度は25～30℃位にしますが、温度差が付けられるのなら夜は22～23℃位にしましょう。日光浴はさせた方が良いでしょう。室内なら日当たりの良いところに置いて下さい。梅雨明けから9月まで、可能なら屋外飼育が望ましいでしょう。ただ元気が出ると野性が戻るのか、また馴れにくくなってしまうようです。健康か馴れか、どちらをとるか難しいところです。

4) 飼い方のポイントと注意点

餌は子供の時は昆虫類も食べますが、基本的には植物質を食べます。動物質は成長初期か体力が衰えている時以外は、あまり与えない方が良いでしょう。植物質なら家庭で食べるもので良いと思われがちで、またよく食べて成長しますが、ここに落とし穴があります。野生のイグアナが食べているのは野生に生えている草や木の葉、果実等です。あまりカロリーの高いものは食べていません。野菜や果物では高カロリーですし、含まれているものも違ってきます。フライ(「Iguana iguana : Guide for successful captive care.」Fredric L. Frye 著/1995年/Krieger Pub Co 1995年)によると、与える餌にはカルシウムがリンの2倍以上の比率で含まれていないと、カルシウムがイグアナの体から流出して失われてしまうのだそうです。イグアナの飼育が難しいのは、このバランスがうまく取れないせいでしょう。野草・木の葉を中心に野菜・果物を少し加えていくやり方が良いでしょう。給水は体が浸かるくらいが良いでしょう。床、壁、樹上と移動できるように、枝を配置します。

イグアナはあまり人を恐がりませんから、掃除していると寄って来て出ようとします。勝手に出させて後で戻すか、つまんで向きを変えたりします。無理やり捕まえてはいけません。掃除の時は窓際での日光浴も良いでしょう。個体によっては、飛び出して逃げるものもいますので、こういう個体には十分気をつけて出さないようにして下さい。

グリーンイグアナの性質は比較的温和です。動物を扱う場合、こちらが構えると動物も構えます。最初は逃げるかもしれませんが、気長に少しずつ触れて下さい。怯えている時は深追いしてはいけません。グリーンイグアナは、すぐ驚いて走りだします。走りだしても、ぶつからないだけの広さがあれば良いのですが、なかなかそうもいきません。機会あるごとに触れて、餌もピンセットから摂るように続けます。顎の下に触れられるようになればあとは時間だけです。片手を前足の間に差し込んで少し体を持ち上げます。繰り返しながら、今度は後足です。こうして続けていきますが、気をつけなくてはいけないことがあります。まず爪が結構鋭いということです。本当に小さい時は良いのですが、少し大きくなると、押さえたりする時に暴れると、私たちの肌には簡単に引っかき傷ができます。大きくなるとおとなしくても、体に這い上がらせたりすると、やはり引っかき傷ができます。厚手のシャツを着たり、革手袋を着けたりして下さい。嫌なことをすると、口を開けて咬もうとします。歯は小さいですが鋭く、かみそりのように切れます。咬まれないように撤退します。根気と我慢が必要です。

また、雄は大きくなると気が荒くなり、他に雄がいればけんかを始めます。逃げる広さがあ

れば良いのですが、逃げきれないと大けがをします。したがって、雄は分けて飼うしかありません。触るのも避けた方が良いでしょう。これは個体次第です。飼育しているだけなら迷惑や危害等は本質的にはありませんが、逃げだすと体も大きいため、不安を与えることは間違いありません。絶対に逃がしてはいけません。

5) 健康と安全の管理

主な病気と予防としては、風邪・肺炎が挙げられ、飼育温度が低いとかかりやすくなります。爬虫類の飼育は、温度管理ができれば半分は成功したとあって良いでしょう。風邪等の他、皮膚病も起こりやすい病気です。

また、グリーンイグアナは、すぐ驚いて走りだし、壁等にぶつかって口先をつぶすことがよくあります。その他、金網のケージでは金網に爪や指をひっかけ、爪や指先が脱落するようです。

火傷についても注意が必要です。暖房用の電球や床暖房で起こります。かなりの低温にセットしておいても起こることがあります。

③フトアゴヒゲトカゲ

1) 分類、品種

フトアゴヒゲトカゲはアガマ(キノボリトカゲ)科のトカゲで、オーストラリアの中東部の内陸部に分布します。フトアゴヒゲトカゲの属するアゴヒゲトカゲ属は8種が含まれて、一部重複しながら、オーストラリアに広く分布しています。

なお、以下に述べるフトアゴヒゲトカゲの飼育方法は、他の多くのトカゲ類にも応用がききます。67 ページの図にあるような立体的飼育設備を準備すると、ハリトカゲ類(アオハリトカゲ、マラカイトハリトカゲ等)やアノール類(グリーンアノール、ブラウンアノール等)、平面的飼育施設を準備するとカナヘビ類(ホウセキカナヘビ、カナリアカナヘビ等)といった昼行性トカゲの管理が可能です。ただし、餌や温室度等の設定は、種類ごとに微妙に対応するようにします。たとえばフトアゴヒゲトカゲは乾燥した状態を好みますが、グリーンアノールやブラウンアノールは、観葉植物を配して霧吹きをし、若干の湿度をもたせたり、餌としては口に合うサイズの小型の昆虫を用意したり、あるいは植物質の餌が必要なかったり等、細部の相違は考慮する必要があります。



【フトアゴヒゲトカゲ】

2) 形態、生理、習性

アゴヒゲトカゲの名は、驚くと口を開けて喉の「あごひげ」を広げて威嚇することからきています。寿命は飼育下で10年生きた記録があります。全長は約50cmを超えるものがありますが、通常は30cm位です。危険性はありません。臭いはたいしたことなく、鳴き声も出しません。

3) 飼育上必要な施設と機材

全長30cmのものなら60cmのケージで2～3頭飼えます。床が乾いた状態に保ってやります。温度は高めがよく、30℃を少し超すくらいにし、夜は温度差を付けるなら20℃程度にすると良いでしょう。日光浴はさせた方が良いのですが、体温が上がった時に逃げ込めるような日陰を作っておきます。

4) 飼い方のポイントと注意点

フトアゴヒゲトカゲの餌の狩猟方法は座って待つやり方です。近寄ってくる昆虫やクモ等の無脊椎動物、カエル、トカゲ類、小鳥等の動物質を半分食べ、残りの半分は植物を食べています。飼育下の餌はコオロギ、ミルワーム等の昆虫類、ピンクマウス、小松菜、クローバー、タンポポ、果物等です。

5) 健康と安全の管理

脂肪肝はアゴヒゲトカゲ類によく見られる病気で、肺炎も多い病気です。これらは飼い方や餌、飼育温度が適正ならば防げます。太っているように見えても栄養が偏っていることがあります。高カロリーな餌は減らしていくべきでしょう。

6) その他特記事項

グリーンアノール、ブラウンアノールについては、外来生物法に基づく「特定外来生物」として指定対象とする方向で検討が進められています。指定された場合は、飼養、保管、運搬、輸入、譲渡等が原則禁止され、適切な飼養等を行うことができると認められる目的、施設、方法等の要件を満たしている者に限り主務大臣による許可をもって国内での飼養等が認められます。

なお、愛がん目的による飼養は、指定前より飼養等されていた個体であって、施設の許可要件を満たしておりかつ繁殖を行わない場合に限り、許可の対象となります。

グリーンアノール、ブラウンアノールを発見した際、外来生物法に関する疑問等がある場合には、環境省野生生物課等に問い合わせして下さい。

④カメレオン

1) 分類、品種

カメレオンはカメレオン科のトカゲで、80種以上がアフリカとマダガスカルに半数ずつ、他に地中海沿岸から中近東にかけて数種分布しています。

2) 形態、生理、習性

カメレオンの特徴は体の色を変えること、舌をのばして餌をとること、等です。

寿命ははっきりしませんが、ジャクソンカメレオンが9年9ヶ月、パンサーカメレオンが5年2ヶ月等と長い記録がありますが、実際には飼育は極めて難しく、2~3年生きれば大成功で、1年生かしても立派です。

全長はメラーカメレオンやウスタレカメレオンのように全長80cmになるものがありますが、20~30cm位のものの方が多いようです。数cmにしかない種類もあります。カメレオンは結構速く成長し、半年から1年で性成熟します。臭いは特にありませんが、糞等を溜め過ぎなければ良いでしょう。鳴きません。



【パンサーカメレオン】

3) 飼育上必要な施設

ケージは市販されている爬虫類用ケージ、水槽、鳥かご等何でも構いませんが、通風は良い方が良いので、水槽ではない方が良いでしょう。樹上生ですから高さが必要です。木の枝を入れてやりますが、カメレオンが掴めるようあまり太くない枝が適当です。葉についた水滴を舐めさせるため、植物をいれたり、ホンコンフラワーを入れたりします。床にも降りますが、ほとんど樹上で過ごしますから、枝や葉は豊富に入れ、これらは隠れ場所にもなります。温度は25℃位にし、赤外線電球で一部温度が高い所を作ってやります。カメレオンは色々な種類がありますから、要求する温度も様々です。赤外線電球の近くによく行っているようならば温度が低いと思われれます。逆にまるで近寄らないなら、もっと温度が低い方が良いかもしれません。日光浴は必要です。通風は必要で、ダメなら扇風機を使うのも良いでしょう。

4) 飼い方のポイントと注意点

餌は基本的に生きた昆虫類です。動かないと興味を示しません。コオロギ、ミルワーム、ジャイアントミルワーム、カイコ(幼虫)、ブドウムシ、ヤナギムシ等購入できるものを与え、バッタ、イナゴ、セミ、カマドウマ、ゴキブリ、チョウ、カマキリ、昆虫ではないがクモ等採集できるものも利用します。カメレオンでやっかいなのは、突然食べなくなることです。餌を変えると食べるのがよくあるので、いろんな種類が必要となります。ピンクマウスも食べることがありますから、たまにはいいでしょう。餌は大きすぎではいけないのはわかってはいますが、小さすぎる餌も疲れるのか、少しく食べてやめてしまいますから注意が必要です。カメレオンはあまり溜まり水を飲まず、葉についた水滴を舐めるので、給水は水滴を落とす装置を作ったり、霧吹きで朝夕2回以上、カメレオンのいる近くの葉に吹きかけてやります。カメレオンは動きは遅いのですが、結構動きまわります。力はあまりありませんが、ケージのフ

タが開いていれば逃げる場合があります。カメレオンは神経質なので、不必要に持ったり、触ったりして、ストレスを与えない方が良いでしょう。カメレオンは小さいうちはともかく、結構争うのでケージが狭ければ1個体で飼うようにします。

5) 健康と安全の管理

カメレオンは健康状態のいい時は、色が明るく、動きにも張りがあります。体色がくすんだり、黒ずんでいるのは、温度が低いせいかもしれません。落ち着かないのは温度が高いとか、隠れ場所がないということが考えられます。歯ぐきのチーズ様の膿がついているのはマウスロトという病気に罹っている証拠です。カメレオンはやっかいな動物ですから、よく観察してストレスの原因にならぬよう扱わなければなりません。病気に対して注射はよくないようで、飲み薬で対応した方が良いでしょう。栄養が良いかどうかは、尾の付け根の背側を観察し、痩せて骨がごつごつしているかどうかで見ます。清潔に保つことは飼育の基本ですが、カメレオンにストレスを与えないようほどほどにして下さい。

6) その他特記事項

カメレオンは、飼育が非常に難しい動物で、大半は飼い始めてすぐに原因不明で死んでしまうでしょう。まず餌が確保できるかどうかです。カメレオンはほとんど熱帯・亜熱帯に分布していますから、夏も冬も餌を与えて飼うことが必要です。少なくとも数種類の餌の目処がたたねば不可能です。

⑤アオジタトカゲ

1) 分類、品種

アオジタトカゲ類はオーストラリアとニューギニアに分布しているトカゲ（スキנק）科のトカゲです。アオジタトカゲ属は約10種が含まれます。アオジタトカゲの名がついているのは5種です。この中で一番よく知られているのはオーストラリアの東部・北東部に分布しているヒガシアオジタトカゲです。以下に述べるのは、断らない限りヒガシアオジタトカゲです。



【ヒガシアオジタトカゲ】

2) 形態、生理、習性

アオジタトカゲの名は、突然口を大きく開き、青い舌を出して威嚇することからきたと思われます。馴れてくると口はあまり開かなくなります。寿命は10年位です。全長は大きくなると60cm位になりますが普通は30~40cm位です。1度に6~25頭の子を産みます。危険性はありません。時々口を開けて威嚇しますが、気をつけていれば、たいしたことはありません。

3) 飼育上必要な施設と機材

ケージは飼う個体の大きさ、一緒に飼う個体数によりますが、長さ 60cm 位のものが基本かと思えます。水入れはあまり水に入る種類ではないので、大きなものは必要ありません。床は乾いた状態に保って下さい。飼育温度は 25～30℃にし、日光浴はさせた方が良いのですが、体温上昇は死につながりますから、日陰等体を冷やせるよう気をつけて下さい。

4) 飼い方のポイントと注意点

餌は昆虫、カタツムリ、花、果実等です。家庭で食べる野菜、果物類を色々与えてみてください。足も短く、動きも遅いので、逃げることをあまり注意しなくても良いかもしれませんが、ねこ等がいたら、いたずらされないよう気をつけて下さい。

5) 健康と安全の管理

脱皮の時、指先に皮が残ることがあります。時々ピンセットではがしてやります。取れにくいようでしたら、水でふやかして取ってやります。それでもだめなら食用油を少量たらしてから取ります。

⑥オオトカゲ

1) 分類、品種

オオトカゲはオオトカゲ科のトカゲで、30 種以上がアジア、アフリカ、オーストラリアにいます。

2) 形態、生理、習性

オオトカゲといっても、3m を超す種類から 20cm 位の小さな種まで大きさは様々です。3m を超すのはコモドオオトカゲとハナブトオオトカゲの 2 種だけです。舌は他のトカゲとちがいはヘビと同じです。寿命はたいていの種類で 10 数年だろうと思われます。危険性があります。オオトカゲは馴れるものと馴れないものの差が極端です。咬まれれば危険性が大きな種類がおり、歯は鋭いので気をつけて下さい。3m を超すコモドオオトカゲやハナブトオオトカゲは、案外慣れやすい方に入ります。

3) 飼育上必要な施設

ケージはある程度動きまわれる大きさにし、水槽でも構いませんが、しっかり付けられるフタが必要です。フタは重しをしておく方が安心です。水飲みは体を丸めてオオトカゲがつかれ



【 コモドオオトカゲ 】

る程度の大きさや深さが必要です。結構汚しますので、簡単に水洗いできるものが望ましく、排水は重要です。温度は 25～30℃にし、湿度は重要です。日光浴は必要ですが、体温が上がりすぎると死んでしまいます。日陰等体温を下げられる所を必ず用意して下さい。乾燥が好きな種類から、かなり湿度が高いのが好きなものまで様々です。湿度は高くてもムレない方がよい等、条件が難しいものまであります。

4) 飼い方のポイントと注意点

餌は大部分が肉食性ですが、果物を食べるものもあります。一般に与える餌は、大きなものではラットやマウス、ヒヨコ、馬肉、レバー等です。小さな種類や小さい時は昆虫やピンクマウスを与えます。ネズミ類のように栄養価が高いものを減らし、ヒヨコや馬肉やレバー等様子を見ながら増やして下さい。水飲みの中で糞をすることが多く、汚れていたら取り替えて下さい。逸走（脱走）防止には留意して下さい。慣らすのなら、触ってやるしかありません。上手に触れば、暴れないかもしれません。触る側が、嫌がらないよう触ると考えて下さい。

5) 健康と安全の管理

主な病気と予防については、風邪・肺炎、金網のケージによるトラブル、火傷等がありますので、グリーンイグアナの項を参照して下さい。

オオトカゲは、傍目には仲良く過ごしているように見えるのですが、突然争うようになります。逃げきれぬほどの広さはケージでは無理でしょう。争いが始まったら、すぐ分けた方が良いでしょう。

○ 資 料

【哺乳類参考】

- ・今泉吉典監修『世界哺乳類和名辞典』 (株) 平凡社、1988
- ・正田陽一著『家畜という名の動物たち』 (株) 中央公論社、1983
- ・石川祥子著／小暮規夫監修『初めての人の犬のしつけと飼い方』 (株) 西東社、2001
- ・西東社出版部編『子犬の飼い方・育て方』 (株) 西東社、2002
- ・鈴木立雄、小方宗次監訳『犬種と疾病』 文永堂出版 (株)、1989
- ・『愛玩動物飼養管理士教本 (2級・1級)』 (社) 日本愛玩動物協会
- ・『飼育読本シリーズ』 (社) 日本愛玩動物協会
- ・D.W. マクドナルド編・今泉吉典監修『動物大百科』 (株) 平凡社、1986
- ・宇田川龍男著『ハムスター・ウサギ・リス・モルモットの飼い方』 (株) 梧桐書院、1996
- ・宇田川龍男著『ハムスターの本』 モンキーブックス、1988
- ・道行めぐ著／平井博監修『かわいい小動物の飼い方』 (株) 西東社、1998
- ・霍野晋吉監修『ウサギとハムスターとフェレットBOOK』 成美堂出版 (株)、1998
- ・霍野晋吉監修『ハムスター・ウサギ・リスたちと暮らす本』 成美堂出版 (株)、2001
- ・福田啓一監修『リス ハンドブック』 (株) あおば出版、2002
- ・長坂拓也著『ハリネズミクラブ』 (株) 誠文堂新光社、1997
- ・中山沙織著『かわいい小動物の飼い方・育て方』 (株) ナツメ社、1997
- ・山根義久、長谷川篤彦監修『メルク獣医マニュアル第8版』
(株) 学窓社、2003 (発刊予定)
- ・Toni Danzig -Project Coordinator and Editor; Biological Values for Selected Mammals,
Third Edition, American Association of Zoo Keepers, Inc. 1992
- ・清水悠紀臣ほか編『獣医伝染病学 (第四版)』 近代出版、1995
- ・今泉吉典監修『世界哺乳類和名辞典』 平凡社

【鳥類参考】

- ・『小鳥のお医者さん—Q and A 式飼育方法』 あおば出版 1999
- ・『新 小鳥のお医者さん—楽しく学ぶ飼育のしかた』 あおば出版 1999
- ・Mr. & Mrs. Harrison 著/伊東 登訳『鳥類の内科および外科臨床—鳥類の飼育を含む—』 L L L. セミナー1997
- ・成島悦雄『Exotic Animal Formulary—エキゾチックアニマルの薬用量マニュアル』 インターズ—2003
- ・Joseph M. Formulary 『Parrots of The World』 1978
- ・Rosemary Low 『Parrots : Their Care and Breeding』 1992
- ・Rosemary Low 『Cocktails in Aviculture』 1994
- ・川尻和夫、立松光好『原色飼鳥大鑑 vol.1』 ペットライフ社 1982
- ・川尻和夫、立松光好『原色飼鳥大鑑 vol.2』 ペットライフ社 1984
- ・川尻和夫、立松光好『原色飼鳥大鑑 vol.3』 ペットライフ社 1988

- ・ デビッド・アルダートン著『決定版ペットバード百科』誠文堂新光社
- ・ 『ペットの飼育事典』小学館
- ・ 『新版鳥獣原色大図説』講談社
- ・ 社団法人 日本愛玩動物協会『愛玩動物飼養管理士教本（2級）』
- ・ 社団法人 日本愛玩動物協会『飼育読本「手乗り文鳥の飼い方」』
- ・ 社団法人 日本獣医師会『学校飼育動物の診療ハンドブック』
- ・ 江角正紀『野鳥のヒナと出会ったら』
- ・ 町田英文『大型鳥、猛禽類の飼い方』有紀書房
- ・ 『図解 動物飼育の事典』
- ・ 野生動物救護ハンドブック編集委員会編『野生動物救護ハンドブック』文永堂出版
- ・ （『日本産野生動物の取扱い』）

【爬虫類参考】

- ・ Fredrick L. Frye（著）/鈴木哲也（訳）/松原哲舟（監訳）『飼育下の爬虫類の食餌』LLL. Seminar 発行
- ・ Fredrick L. Frye（著）『Reptile Care』THF
- ・ Mader（著）『Reptile Medicine and Surgery』Saunders
- ・ 隔月刊情報誌『クリーパー』クリーパー社
- ・ 千石正一監修『爬虫類・両生類800種図鑑』ピーシーズ、1996
- ・ 千石正一著『爬虫両生類飼育図鑑』マリン企画
- ・ ロバート・デイヴィス、ヴァレリー・デイヴィス著/千石正一監訳/『爬虫両生類飼育入門』緑書房 1998

【その他】

<関係法令・条約等参考ホームページ>

環境省 (<http://www.env.go.jp/>)

- ・ 動物の愛護及び管理に関する法律
 - ・ 家庭動物等の飼養及び保管に関する基準
- ・ 特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律
- ・ 絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律
- ・ 鳥獣の保護及び狩猟の適性化に関する法律
- ・ 生物多様性条約
- ・ 生物多様性国家戦略

厚生労働省 (<http://www.mhlw.go.jp/>)

- ・ 狂犬病予防法
- ・ 感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律

農林水産省 (<http://www.maff.go.jp/>)

- ・ 家畜伝染病予防法

外務省 (<http://www.mofa.go.jp/mofaj/>)

- ・ワシントン条約

文化庁 (<http://www.bunka.go.jp/>)

- ・文化財保護法

家庭動物等飼養保管技術マニュアル

環境省自然環境局総務課動物愛護管理室

〒100-8975 東京都千代田区霞ヶ関1-2-2

電話：03-3581-3351

請負者：社団法人 日本動物保護管理協会

〒107-0062 東京都港区南青山1-1-1 新青山ビル西館23階

電話：03-3475-1965 FAX：03-3475-1697

発行：2005年3月

【 写真提供 】

熱川バナナワニ園

財団法人 東京動物園協会

札幌市円山動物園

社団法人 日本愛玩動物協会

東京都恩賜上野動物園

東京コミュニケーションアート専門学校

※無断で本書の全部または一部の複写・複製・転記載

および磁気または光記録媒体への入力等を禁じます。

※本書は「グリーン購入法」に係る環境物品調達基準に

適合する再生紙を利用しています。